

武蔵野プレイス（仮称）専門家会議（第6回）会議録

- 日 時 平成 18 年 11 月 13 日（月）午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分
- 場 所 市役所 6 階 601 会議室
- 出席者 清水忠男副委員長、新谷周平委員、栗田充治委員、小林麻実委員、近藤康子委員、武蔵野市図書文化専門委員、設計者川原田康子(有限会社 Kwhg)、事務局（企画政策室長、企画調整課新公共施設開設準備担当課長他）、傍聴者 16 名

○清水副委員長 こんにちは。副委員長の清水です。遅れて申しわけございません。

きょうは、委員長の鬼頭先生が急にぐあいが悪くなったということで、私が代理で進行を務めさせていただきます。

きょうは、そもそも鬼頭委員長からのご提案で、基本設計をなさった川原田さんに、これまでの経緯を踏まえまして設計の方としてどういう解釈になるのか、あるいは可能性などを検討していただけないかというようなことだったと思います。それで、皆さんのお手元の方に、川原田さんからのそういった形のご提案と、栗田委員からメモの提出がございましたので、これについて栗田委員からご説明をいただくことになろうかと思えます。そういうことでよろしいですね。

では、まず川原田さんに、今回ご提出いただいたこれについてご説明いただきたいと思えます。

○事務局 事務局の方から資料の少し説明をさせていただきます。

A判の資料でございますが、表紙をめくっていただいて、その後に 1 から 13 まで川原田さんの方で書いていただいた提案書がございます。委員の方にはカラーで写したものをお出ししておりますが、そのほかの方については白黒になっておりますのでご了承ください。

それでは、この案を出すまでの経過を若干ご説明いたします。これまでの議論を踏まえまして、事務局、設計者それから図書館の職員等の意見を交えまして 2 つの案にまとめました。

まず、駐車場の出入り口の位置ですが、庁内検討委員会の技術部会で検討した結果、渋滞等の調査の結果を踏まえると西側に駐車場の出入り口を持つていくことが望ましいとの

結論を見出しました。また、駐輪場の設置については、自転車放置防止条例に基づく駐輪台数を敷地内に確保する。休日については、場合によってはあふれることも予想されるため、今後も高架下の駐輪場の確保の状況を見て、その後の進捗次第で対応して考えていきたいということになりました。詳細については、実施設計で詰めていこうかと思っております。

それから、清水副委員長から公園の地下利用についてということで、それについても意見交換をしたところ、都市計画公園については、地下といえども目的外に使用するのなかなか難しいという状況がありました。むしろ道路の地下を利用した方が可能性が高いという話でしたが、地下利用については費用もかかりますので、先ほど申し上げたようにJRの高架下の利用の進捗状況を見て考えていきたいという結論になりました。

駐車場については以上のような考えで、庁内検討委員会で話し合いが持たれました。それをもとに今回一応考えをまとめたのですが、駐車場の入り口の位置については具体的には書いてないのですが、それを踏まえて少し考えてみた、という経緯をご説明させていただきました。

1枚めくっていただいて1ページですが、Ⅰ案、Ⅱ案という形でご提示させていただいたのですが、詳しいことは、これから川原田さんの方から説明していただきたいと思うのですが、今までの議論の中で出された栗田委員の市民活動機能、それから新谷委員の青少年活動機能についての意見を取り入れて考えてみました。それから、近藤委員のフレキシビリティのあるスペースの確保について、前回の小林委員の具体的な提案とあわせて検討してまいりました。具体的には部屋、例えばスペースとかスタジオというような囲われたものを少しやめて、囲われない広いスペースを考えてみたということです。

これらを踏まえてⅠ案とⅡ案というふうにつくった中で、比較なんですけど、Ⅰ案は、鬼頭委員長の提案である図書館をできるだけ集約したいということと、今まで委員会に持ってきた意味合いを持たせたいというところの理論であります。Ⅱ案につきましては、3、4階のマガジンを4階のフロアに集約したもので、これは図書館の意見、意向を踏まえて基本設計をマイナーチェンジという形で検討したものです。

最後に、4階の部分ですが、どちらの案も清水副委員長からの公園の日影、景観等にも配慮してほしいという観点から、あくまでも機能を損なわず、4階をさらにセットバックできるように検討し、屋上庭園をできる限り確保するような考え方でまとめてみました。図面は、あくまでも参考としてお持ちしたものでございます。ゾーニング等で検討したもの

ですので、完成したものではございません。

一応、検討結果は以上でございます。具体的な説明については、川原田さんの方で説明していただきたいと思います。

○川原田 川原田です。よろしくお願いたします。

今回は、専門分野の研究をしている委員、あるいは実践でも活躍されている委員などに参加していただいて、大変前向きなそして具体的な議論がされていて、我々としても非常に触発をされながらたたき台というものをつくってみました。

たしか前々回ぐらいの議論だったか、図書館あり、青少年の場あり、NPOの場ありで、どうも総花的な感じがあるというようなお話もあったかと思います。確かに機能だけ並べてみると、一般的な複合公共施設というような感じを受けて、何だか贅沢な施設だなと思う方がいらっしゃるかもしれません。なぜこういう規模になるかという、この施設のコンセプト、理念というものが抜け落ちて、その機能だけを考えてしまうからではないか。今回の施設の場合は、ユーザーが知的な刺激を受けて元気になるような運営とつくりがあって、初めてこの施設の存在意義があるのではないかと考えていますので、まず素案の説明の前に、簡単に施設のコンセプトを整理しておいた方がいいのではないかとということで、画面の方にまとめてみました。

(パワーポイント)

武蔵野プレイスというのは、ただの図書館ではなくて、知的創造拠点ということで積極的な市民の交流の場として考えられています。これは、以前の委員会から提言されていたコンセプトですが、この施設を考える上で前提となるようなものではないか。そして、この知的創造拠点というのは何かというイメージが明らかになって、初めてこの施設がどうあるべきかという議論ができてくるのではないか。そのコンセプトに即して、使いやすいのか、あるいは施設の構成はどうあったらいいのかということを再度よく見ていただきたいと思っております。

そして、知的創造拠点というのは具体的にどういうものかという、大体大きくここに書いてある3つにまとめられるのではないかと思います。1つは拡張された図書館、2番目に地域の知を共有する場、3番目に知的活動を通して市民が市民に出会う場。こういうものを通して、よりよいコミュニティを醸成する場だということになってくるのではないかと思います。そして、こういう施設があることによって、武蔵野市がより魅力的なコミュニティであり続ける、そういう形になっていけると非常にいいのではないかと。

(パワーポイント)

まず、1番目の「拡張された図書館」ということですが、これは公共図書館がベースになっています。市民が一番長く滞在する公共施設の代表的なものが図書館だと思いますが、これを少しアレンジすることで市民同士の交流施設にできるのではないかと。これまで図書館に足が向かなかった人、特に青少年とか若いビジネスマンといった方を取り込んで、より広範な市民が訪れる場所にできるのではないかと。

これまでの図書館というのは、図書館という機能に特化することに重きを置いていて、あれをやっちゃいけない、これをやっちゃいけないということが多過ぎて、極端なことをいえば、ここでは声を出しちゃいけないというようなところでした。ところが、図書館というのは、もっといろいろな可能性を秘めています。ちょっとした話し合いができる場所があるとか、あるいはワークショップができるとか、集まりが持てるような場所があると、結構活動が広がっていくのではないかと。

知的活動というのは、何も1人で静かにやるだけではなくて、いろいろな人と協力してグループで何かをするということもあるのではないかと思います。また、図書館では音が非常に制限されていますが、多少音がしてもいいエリアがあって、そこではパソコンを持ち込んで作業をするとか、あるいはリラックスした環境で作業ができ、さらにコーヒーを飲みながら作業をするのもオーケーかなというようになっていくと、図書館というのは非常に魅力的なスペースになっていく。その結果、多様な市民が利用することになっていく。知的創造拠点のイメージの1つというのは、拡張された図書館というものではないかと思っています。

(パワーポイント)

2番目に、「地域の知を共有する場」ということになっていますが、これは先日の委員会でも話題になっていましたが、図書館が地域のカレッジセンター、地域情報を集めて、この地域には何があるかとか、あるいは初めてこの地域に来た人がここはどういう場所なのか、そういうセンターになれるといいということがあります。

それからもう1つ、知の共有ということで、武蔵野というところにはいろいろな活動をしている人が住んでいらっしゃる。学問的なことから音楽、演劇、あるいは芸術的なものなど非常にバラエティーに富んだ市民がいる。そういった方々に潜在するパワーを少しでも生かすために、この場所を使って市民による市民のレクチャーシリーズをやるとか、最近テレビで「情熱大陸」とか「トップランナー」とか「仕事の流儀」とか、いろいろな仕

事に打ち込む人の様子を見たり話を聞くとといった番組がとても人気がありますが、これの武蔵野地域バージョンみたいなものを作っていったらどうか。そういう活動を通して、地域にどういう人がいるのかとか、あるいは若い人が将来のことを考えたりとか、いろいろなつながりが生まれてくるのではないかと考えてみました。

そして、そういった記録を残してアーカイブ化しよう。今回、この計画の中にフォーラムという場所がありますが、もともとこのフォーラムというのは、そういった活動を行う場所として発想されたわけで、さらには知のギャラリーというのがありますが、これもただ書籍を置くというだけではなくて、そういった館の独自の理想像を展示する場であってもいいのではないかとということで発想されていたわけです。

(パワーポイント)

3番目に「知的活動を通して市民が市民に出会う場」ということで、ここで例としてご紹介したいのは、ソニーの新しいオフィスのお話です。以前のソニーというのは、合理性あるいは機能性という観点から部署ごとあるいは部門ごとにあちこちに分れていた。それがあるとき、真にクリエイティブなこととはどういうことかということ、異なる分野が共存する環境でこそ生まれるということに気がついて、今品川の方に大きなオフィスが建っています。そこでは関係ない部署の人であっても、できるだけほかの人が何をやっているのか見えるような場所をつくっておこうということが大きいポイントになっているそうです。そういうことをすることで、直接交流はなくても、間接的にあるいは潜在的に何か新しいことを生み出しやすい素地ができる。企業全体の活力を高めることができるのではないかと。これが知の交流の効果、あるいは双発性といわれるようなものではないかと考えています。

ここでポイントとなるのは、快適な空間があるということ、あるいは快適な場であること、そしてそこで多様な人々がそれぞれの活動にいそしんで、時間とかを共有するということだと思います。このようなクリエイティブオフィスのあり方が、知的創造拠点の1つのイメージとしてあるのではないかと思います。これを市民レベルに応用できるのではないかとこの見地で考えられたのが、この施設のコンセプトだと思っています。昔から図書館で勉強すると、はかどるということがありますが、これは多分周りの雰囲気によって勉強せざるを得ない、という感じに持っていかれるわけですが、そういうことをほかの活動にも広げていけるのではないかなと考えています。

今は、地域で人々が集まる環境というのは、ショッピングセンターのようなショッピン

グスペースぐらいしかないのではないかと感じています。例えば武蔵境でいうと、お隣のイトーヨーカ堂みたいなところですが、これだと消費者というのは育ちますが、本当の意味での市民というのは育ちににくい。そこに公共が知的創造拠点というものを整備する意義があるのではないかと。単なる図書館でもなければ、勉強スペースでもない、市民が市民に出会って、よりコミュニティを豊かにする場。それがこの武蔵野プレイスの基本コンセプトなんじゃないかと感じているわけです。

(パワーポイント)

次に、素案の説明に入りますが、これは本当にたたき台です。これから委員の方々に議論をしていただく大もとのたたき台ですので、これが何か決まっていることとかそういうことではなくて、これを参考にさらに議論を進めていただきたいと思います。

今回の委員会の大きな目的として、より使いやすい施設ということがありますが、これまで5回の委員会を拝聴してしまして、それぞれ相矛盾することもあり、なかなか1つの方向にまとまっていくのが難しいのではないかなと思います。まずお話として浮かび上がってきたのが、機能の融合するオープンな場というようなイメージではないか。これは、前回小林委員から非常に積極的な提案があって、何もカフェとか知のギャラリーとかフォーラムとか分けなくても、それらが全部一体になったようなスペースでやればいいんじゃないかと。また新谷委員からは状況的利用というキーワードをいただいています。目的的なスペースではなくて個人個人が居場所を確保できる、そういうあいまいな懐の深さみたいな場所が必要なんじゃないかと。それから清水委員からは、図書館も堅苦しいのはやめてもっと楽しくありたい。本の読み方も、もっといろいろあっていいし、例えばプレイスペースなんていうのも、もっとオープンでいいんじゃないか、というようなご意見もいただいています。それから近藤委員からは、名前を一時的につけたスペース、あるいは機能を限定するようなスペースはできるだけ少ない方がいいのではないかというお話もいただいています。さらに栗田委員からは、市民活動の様子が、活動にかかわってない人にもできるだけ伝わるようなということもいただいています。それから、きょうはいらっしゃいませんが鬼頭委員長からは、にぎわいのある1階のスペースというご提案をいただいています。

これを全部ひっくるめて、機能の融合するオープンな場というのがキーワードなのではないかと考えております。これを、名前をつけて「オープンプレイス」と右の下の方で書いております。

(パワーポイント)

この図の方で、左の図が今までのイメージです。これはちょっと暗くて見にくいので、お手元の資料と合わせて見ないと、パワーポイントだけでは難しいかなと思いますが、左側の方が、これまでどおりの機能が分かれたスペースが隣に並んでいるというようなものですが、右側の方の図を見ていただきますと、機能が限定されないオープンプレイスというのを広場のように真ん中に大きくとって、その周りに機能的に独立したスペースがちょぼちょぼとついている。これによって、オープンプレイスで小さなイベントなどを行える。それが、実は今までいっていたようなフォーラムの機能を果たせるのかもしれないと考えています。使いようによっては、スペースの接着部になってくるかもしれない。

こういう仕組みを各フロアに導入して、できればオープンプレイスがつながっていくような仕組みをつくっていったら、言うなれば6層の建物ですから、6つの広場が縦につながっているようなイメージ。さらに、外に公園がありますから、その場所も加えていくと、武蔵野プレイスは7つのオープンプレイスが緩やかにつながっている、そんな構造をつくっていくといいのではないかなというまとめ方をしています。

今のようなオープンプレイスというのをキーワードとして、2案ほど素案をつくっているわけです。ⅠとⅡというのは、特にどこが違うかということ、1階と4階のあり方の違いです。1階というのは、すべての利用者がまず体験する場所である。その場所をどう使っていくかということ。それから、1階は駐車場あるいはバックスペースというものがあるので、どうしてもほかの階よりも床の面積が小さくなってしまいますので、その辺も念頭に置いて考えていただきたいなと思います。それから、もう1つの特別なスペースとしては4階ですね。4階というのは最上階で、屋上庭園があって最も環境のいい場所である。この特権的な場所を、どう使っていくのがいいのかというあたりが、かなりポイントになってくるのではないかなと思っております。

(パワーポイント)

この断面図で、委員の先生方には色分けで示してあるのですが、一番話題になっていましたのが図書館の位置ですね。紫色に塗っているものが、図書館のいわゆる書籍がある部分です。お手元の1番という資料の左側にⅠ案、右側にⅡ案ということで、対応の構成を書いています。紫に塗った部分が書籍のスペースです。ⅠとⅡを見ていただくとわかりますように、書籍は2階と地下1階、そして地下2階に一部アート系の専門図書というものが入ってしまっていて、ⅠもⅡも書籍の配置は全く変わらないということです。

基本設計のときからこの配置で変わっていないのですが、基本設計の説明のときに、全館が図書館である、あるいはブラウジングという言葉がかなりひとり歩きをしまして、どうも全体に本があって、本を探すのに全部フロアを見て歩かないと探せないんじゃないかというような誤解が大分あったかと思うのですが、実際は地下1階がメインのライブラリーでほとんどの書籍がありまして、2階に児童図書、それから専門図書のコーナーがある。付随して、地下2階に一部アート系の専門図書がおりているという形で、これは、とにかく基本設計も今回の2案とも変わっていないということをまずよくご理解いただきたいと思っています。

そして、何が違うかといいますと、水色に塗っていますマガジンコーナーです。左側のⅠ案では、マガジンが1階と地下2階と2階の3カ所に分かれていて、1階に主なマガジンコーナーという形になっています。そして、Ⅱ案の方ではこれを集約して、マガジンパークというのが4階にあります。最上階の一番いい場所で雑誌がゆったりと読めるということで、4階にまとめて置いております。こういう形で、主に図書館でいえば、雑誌の配置がⅠ案とⅡ案では異なっているという考え方になっています。

それに付随して、ほかの施設、機能が、特に1階、3階、4階のあたりでⅠ案とⅡ案では違うということで、地下1階、地下2階、それから地上2階は、それぞれの案とも変わらないという形になっています。

(パワーポイント)

Ⅰ案、Ⅱ案のそれぞれの特徴ですが、Ⅰ案はマガジンラウンジを1階におろして、カフェと融合した案です。これによって図書館機能が2層分減って4層になっている。こうすると1階はにぎわいが出ますが、逆にいえば、1階は先ほどいいましたように車を入れるスペースがあったり、搬入のバックスペースとかがやや多いので、マガジンを全部おろすことでちょっといっぱいな感じにはなる。そういう感じはあります。そして、1階にマガジンがおりたことによって、4階はスタディーコーナーだけになるという形になっています。4階は緑が多くてとても明るい非常に環境がいい場所で、屋上庭園も含めてスタディーパークという名前をつけています。3階に全館事務室を設けていますので、2階は児童図書と専門図書の図書機能のみになるので、2階は比較的ゆったりとしたスペース取りができるという形になっています。

懸念するべき点があるとすると、図書館機能がB1から2階と、真ん中の方に集中してまとまっていますので、その上下のスタジオや市民活動の階というのが分離しやすいとい

う感じで、普通の複合施設的な施設構成になりやすい。3階は、特に市民活動とフォーラム専用みたいな形になっていまして、その辺が今回のコンセプトとしてどうなのかというあたりをご議論いただきたいと思います。それと、先ほど申しましたように、1階が雑誌を全部おろしてしまうとやや混雑ぎみかなというところで、専門雑誌を読むにはちょっとワサワサした感じになるかなという感じがします。

Ⅱ案についてですが、Ⅱ案の特徴はマガジンラウンジを環境のよい4階に置いています。それによって図書館機能が1層分減って、全体で4層になっている。ですから、Ⅰ案とⅡ案は、図書館機能が4層にそれぞれ入っているという点では同じなんですけど、まとまって地下1、2と1、2のあたりにあるか、地下1、1、2と4階に飛んでいるかという、その差だと見ていただければと思います。

今回は、雑誌が非常に充実していて600タイトルから700タイトルということで想定していまして、これは中央図書館の約1.5倍ぐらいの量だということになっています。ということは、専門系の雑誌が比較的ふえてきて、これまでよりも資料的価値が高いマガジンラウンジになるのではないかと。したがって、より静かな4階の方がいいのではないかとというのがⅡ案の趣旨です。そして、4階には、スタディーコーナーの一部も隣接していまして、例えば4階は社会人向けにするという形で、新しい情報というのは大体書籍から来ますので、その新しい情報を利用して調査研究をスタディーコーナーで行うといったような連携をするのに、スタディーコーナーがそのすぐそばという考え方があるかもしれないという形です。

それから1階は、機能をミックスして全体がカフェであったり、ギャラリーであったり、あるいはイベントスペースであったりというようなことを考えています。雑誌の棚がたくさん並ばない分、イベント時には対応しやすいということになっています。

Ⅱの方のデメリットは、図書館機能がⅠに比べて1階にない分、今までのセオリーからすると、入ってすぐのところに雑誌コーナーがあるというのが図書館のセオリーみたいなところがありますので、そういうことから考えるとちょっと戸惑う可能性があるかなと思います。それから、イベントとか展示がないときに、1階がちょっとすいた感じになるかなということなんです。

(パワーポイント)

次に、具体的なゾーニングの方を見ていきたいと思います。お手元の資料ですと、2ページ目から各階のゾーニングになっています。

これは I 案の 1 階のゾーニングということで、あくまでゾーニングプランですので、中にかいてある家具みたいなものですか、あるいは周りにかいてあるいろいろなイメージ図は、あくまでイメージということで、これをこのままつくるということではないです。ゾーニングの絵だけだとちょっとイメージがしにくいと思いますので、絵をかくことによってその階のイメージがもう少しわかればいいということで、書いてある参考程度のものだと見ていただけるといいと思います。

こちらの案の 1 階は、マガジンラウンジ、知のギャラリー、それとカフェです。これらが一体的に融合したような空間で、新聞のコーナーもあれば雑誌のコーナーもあって、多分カフェ的にテーブルでコーヒーを飲みながらというような使い方もできます。

(パワーポイント)

次のページにいきまして、3 ページ目が 2 階のサブライブラリーです。こちらの階は、児童図書と、専門図書という名前になっていますが、もう少しやわらかい形で、自然や環境といったところから少し引っ張ってきて、例えばお料理の本があったり、園芸の本があったり、動植物の図鑑があったりとか、少しやわらかい図書類が集まっていて親子で利用できるように。児童図書と一緒にしていますので、例えば真ん中のコミュニティラウンジといったところでは、親子で本を読んだり勉強したりということができるような作り方をしています。左の方が何となく児童図書、右の方が専門図書という形で、ここはほぼ図書のフロアという形になっています。

(パワーポイント)

4 ページ目が I 案の 3 階ということで、こちらの階も真ん中にオープンスペース、先ほどいったような割とフリーなスペースをとってしまして、その周りに 200 席のフォーラムと、それからスペース 25・40、25・50 といった形で、会議ができる小さなスペースを設けています。真ん中のところはミーティングスペースということで、市民活動の人や相談の方々が自由に使える大きなテーブルという形で、この階に市民活動用のロッカールーム、レターケース、それとプリントセンターということで、さまざまな印刷物を出すということですので、そういったようなバックアップ機能もつくっています。

(パワーポイント)

その次の 5 ページにいただくと、I 案の 4 階ということで、スタディーパークという名前をつけていますが、以前のスタディーコーナーです。「市民の書斎」と呼ばれていたところで、学生さんの勉強から社会人の書斎的な利用まで、幅広い書斎利用という形で

つくっております。スタディーのあり方も、グループで学習したり、あるいは1人で没頭して静かに勉強したり、いろいろな形があると思いますので、このスペースの中で非常に静かなところ、あるいはグループでちょっとお話ができるところというのも作りつつ、あと屋上庭園がありますので、外で勉強するというようなことも、季節がいいときにはできるという形になっています。

(パワーポイント)

次に6ページ目ですが、これは地下1階のメインライブラリーです。地下の図書館ということで、今回は壁面書架を中心に利用しまして、矢印が書いてある壁面のところにずっと本棚が並んでいるという形で、地下図書館だから初めてできるつくり方をしていってはどうかということを考えています。このことで、図書館の検索性というのが、一筆書きみたいな形ですと壁を伝わって見ていくと、探しているものが探せるということになっていって、さらに書架の平行配置のものと少し違って、ディスプレイ的な書架の扱いというのがこういう図書館では効果が非常にあるのではないかと。閲覧側から見て、本棚がずっと並んで見えるので、そこでディスプレイしていると、非常におもしろい刺激的な展示の仕方ができるということにもなっています。

真ん中にはライブラリーラウンジということで、これも前回のオープンスペースの一部なのですが、比較的自由に使えるスペースであって、例えば最近図書館でコンサートをするというような団体があつたりするようなので、ここでサロンコンサートみたいなことをやってもいいし、もっと違う展示的な使い方をしてもいいしというように、割とフリーなスペースがあるという形にしています。

家具も、ここにかいてあるのがそのままではないのですが、さまざまな読み方、さまざまな姿勢で本を読めるというお話もありましたので、コーナー、コーナーで少し違った雰囲気をつくっていけるのではないかとということも、委員会のお話に対応してつくった内容です。

(パワーポイント)

それから、7ページ目はプレイスペースの階です。特に前回の委員会で、プレイスペースを閉じ込んで機能を限定してしまうというやり方よりも、むしろ体が動かせるオープンな場でもっと広くしてはどうかというご意見がありましたので、非常に拡大して、真ん中のスペースをプレイスペースだと。先日新谷委員がおっしゃった壁を登るようなクライミングができたりとか、若い人は力が余っているということで、発散できるような形で卓球

もできればサンドバッグもあるというように、真ん中に非常に自由な場所があって、ラウンジ的にお話もできるというようなオープンスペース。これをプレイスペースと呼んでいますが、こんな考え方もあるのではないか。

周りには、もともとあったスタジオ。ダンスができるとかというようなスタジオ、あるいはちゃんと防音がしてあって大きな音が出せる音楽スタジオがある。そして、右側の端の方は、音楽・アート系のフロアということで、音楽アート系の専門図書と専門雑誌があるという形になっていまして、音楽・アートの専門図書の方は上階のメインライブラリーと直通的の階段でつながっていますので、上の階にいても音楽・アートのコーナーはこっちだというと、すぐに下においてこられるという連続性を保ちつつ、地下2階のスペースからも、この場所が見えるという形で配置をしております。

今までののがⅠ案で、8ページ目から先がⅡ案です。

(パワーポイント)

Ⅱ案の1階は、先ほど申しましたようにマガジンコーナーが入っていませんので、むしろイベントであるとか、時間や環境によってはフォーラム的な使い方もできるイベントスペースがあったり、あとは知のギャラリーがあり、全体がカフェであるというようなつくりになっています。Ⅰ案のときに説明し忘れてましたが、情報ブラウジングというのはコーナーであるのではないのではないか、ということで、これはまさにそういうことで、情報ブラウジングがコーナーとしてあるのは10年ぐらい前の公共施設ならそうなんでしょうが、今は全館で無線LANがあるとか、そういった環境を整えつつ、どこでもネットが利用できるというようなことも起用されていますので、今回はブラウジングというか、ネットが使えるのは全階に配置するような形にして置いてあります。

(パワーポイント)

そして9ページ目ですが、2階のサブライブラリーです。先ほどのⅠ案とそんなに大きく変わってはいないのですが、こちらの場合は全館事務室が2階にありますので、Ⅰ案のサブライブラリーよりはゆとりがないかな。ただこれは、基本設計と同じ配置ですので、今のタイトル数は十分入って、閲覧コーナーも設けられるという形になっております。

(パワーポイント)

それから3階ですが、ここもⅠ案とそんなに変わりはないですが、左の上に200席のフォーラムがありまして、真ん中のところがオープンミーティング、オープンスペースという形になっています。スペース45、50・25といった各室が周辺についていて、こちらの

場合は3階の一部、公園の方にスタディーコーナーがあります。Ⅱ案の場合は3階と4階にスタディーコーナーが分かれていますので、ちょっと使い勝手が違うスペースとして計画してもいいのではないかと思います。

(パワーポイント)

そして11ページ目がⅡ案の4階のマガジンパークといわれているところで、こちらは4階にマガジンをすべて集約してしまったということで、屋上庭園がありつつ、外で本を読んだりとか、いろいろな形で本が読めるかなり気持ちのいいスペースになっています。左上の方にスタディーコーナー2というのが少しありまして、先ほど前半で説明したような形で、新しい情報を見つつ、書斎的なコーナーを提供する少し静かなスペースもあってもいいんじゃないか。あるいは社会人のための書斎というようにとってもいいかもしれない、そういう場所があります。

(パワーポイント)

12ページにいきまして、こちらは地下1階です。12ページと13ページは、Ⅰ案の地下1階、地下2階と一緒にですので、ここでは説明は省かせていただきます。

(パワーポイント)

最後に、お手元の資料にはつけてないのですが、1階のイメージを簡単に書いてみたもので、いろいろなもの、カフェとかラウンジとかが融合するスペースになっていたらどうかというお話で、例えばこういうところで映像の何かが見られるイベントをやっていたりとか、ここには小話をするコーナーがあったりとか、ここは知のギャラリー、何をやっているのかわかりませんが、こんな場所があったりとか、とにかく全体がルーズで、いろいろなことが起こっている。それで、来る時期によって、さまざまな催しが行われていて、いつも様相が変わっている、何か新しいことが起こっているというようなイメージとはこんな感じだろうなという参考例をつけております。

(パワーポイント)

これは、1階で例えばイベントをやったり、こんなこともできるということです。ステージをカーテンで囲って、そこで簡単な武蔵野市民による武蔵野市民のためのレクチャーをやるというようなこともできるのではないかという、ちょっとしたイメージです。

ということで、駆け足になりましたが、以上のような形で2つのたたき台をつくってきました。コンセプトに基づいてどうなのかというあたり、それから使い勝手がどうなのかということ、図書館のあり方。今回、書籍は、何度もいうようですが、どの案も同じ配置

をしています。雑誌のコーナーが少し違っている、そのあたりをどう考えるのか、すべての利用者が体験する1階のスペースを一体どうやってつくっていったらいいのか、というあたりをぜひご議論いただきたいと考えています。

以上です。

○清水副委員長 どうもありがとうございました。

この前委員長がおっしゃっていたのは、きょうは川原田さんの方でご説明いただいたものについて自由に意見を交わしたらどうかということでしたね。ですから、特にどこに絞るというようなことではないものですから、全体にわたって、あるいは部分部分にわたってでも結構ですが、今のご説明あるいは提出していただいた資料を拝見しながら、ご意見、ご質問などがあれば自由にいっていただければと思います。いかがでしょうか。

○栗田委員 今のですごく形になって、具体的なイメージがわいてくるように思うのですが、ちょっとお伺いしたいのは、8ページ、Ⅱ案の1階の市民プラザのところですが、イベントスペースということですがあるような形になっていますが、このいすは固定式のものを考えていらっしゃるのかそうでないのかということと、知のギャラリーというのは、展示できるスペースということで展示できる棚があるのですが、こういうものは移動できるものと考えていいのかどうか。そのあたりをご説明お願いします。

○川原田 まず1階のいすが固定されているかということですが、ここに書いてあるものは、イベントをやるときにはこんなふうにいすを並べてもいいかなということで、ふだんはもっとバラバラで使ってもいいのではないかと思います。これだけいすが要らないときには、一部収納されているとか、割と自由に使っていただく。

それから、知のギャラリーは、今、便宜的にこう書いてあるだけで、知のギャラリーを一体どういう形で運営していくのかということがまだ見えていないですし、あるいは展示の内容によって変わっていきけるような形かもしれないので、余り固定してというイメージではないのですが、このあたりもぜひご議論いただきたいと思っています。

○栗田委員 趣旨としては、こういうのはできるだけ移動できるようにして、いろいろアレンジが可能で、そのときの最適な配置ができるようなものであってほしいなというイメージがございます。

○清水副委員長 そのほか、いかがですか。

○近藤委員 基本的な質問で申しわけないのですが、本の量、タイトル、例えばマガジンが、これは既定の数字ということなのでしょうか。スペースがないから2カ所に分けまし

たというご説明があったのですが、専門マガジン、4階に持っていけば500だけでも、I案になった場合には2階と1階に100と400に分かれますというお話だったのですが、そのタイトル数は既定の数字ということでしょうか。単なる質問です。

○事務局 今回のプレイスの特徴として、マガジンはできる限り豊富にそろえたいというのがありまして、中央だとタイトル数が480ぐらいだと思うのですが、それを上回るタイトル数を目指して、基本設計段階ですと一応想定で900ぐらいが入る予定ですが、それですと逆になかなか管理し切れない部分もあるので、600から700ぐらいのタイトル数がいんじゃないかと図書館職員との検討会でもなりましたし、それに見合う程度のものが今回入るのではないかという形です。II案の場合には、アート系については地下2階になりますが、あとは4階に全部配置するという形です。I案については、今1階の使えるスペースが限られている部分もありますので、1階と2階に配置するという形になるのですが、ただ2階については、事務室がなくなった分全部図書館になりますので、かなりゆとりがあります。1、2階になるので、ジャンルを分けて、例えば2階に子ども、生活系の図書、子育ての方とか趣味などの図書をそろえる中で、それに合わせた雑誌もそろえていくような意味合いで、1階と2階が分かれた場合も、そう分離されてしまうという感じにはならないのではないかという結論に、図書館の職員との検討会ではなりました。

○近藤委員 もう1つ、もしご専門の方いらしたら教えていただきたいのですが、カフェというのは1階にあった方がいいのですか。I案もII案も両方ともたまたま1階なので、それは意味のあることなのか。

○川原田 カフェは恐らくテナントになるのではないかといったときに、4階で集客ができるかという、なかなか入ってきにくいのかなど。もともとの委員会で、公園を使った緑陰読書とかあるいはカフェというようなこともあったというのと、テナントが入りやすく集客できるということを考えて、今は一応1階になっています。ただ、4階をマガジンラウンジにしたときには、4階でもコーヒーが出るといいよね、というお話もあるので、入ったテナントさんが、例えば混んでいる土日だけとか、夕刻以降とか、コーヒーぐらいはサーブしてくれるというようなやり方はないかなということでも事務局さんとお話をしていたりもします。

○清水副委員長 そのほか、いかがですか。

○近藤委員 3階ですが、フォーラム200席というのがありますね。これは、図によりますとミーティングラウンジと一体的な利用が可能ということになっているのですが、これ

は壁が取り外せるという意味なんでしょうか。

○川原田 各壁が全部取り外せるというところまではいかないと思うのですが、大きな建具等で、それが開くことによって、使っていないときには真ん中のオープンスペースの延長として使えるようにしていくという考えもあるのかなということです。

○近藤委員 ということは、いすは可動式ですよ。

○川原田 フォーラムは、もともといすはすべて可動で考えています。

○清水副委員長 その他、どうですか。

それでは、なければ僕の方からちょっと質問させてください。

これは、そもそも前にご提案いただいた基本設計の概要版に比べると、もう少しシンプルなゾーニングを示すものですから、これで形とかというのは余り言えないわけですが、そうはいいながら今お聞きしていると、地下1階のメインライブラリーですけれども、今回のプランを見ると非常にユニークですね。Ⅰ案にしてもⅡ案にしても同じ考え方で、前にお見せいただいた基本計画ですと従来あるように書架が並んでいるのですが、今回の場合は、ご説明がありましたように、壁面を長々とずっとうまく使うわけですよ。収容図書数とかボリューム的には、これで前の計画と拮抗するのでしょうか。

○川原田 そうですね。以前の冊数をキープする形で、何とか今取り決めていると聞いております。

○清水副委員長 同じ地下1階なんですけど、これもこれから先の話だということになるのではないかと思います。前の案ですと上からの光の取り込み、地下にしながら緑が仰ぎ見られるというようなご説明があって、そのような図であったかと思うのですが、今回このように壁面を使っていった場合でも、なおかつそういうことは計画なさっていらっしゃるのでしょうか。

○川原田 おっしゃるとおりで、地下図書館というのは、壁面が使えて非常にユニークなことができるのと、また相反して自然光がないということであつらいところがあるのですが、やはり地下図書館をやるからには、自然光あるいは緑を1階のところを通して取り込むということはやります。今、絵でかいてある四隅のあたり、ここはすべて1階とつながってしまっていて、1階を通して公園が見える、1階を通して木々が見えるということはやっております。

○清水副委員長 そうであらうかなと想像したのですが、もしそうであるとすれば、ゾーニングにも各コーナーに、面積的なことや形は全然いいんですが、やはり光を取り込むと

いう要素を示していただくことが、それは当然1階にも、地下1階にも影響するのでしょ
うけれども、大事なことではないかなと思いましたが、いかがでしょうか。

よろしいですか。うなずいてくださっていますので。

そのほか、どうでしょうか。ほかの委員、どうですか。

それでは、指名します。新谷委員、地下2階のプレイスペースのところは、前にお話し
のようなことが随分反映されているように思いますが、いかがですか。

○新谷委員 地下2階だけではなくて、全体的にかなりおもしろい形になっているなとい
う感じで、知的にも感覚的にもインスパイアされるようなつくりになっていると感じ
ました。

地下2階も、バスケットボール、3 on 3 ができたらいいなという思いはあったのですが、
それをあきらめることによってかなりオープンなスペースができていて、その中でも卓球
ですとかクライミングですとか、これは実際にできるかどうかかわからないですがボクシン
グのとか、こういったかなり少ないスペースでパワーを使えるようなもの、しかも気軽に
使えるような種類のものがありますので、こういう形ができると、かえって3 on 3 とい
ったようにスペースを区切ってしまうよりも、いろいろな居方ができますし、いろいろなタ
イプの人が利用しやすくなっているかなと思います。考えていた以上に、かなりいいもの
になったかなと思います。

それから、ほかのところで1つ質問なんですけど、全体としてかなりオープンスペースが
ふえてきて、居心地がよさそうにはなっていると思うのですが、その分減った機能とい
うのはあるのでしょうか、ないのでしょうかというあたりを伺いたいです。

ちなみに3階なんですけど、それだけでどっちがいいということではないのですが、スタ
ディーコーナーが市民オフィスにあることの意味というのは結構大きいような気がしてい
ます。スタディーコーナーというのは中学生とか高校生ぐらいの年代の人たちも勉強する
ために使いに行くと思うのですが、そういうときに同じフロアに市民活動をやっている大
人がいるということ、意図的ではなく自然に見たりする機会があるか、3階には全く立
ち入る必要がないと思われるかという違いは大きいような気がしますので、本当は3階に
あるといいかなという気がします。ただ、マガジンの話があると、またちょっと不定数に
なるのでわかりませんが、そういうふうに感じました。

○清水副委員長 では、最初の方が質問ですね。

○川原田 オープンスペースを真ん中につくることで減った機能があるのかということ

すが、例えば地下2階でいうと、多目的スタジオということで区切っていたものが少し数が減っています。その分、全体の規模が減っているわけではなくて、真ん中のスペースが大きくなっているということになっています。3階なども、機能で使っていたスペースの分を少しオープンスペースの方と割り振って、減っているものがあったりします。

○新谷委員 それを具体的にいうと。

○川原田 3階でいうと、スペースの50が1つオープンになってしまって、真ん中のオープンスペースに吸収されているというようなことです。

○新谷委員 それだけですか。

○川原田 あとは、先ほどの地下のスタジオですね。そのほかは、特に減らしてないと思うんですが。

○清水副委員長 今のご説明で、例えば3階の場合ですと、この矢印は空間の相互のかかわり方を示しているのですか。だとすると、例えば今おっしゃったスペース50というあたりが、中間のユニバーサルなスペースと一体化して使われることがあるよということによって、部屋そのものとしてはつくってないんだという、そういう説明になるのでしょうか。

○川原田 そうですね。真ん中の自由に使えるところを大きくしていますので、ある意味でスペース50というのが1つ真ん中に吸収されてオープンになってしまったと理解していただいた方がいいですね。

○清水副委員長 より大勢集まるスペースが外にとりやすいからという意味ですか。

○川原田 はい、そうですね。

○清水副委員長 わかりました。新谷さん、それでよろしいですか。

地下でいうと、新谷委員がこれは予想以上にいいな、とおっしゃっているけれど、卓球台なんかも球がトントントンと流れちゃうのは、周りにちょっとした可動式の壁を立てればよろしいんですね。そういう意味ですね。

○川原田 そうですね、使ってみながら、徐々に育てていくというような。もし問題があるようだったら、小さな網を置いてということもありますし、広いので、余り問題がなければそのまま使っていただくということもあり得ます。

○清水副委員長 このエクササイズのパンチングができるバッグなんかはいいですね。これは子どもたちじゃなくても、僕なんかも時々使わせていただきたいような感じもございます。

そのほか、どうですか。小林委員、どうでしょうか。

○小林委員 非常によく考えられている案だと思います。図書館のところでいえば、一筆書きで歩きながらいろいろなものを見ていけるというのも非常におもしろく、しかもそれで中にちょっと区切ってあるところまで入っていける。そうするとそこでお話ししていたり、自分とは違う形で本を読んだり、調べたりという人たちを見れる、嫌でも見てしまうという空間ができるというのはとてもおもしろいと思います。

ゾーニングというところになるのですが、マガジンをどこにみたいなのがお話にありましたが、マガジンというのは形式で分けているものなので、内容で分けるとしたら、むしろもっと本と一緒に入ってしまって、グシャグシャと本があってマガジンが並ぶみたいなことも可能だと思いますし、その辺の分け方は、まだまだ今後幾らでも変えていけるのではないかなと思います。その意味で、地下以外のところの本棚というものも、いすだけじゃなくて本棚自体も可動式にして、いろんなふうに並べ方が変えられたり、棚の大きさを変えられたりというのが自由にできるものだといいな、という気がいたしました。

○清水副委員長 川原田さん、いかがでしょうか。

○川原田 マガジンが各コーナーに分散しているような考え方というのも確かにあって、建築的には幾らでも対応はしていけるのですが、そこはむしろ建築的というよりは使い勝手の問題になるので、使う側からしてどうなのか、というあたりをもっと議論していただければありがたいなということですね。書棚が少し自由になるというようなところも、全く可能なことなんですけど、あとは図書館サイドの方、実際に運営するサイドとしてどうなのかという意見もお聞きしたいなと思います。

○近藤委員 栗田委員のメモは、大変共感を得るような内容だと思うのですが……。

○清水副委員長 栗田委員のメモは、まだディスカッションしてないんです。私もまだ読ませていただけていませんから。

○近藤委員 そうですか。図書館のことについては、どうあるべきかというのは、できるだけあっちに行ったりこっちに行ったりしたくない、ということはだんだん盛り込まれてきていて、最終的にどこのコーナーにどういうものが置かれるのかというのは、多分図書関係の専門家などが議論されて、一般的に使い勝手はこうなんだよという形におさまるのかなと思うんですね。もっと議論していかなければいけないのは、3階とB2ではないかなという気がしています。

さっき新谷さんがおっしゃったNGO、NPOの活動するスペースが、その人たちだけ

のスペースではなくて、そこにスタディー用のスペースがあるということが、一番最初の議論の中によく出てきた、いろんな世代の人、いろんな活動をする人が融合できる、そのことによってナレッジが生まれてくる。武蔵野市民が武蔵野市民を知っていくということも、今回のプレイスができる目的の大きなテーマだったと思いますので、3階がNPO、NGOの活動の場だけが目的にならないⅡ案の形の方が、私は今回のテーマに沿っているかなという気がしております。ぜひ若い、それから若くない人も、栗田先生のメモをまだ読んでいっしょに読まない方もいると思うのですが、要するにチャレンジ、姿勢ということからいっても、いろんな人がいるんだよということがわかる、その階に用のない人が上がっていった活動を目の当たりにできるというようなもので。

○清水副委員長 そのほか、どうですか。

スタディーコーナーを3階に組み込むというご意見ですが、それは4階の方の配置にも多少影響を与えるわけですね。Ⅰ案の方は、4階にスタディーパークと今呼称して、スタディー関連のものを全部上げているわけですね。Ⅱ案の方は、それを部分的に、あるいはかなりですかね、3階の方に入れてあります。そうすると、4階の目的が大分変わってくるわけですが、先ほどもご説明がありましたように、Ⅰ案の方では、マガジンが1階をメインにしながら3カ所に分散されています。Ⅱ案の方は、マガジンをマガジンパークといって一番上の4階のところにスタディーコーナーとちょっと組み合わせあって、全体的には2カ所に分けています。

それに関連して、これは設計の方のご意見ではなくて、多分事務局の方、武蔵野市の基本的な考え方にかかわることだと思うのですが、あるいは小林さんとかこちらの図書館の方々のような専門の方にお聞きしたいのですが、マガジンって、今確かに本屋さんに行くと百花繚乱のようにおびただしく並んでいます、皆さんどうでしょうか、僕自身は、自分で専門的な領域のマガジンをいろいろとっているのですが、最近付録がついていたりして、CDがついていたりします。それから、つい最近のことなんです、自分の領域でいますと2つのマガジンが廃刊になりまして、海外のマガジンも幾つか廃刊になって、それでどうなったかという、そのマガジンはなくなりましたが、かわりにウェブの方で同様な情報が得られるようになってきているんですね。

マガジンというのは、どちらかといえば、今動いている情報をやりとりするものですね。そうすると、今後の趨勢としては、マガジンの、要するに新しい情報をどんどん提供するというのは、とても残念なことに、僕なんかは雑誌が好きですし、一覧できるとい

うのはとてもいいことなんですが、今のようない紙媒体ではない方に行って、むしろ定着した、あるいは愛着の持てるというものがペーパーの情報になっていくのではないかなという気もするんですよ。これまでの紙でつくられた膨大な本というのは、本当に愛着が持てますし大事なもののなので、それは大事にしていく。今後もそういう本は、そういう意味ではふえていくのだろうと思うのですが、マガジンというような性格を持っているものの今後の位置づけですね。今の大きなボリュームを持ち続けるのかどうか。もしそうでないとすると、しかしそういう情報は必要なので、レファレンスの仕方が違ってくるのではないかなと思うんです。この辺のことは、スペースの必要なボリュームを考えるに当たっても非常に重要だと思うのですが、その辺についてちょっと教えていただきたいのですけれど、どうでしょうか。

○図書館長 私たちも今後の動向はちょっと予測がつかない、難しいです。確かに今、CD-ROMがついた雑誌がふえていますが、今の扱いとしては、貸し出しとかは、いろいろな利用者が使う形にしていますので、CD-ROMは外して紙媒体だけをお渡しして、利用は紙媒体だけにさせていただくという形をとっています。

あと、ITを含めた適切な利用の提供の仕方というのは、ちょっとまだ傾向としては見えてないところであります。ただ数年先まで、大きくマガジンの提供の仕方が変わるというケースは私は考えていませんので、600なら600タイトルのスペースのボリュームというのは、ある程度確保していただければと思います。20年、30年先まで見据えてやるのだということだと、何とも言えないのですが。

○清水副委員長 ありがとうございます。

その辺、現在図書館を運営されている小林委員、いかがですか。

○小林委員 そうですね、やはり先のことは難しいお話なんですが、先生がおっしゃられたように、専門系のジャーナルといわれるものは、どんどん廃刊してウェブになっていくという現象は、日本でもこれからずっと進むと思います。ですから、雑誌を充実させるといった場合に、専門の雑誌がふえるというよりは、むしろ気楽に読める趣味のようなマガジンといったものの方が、どちらかという主流になっていくのではないかなという気がします。

ただ、今CD-ROMというのがどんどん雑誌に入ってくるという、むしろそちらのお話の方が情報を得る場所としての図書館にとっては大切な話であって、CD-ROMを外してしまうのではなくて、そこにある情報を、使い慣れていない人もいる市民に、どう提

供していけるかということの方がここでできること。そのための場所としてどういうふう
にできるかな、どうしたら出せるかなという考え方ができるといいなと思います。

○清水副委員長 ありがとうございます。

僕のポイントは、それじゃスペースが一気に減るかというようなことをいっているわけ
ではないんですね。恐らく当分は、おっしゃるようにそういった雑誌の形態というのは続
くのだろうと思いますが、小林委員がおっしゃるように、しかしながら、やっぱりジャン
ルといいますか、それによっては明らかに違った形態の方に移行していると思いますし、
今回余りそういうことになってきてないのですが、そういう非常にアップ・ツー・デイト
というか、今進んでいる情報に対してどのようにつき合うのかということが、ちょっと抜
けているんじゃないかなという気がするんですね。これまでの委員会の中で、それは触れ
られているのですが、今回の基本設計あるいは今回のご説明でも、その辺についてはちょ
っとなかったように思うんです。

例えば、マガジンパークあるいは、マガジンラウンジという言い方も親しみがあってい
いけれども、そこは実はマガジンだけではなくて、日々更新するような新しい情報にどの
ように接するか、そういう場所であると受けとめた方がいいのではないかなと思うんです。
もしそうであれば、例えば、よく床に配線しておいて、そこからとってくるとか、いろい
ろなことがありますよね。やがてはそういうものになって、LANの方式をとるにしても、
いずれにしてもそこら辺の配慮というのが、最初になされているのとなされていないのは
すごく違って、やはり施設をつくるからには、先々を見据えておく必要があると考えたわ
けです。

○近藤委員 図書館におけるマガジンの位置づけという問題に余り知識がないのかもしれ
ないのですが、専門のマガジンというのは非常によくわかるんですね。ただ、くつろぐた
めのマガジンだとか新聞のコーナーがあるのですが、これが今回このプレイスに必要なの
かな、というのが私は意見と疑問としてありまして、検討可能であれば、例えばB2のと
ころに望まれるであろうマガジンというのは非常によくわかります。それからNGO、N
POの方が、3階に置くかどうかは別にして、必要とするようなマガジンもわかります。
ただ、いわゆるラウンジ的なマガジンのコーナーというのはなくてもいいのかなと、すご
く大胆に言えば。その辺については、極端な話、そうすると建物が3階になるのかなとい
うことも含めて、どうなんでしょうか。これは、本当に図書館におけるマガジンのあり方
についての1つの疑問でもあるので。

○清水副委員長 なるほど。その辺は、基本的な方針として、何かご説明があるのかもしれませんが。僕自身もちょっと意見がありますが。

○図書館関係者 それは、欲しい人は今までの地域図書館のサービスとして継続してやっていきたいと考えています。

○近藤委員 だから、そのサービスをやるべきでしょうかということが、私の疑問なんです。それを、市民サービスの一環として取り入れるべきなのかどうか、ということに対して、私は1つ疑問を持っている。最終的にどういう結論になるかは別にして、私は委員の1人として、知的拠点としてのプレイスというものを考えたときに、NGO、NPO支援もしていくということを考えたときに、いわゆる楽しみ、くつろぎのためのマガジン類、新聞類は、果たしてこの場所に必要なんだろうという気が疑問としてわいているので申し上げたかったんです。

○清水副委員長 きょう、僕は委員長代理ということで発言しにくいのですが、近藤委員、僕の意見をちょっといわせていただいてもいいですか。

僕は、高齢者の施設の調査とか提案とか実際の設計みたいなものもやっているのですが、そういうので行きますと、お年寄りたちの中には、きょうの会合には出ないという人がいるんです。どこに行くかという、いろいろなところに行くのですが、その中に図書館があるんですね。高齢の方々の自宅にも本がないわけではないし、マガジンもないわけではないんだけど、やっぱり限界がありますよね。そうすると図書館に行って、時間がたっぷりある方々なので、図書館で楽しんでくるみたいです。近藤委員は若くていらっしゃるし、活発に活動されているから、余りそう考えられないかもしれないけれど、でも地域の図書館というのは、そういうような人たちもまた大事なお客さんだろうな、という気もするんですね。だから、そういうところもあるのかな、どうでしょうか。

○近藤委員 確かにそう思います。私もそこに行って、自分を買わなくても済む雑誌があれば多分とても楽しいし、インターネットでニュースを見るよりはアナログの新聞を見た方がいいと思うのですが、心を鬼にして、このプレイスというものの意味づけを考えたときに、それが必要なのかなという議論はもうちょっとしてもいいのかな、とあえて申し上げました。ただ、私も境南町で、図書館がずっと欲しいと思っていた1人として、最終的に図書館にはそれが必須のものであるし、高齢化社会の市民に対する1つのサービスだというような意見が出れば、私はそれは享受いたしますが、ただ議論はしていただきたいなと思っています。それがあべきだではなくて、あるものではなくて、本当に必要なの

かどうかということ、議論はしておく必要があると思います。

○清水副委員長 では、そのようなご要望がありますので。

○栗田委員 議論ということで、私の意見ですが、1つ知的創造拠点という部分の機能を発揮させるという目的はあるのですが、せっかくなのでそれなりの高い機能を発揮できるようにというのはあるのですが、もう1つはやっぱり地域のニーズといいますか、境南地域につくるということの地域ニーズというのは無視できないんじゃないかと思っ
ていまして、そういう意味で地域の方のニーズである新聞・雑誌というものは、ごく基本的な情報というものを求めているというのは強いと思いますので、そこはやはり落とせないのかなというのと、社会的な動きというのを押さえていろいろな発想をしていくという部分があるので、例えばNPOとかボランティアの場合でも、例えばNPOサポートセンターなどでは、ボランティアサロンをつくって切り抜きなんかの活動をしているんですね。新聞などにNPO、ボランティア関係の記事がどういうふうに出ているか、そういう1つのごく基本的な社会の動きを把握するツールとしてもあるので、個人で切り抜きというの
もなかなかつらいものがあるし、そういういろいろなサービスもあるのですが、そういう
ときにやはり、あそこに行けば、大学でもそういう機能はあるのですが、あればというよ
うなところがあります。いろいろな知的な活動をしていくという場合の基礎資料みたいな
ことで、新聞・雑誌というのは非常に大事なツールになりますので、私はそれは必要じゃ
ないかなという意見です。

○清水副委員長 ほかの方はいかがですか。

○新谷委員 余り積極的な主張はないのですが、どちらかというとなった方がいいかなと
思います。図書館は、かなり目的意識を持って使う中心の人だけではなくて、どれぐら
い広がりがあって、そこに接触できる可能性があるかということを見ると、やはり新聞
なり雑誌なりというのは1つのかなり大きな切り口になるかなと思いますので。

○清水副委員長 心を鬼にしておっしゃっていたのは、要するにこのスペース全体を抑え
ることができるのであれば、どういうことかなという考えで、1つの可能性としておっ
しゃったんだと思うのですが、小林委員、この辺のことはどうですか。

○小林委員 本には敷居が非常に高いんだけど、雑誌は読んでみたいという人は一般
的に多いです、そういう人たちを呼び寄せるためのツールとしても使えるということ、
それからたとえ同じくつろぐための雑誌であっても、自分のお家で読むとか本屋さんで立
ち読みするのは、また違った感覚を得るということも図書館のいいところだと思うんです

ね。ここで、例えば雑誌をブラウジングすることが、そのときには単にリラックスしているつもりであっても、新たな発想を生むとか、世の中の動きを知るとか、そういうふうな知的な活動に結びつくということも、実際には非常に多いのではないかなという気がします。

○清水副委員長 一巡してまいりました。

○近藤委員 一番最初に私が質問したことと実は関連してくるのですが、私も雑誌は一切要らないということではなくて、それぞれのところで必要なものは必要だろうと思うんです。ただ、600、700 あるのが普通なので、それを置こうと思いますというところを、本当に必要なんですかと。ですから、市民のくつろぎ、豊かな老後の生活を楽しむためにプレイスに入ってみたいという市民にも、できるだけ多く活用してもらうためにも、一定のものは多分必要だと思うんですね。

ただ、いろいろなところからの情報だと、新聞とかマガジンというのは、非常に言いたくないですが、一番管理が大変。つまり破かれるとか、傷つけられるとか、知的所有権の問題で勝手にコピーをとってしまうとか、無くなってしまうとか、そういうのが非常に多くてメンテナンスが大変だという対象物でもある。特に4階に上げた場合に、その辺、目が行き届くのかなという心配もありますし、そういう上からいつているんです。

ゼロとはいませんが、当初の予定のすべてのマガジンが必要なかどうか、本当にこのプレイスの目的に合ったマガジンに冊数を絞ってもいいのではないかなという気はしております。そういう意味でも、例えば、専門がI案ですと100と400に分かれて500なければいけないから、どうしても2つスペースが要るんだという考えはやめた方がいいと思う。逆にスペースがなければ、そのスペースを埋める範囲の冊数にしてもいいのかなという考えで検討できないかなという気がします。マガジンはゼロ、全部要らないということではもちろんありません。

○清水副委員長 ありがとうございます。僕自身、先ほどのマガジンというものが背負っている情報の提供の仕方をもう一度考えてみると、ボリューム的にどうなんですかとちょっとお聞きしたわけですが、それも今近藤委員がお話しになっていらっしゃる部分と関連しています。中央図書館が現在何タイトルあるから、ここはそれよりも多くというふうに、新しいんだからそうしたいということはわかりますが、しかし今いったような理由からすると、冊数の検討というのは、もうちょっと厳密にやり直してもいいんじゃないかなという気はしますよね。先ほどいいましたように、僕自身は雑誌自体の持っている働きとい

うのは大いに買うものですが、ただボリューム的な問題については、今後を見据えてちょっと考える必要があるし、それからマガジンというやり方だけではないこともちょっとお考えいただければと思っております。

大体この件についての委員の方々のご意見は出尽くしたかなと思いますし、大体何か同じような方向が見えているような気もしますが、いかがでしょうか。よろしいですか。

では、それ以外で。

○栗田委員 前のところで、地下の若い人の活動する場所が、何かたまり場というか、それから新谷さんの方の提案でスタッフの居所というんですか、そういうスペースがあった方がいいなというようなことがありましたし、同じような発想で、3階の市民オフィスの方にもそういうものが必要なのかなという気もするのですが、ゾーニングされた中では、どのあたりにそういうものがありますでしょうか。

○川原田 今回の絵にはそれが抜けているのですが、例えば地下2階では、オープンスペースの左の上のあたりとか、カウンター的なものがあって、そこに居場所があるというようなことを考えたかどうかという話はしております。3階についても、今の絵の中には入っていませんが、バックスペースのあたり、あるいは全館事務室のあたりのどちらかに、そういう運営にかかわるような方の居場所を設けていけるのではないかと思います。

○栗田委員 さっきの市民オフィスのところに、新谷さんがおっしゃったスタディーコーナーがある案とない案。僕が欲しいのは、やはりそういうスタディーコーナー的なスペースがあって、そこにふらっと迷い込んでくるというか。私のメモの方にも書いてありますが、若い人をサポートしなくちゃいけないという部分が出てくると思いますので、それが今後のNPOとか市民活動のところで、お年寄りばかりではなくて、若い人が全体に落ち込んだらなかなか抜け出せない、という部分をサポートするという意味では、就業とかの部分もあるのですが、やはりNPO、市民活動というのも1つの受入先ということになると思いますので、そういうところに触れられるような機会というのは、できるだけ用意した方がいいのかなということで、そういう意味ではⅡ案。これだけのスペースが要るのかどうかという問題はありますが、スタディーコーナー的なものを含んだ案の方が、私としては望ましいなという気がします。

○清水副委員長 この辺は、そういうご意見も先ほどおっしゃっていただいたことを思い出しましたが、ほかの方はどうですか。近藤さんはそのようにおっしゃってましたね。小林委員は、その辺どうですか。

○小林委員 触れ合いを持たせるという一番のコンセプトを非常に大切にしていきたいわけなんです、先ほどからお話に出てくるのは、やはりスペースを削減できるかできないか。これは、後の方の議論ですが、栗田委員のメモにもありますように、例えば4階部分を省略できるのかできないのか。それからマガジンも、例えばもう少し一律にしろスペースを削減するのであれば、マガジンももう少し減らしますよというお話になりますし、どの程度ここで議論するのがふさわしいのか、またいつもの難しいお話になってしまうのですが、今の現状のこの中で、こういう形にするとこういう話になるだろうというご提案をきょう建築家の方の方からいただいた。ただ、やはりそこに入れるボリュームが何なのか。本が10万冊と決まっているのか、マガジンが500、600とか、そういう数はどこから来るのかというふうなところを、やはり話が、考えてみてもそれはどうなのかなということが出にくくなってしまふのかなというところがあるんです。

それを整理していくために、今これを見たときに、例えば何となく本はこれじゃ多すぎるのかなとか、マガジンが多すぎるのかなとか、ここはうまく触れ合っているのかなみたいな、私たちが今話しているようなちょっと感想めいたことでも、実際には、多くの皆さんがこれからうまく使っていただくときに感じる違和感みたいなものにつながっているんじゃないかなという気がします。やはり伺っても、コンセプト自体はいいというのはどこでも皆さん非常に一致しているところなので、そのあらし方というところで、今いった点をもうちょっと、じゃそもそも要るの要らないののところの雰囲気だけでも、もう少し私たちができたらいいのかなという気がします

○清水副委員長 ありがとうございます。おっしゃるとおりだなと思います。

これまでご提案されてきたいろんな知的情報拠点のあり方というものに即して、それぞれこういうものはどうであろうかという検討をしているわけですね。その辺、まだご意見ございますか。

○近藤委員 マガジンのことについて申し上げたことが誤解があってはいけないですが、私は、あくまでマガジンは要るんですか要らないんですかという議論をしていただきたいのですが、本については、これが多すぎるのではないかという意見は持っておりません。本については、可能な限り、できるだけ立派な図書館にしていきたい。マガジンというのは、ちょっと違うのではないかと。図書館としてこうあるべきだといったときに、いわゆるお楽しみ、くつろぎのものと、積極的なものとは少し分けて考えた方がいいんじゃないかなということですので、本について冊子数をできればもう少し少なくという考えは

私はないので、それについては誤解がないように改めて申し上げておきたいと思います。

それからB2ですが、この周りに描いていただいた絵がすごくわかりやすいので、なるほどこういうふうを楽しむのかということ、今回、前のデザインと比べて非常に理解しやすいのですが、クライミングであるとか、卓球台であるとか、飲食カウンターであるとか、とても楽しいのですが、これはやはり1階と同じように、運営にエネルギー、コストが非常にかかるものになって、逆にそれをいい方向、いいエネルギーに持って行って、大勢の市民が、場合によっては三鷹市や小金井市といったところの人たちも駅前ということで利用して、いろいろな大学の人も利用して、運営に力を貸してくれるようなソフトの部分というのを、これからはぜひ市の方でエネルギーを使っていたきたいなと思います。いいものをつくってもだれも利用する人がいないとか、クライミングをつくったけども、けがばかり続発してやめてしまえといわれたとかということがないように、ぜひ運営の方にもっと力を注いでいただきたい。

○清水副委員長 ありがとうございます。

前から出ておりますが、こういう施設を計画するに当たっては、ソフトとハードの両輪がうまく関連していく必要があるということで、皆さんおっしゃってしまして、今近藤委員は、ソフトの部分を改めて強調されておられるんだと思いますが、今日は川原田さんの方から建築的な意味合いのものが、ハード的なものが出ておりますので、どちらかといえば焦点はそちらの方に置かれるわけですが、おっしゃるとおりこれを運営していくということについては、重々これから検討していかなければいけないですね。

○事務局 じゃ、一言、近藤委員からいわれましたので。これは、あくまでイメージというふうにとらえておいていただきたいと思います。例えば壁クライミングとかエクササイズも、これを設置するかしないかというのは、行政の方で少し検討させていただかないとなかなかあれで。あくまでイメージということで、これが必ずできるものだということではなくて、それは検討させていただきたいと思っております。当然そういうことになれば、運営に関しては非常に大変だなと思っております。

以上です。

○清水副委員長 ありがとうございます。

しかし、一方では、今そうおっしゃるだろうなと思っておりました。頑張ってくださいね。なるべく斬新な魅力的な、ここに来る人にとって楽しい、うれしいものにしていただきたいと思います。何か起こっちゃいけないというのはわかりますが、それに対しての対

処の仕方は、また別にあるかなと思ったりもいたします。

そのほか、どうでしょうか。

そうしますと、4階あたりの扱いというのは、結構、今日、論じられていたことと関係しますよね。例えばスタディーコーナーを3階の方に持っていった方がいい、それはなぜかという、違う世代間の交流という意味合いでも、市民活動の中を若い世代が通過していくといえますか、あるいは一緒にやるというような意味合いで望ましいというご意見がありました。

それから、マガジンにつきましては、まだ十分にディスカッションしていませんね。マガジンの方も、どのように考えるかによるのですが、1階に持ってくる、4階に集中させる、ここについてはまだ十分議論がなされていませんね。マガジンの働きについてはディスカッションしましたが、これをどこに持っていくかというところは、ちょっとまだ十分でなかったと思うんですが、この辺についてはご意見はどうですか。

○近藤委員 このプレイスに多くの人がふらりと立ち寄って活動するというのが目的であり、その呼び水になるものの1つがマガジンであるならば、私は1階に置いた方がいいのではないかなと思います。

それと、もう1つは管理。マガジンに対する市民の心ないことを防ぐためには、やはり4階にない方がいいのかなという気がします。4階にあると、何か危ない気がします。

○清水副委員長 そのほかのご意見、どうでしょうか。配置についてです。全員に聞きます。

○栗田委員 1階の使い勝手という点だと、Ⅱ案の全部自由に使えるというのがすごく魅力的なんです、近藤さんがおっしゃるような心配というのはある。400タイトルもここに置くのかということもありますよね。だから、基本的な部分ということで、少し縮小して置くとか、折衷案的なことになるのかというイメージです。

○清水副委員長 ちょっと確認させてください。Ⅱ案とおっしゃったけれど、Ⅰ案じゃないですか。1階に置くというのはⅠ案。

○栗田委員 私としては、Ⅱ案の方がスッキリしていていいなというイメージなんです、近藤委員のおっしゃるのも理解できるし、本来の意味だと、まず行ったらすぐマガジンがあるというのは、利用者の立場からいうと非常に便利だというのは確かにそうだと思います。最終的にどうするのかというと、400タイトルも1階に置く必要があるのかという意味で、そこをもう少し縮小することもできるのではないかなという感じがします。

○清水副委員長 近藤委員は、マガジンの性格がもしそういうような、つまりリラックスしてというようなことであれば1階の方がよさそうじゃないか。しかし、ボリューム的にどうなんだと。これについて、栗田委員もやはり400タイトルというのはどうかなというところをおっしゃっていますね。この辺、これから検討していただくことかなとは思いますが、小林委員、この辺はどうですか。

○小林委員 実は400というのは、そんなにたくさんでもないというイメージがあるんですよね。それこそ、ここにはストックもという感じになっている。要するに古い方ですね。例えばその辺だけでも、何か違う形にするとかというようにしたら、置き方によっては決して雑誌があふれる1階だというイメージでもないんじゃないかなという気がします。

確かにマガジンがない場合のⅡ案だと、やはり何となく寂しくなってしまうときもあるのかなと。イベントとか知のギャラリーというのは、この間も申しましたように、やるのは非常にエネルギーが必要なもので、それを常時やり続けて、いつもにぎわいザワザワしているというのは苦しい。それよりは毎号かわるマガジンでもあった方が、壁の花としても何となく気分が違う。毎月違うものが、新しいものが来ていて、新しい号が出たからちょっとのぞいていくかという方もいらっしゃるのかなという気がします。その意味で、どちらかといえば1階にあった方がいいのかなという気はします。

○清水副委員長 ありがとうございます。

新谷委員はどうですか。

○新谷委員 これに対して余り主張はないので。

○清水副委員長 わかりました。強制してはいけませんよね。

では、きょうは司会役をやらせていただいているのですが、本当は1人の委員なのでいわせていただくと、僕自身も皆さんがおっしゃっているような意味合いで、1階に持ってくるって案外魅力的だなと思います。ボリュームも、今小林委員のご説明もあったように、それが可能であれば別に構わないと思います。先ほどからいっているように、タイトル数については、別の側面もあって考える必要があるかと思うのですが、ただ、そうなってくると、例えば雑誌をリラックスしながら見るというようなことと同じような意味合いで、画像で見るということも要求されてくるのではないかと思うんです。そうすると、やっぱりスペースが結構必要かもしれませんよね。この辺もあわせて考えていただいた上で、1階に持ってくるのが可能かどうかということになるんじゃないですかね。

一方でⅡ案のように、上の方に伸び伸びとしたマガジンが点在していて、リラックスし

て外を見ながらというのなかなか魅力的ではありますよね。困っちゃうんですよね、こういうのね。そういうことをいい出すと。

それで、マガジンは、今のところの話でいうと、この委員の中では1階説が強いんです。そうすると、4階にあったマガジンパーク 500 タイトルというのが、先ほどいったようにタイトル数の問題がちょっとありますし、ここがもし仮になかったとすると、スタディーコーナーが残ってきますよね。

僕自身は、この委員会は、基本的に削減、削減というのが使命ではないと思っています。大事なことは、僕らが例えば自分の家を設計の方に頼んで、基本計画が出てきたときに、自分でいろいろ検討していろいろいいますよね。そういうプロセスだと思っています。ですから、ひょっとしてもっと増やせということだってあるのかもしれない。だから、大変気にさわる方がいらっしゃるかもしれませんが、こういうものを増やすことを前提とか、減らすこと前提とまず考えないで、僕自身はこの委員会というのは、これをそれぞれの立場、知識から判断して、どうやれば適切なのかなということを考えるだけだと思うんですね。

そういうことで、今、例えば4階のマガジンパークがなかったらどうなのかなと申し上げていますが、それが絶対だということではないんです。ただ、前々からいってありますように、僕自身は公園との一体化ということを考えていったときに、4階のボリュームというのが少なければ少ないほどいいなということもいってました。ですから、そんな意味で言えば、今日話が出ている方向というのは、僕自身にとってはいいかなと思うんですが、一方では、前々からお聞きでおわかりと思いますが、僕自身はこの建物、この施設をより楽しく、より魅力的なものにしたいと思うのです。

そうすると、例えばマガジンを読むところにカフェがあってというお話で、公園なんかときっと一体化できる部分もあるかと思うんですが、そういうことからすると、どなたかがおっしゃったように、4階にマガジンが多少あって、そこでコーヒーを出してもいいんじゃないというお話もありましたが、そんなのも一方では魅力だと思います。ただ、ボリューム的にどの辺までということは別問題かもしれませんが。

そんなように気楽にお考えいただいて、このマガジンを1階の方に持っていった、それでは4階はどういうふうに考えたらいいかというところをちょっと話し合ってみましょうか。その辺はどうですか、どなたか。

スタディーコーナーの席数などの算定というのは、どのように出しているんですか。

○川原田 断面図の方に大体の席数を書いているのですが、この根拠というのは、断面構成図をつくるに当たって、平面図を書かないと面積だけではやりきれないので、平面図を描いて、その中に家具を落とし込んで席数を出しているんですね。ですから、ほぼ1人ずつの席があるというのを並べてみて、このぐらい入れるという席数の算定の仕方をしていきます。

○清水副委員長 それは、結果的にそうなっているんですね。例えばⅠ案の方はスタディーパークが95席で、Ⅱ案の方はスタディーコーナーという名前ですが、両方を足すと60ですね。

○川原田 根拠としては、基本設計が一応60席ということであったんです。それで、Ⅱ案の方は60席確保、Ⅰ案の方は上に非常に大きいスペースがあるので95ぐらいはとれるということで、基本設計の60を基本にしています。

○清水副委員長 そういうこととお考えいただいて、4階の扱いはどうですか。

○近藤委員 別に3階建てにするべきだとも思わないので、4階の屋上庭園につながるところに、何か楽しみの場があるというのはとてもよくて、本は借りただけけれども、自分のうちに持って帰るのは狭くてうるさくて日当たりも悪いので、それを4階で読みたいという人もいるだろうし、子どもを遊ばせながら編物をするお母さんがいてもいいと思うんですね。

これもさっきした質問と一致しているのですが、喫茶店は4階じゃだめなんですかといったら、やっぱりそれはテナントであると難しいということもあったわけで、例えば4階を、どういう名前をつけても構いませんが、発表の場、例えば展覧会であるとか、NPO参加の何か発表の場であるとか、そういうスペース。全員座って本を読んでもいいし、そういうような自由なスペースということも可能なのかなと。まさに知的な刺激、さっき清水先生がおっしゃったように、映像の知的なものが見れるというスペースをここに持ってきてもいいのかなと思うんです。ですから、例えば4階をもう少し小さくして、庭園、屋上緑化をして、それこそいろんなことができる場として置いておいてもいいのかなという気もしています。

○清水副委員長 屋上庭園という形になって提案されていますから、今近藤委員がおっしゃるのも魅力的なお話ですよ。

ほかの方、どうですか。これについては、新谷委員、何か言えそうじゃないですか。

○新谷委員 4階そのものについては余りないですが、スタディーコーナーを3階にも持

ってきて、マガジンを1階におろしてくるというI案とII案の折衷にしたときに、ほかの配置がどうあり得るのかなということがちょっと伺いたいというか。結果、4階が決まってくるような気がします。

○清水副委員長 おっしゃるとおりですね。今、1階についてはI案、3階についてはII案に近いようなものをいっているわけですね。例えば3階のところのスタディーコーナー、ボリュームがちょっと大きすぎるというお話もどなたかからありましたが、それを4階の方にII案のように持って行って、近藤委員がおっしゃるような使い方の空間を4階の方に持つということになると、確かにI案とII案が合体するような案になるわけですが、その辺については。

○栗田委員 4階はなくてもいいのかな、というような気持ちもあるのですが、あるいは全部庭園にしてとかということもあり得るし、あるいは武蔵野市のプレイパーク的な、ワーッと泥んこで遊べるようなところ。こういうところの上につくれるかどうかという技術的な問題もあるのかもしれませんが、そういうふうなただの公園でもいいのかなという感じもするんです。

それこそ、4階部分は、先ほどのようにマガジンを下におろして、スタディーコーナーも3階の方に一部、46席までは要らないかもしれないですが、20席ぐらひは置いていただいて。というと、あと3階で削るのはフォーラムだと思うんですね。フォーラムを半分の100席ぐらひにして、全部オープンにして、いつもフォーラムをやっているというわけでもないでしょうし、あるいはどうしても200席必要ならばスイングを使えばいいんだという感じでいけば、あと省略できるのはフォーラムスペースだろうと思うと、全部入るのかなという感じがするんですね。4階は特になくてもという感じがします。別にあってもいいんですけどね。予算の関係もあるでしょうし。

○清水副委員長 そうですか。

1人の委員にまたならせていただきますと、僕は、屋上庭園という魅力的なものになってきたら、そこをただ遠くから眺めていたって意味ないじゃないか。やっぱりそこへ出て、近藤委員がおっしゃるようにそれを眺めながらやるとか、あるいは栗田委員ご自身がおっしゃるように、子どもたちが遊べるような場所だっっていいじゃないかとも思います。

もちろん、これは運営の仕方なんだと思います。先ほどのコーヒーを出すということと似ているかもしれないけれども、託児所みたいなスペースもあるとは思いますが、子どもをそういう空間に押し込めるのではなくて、伸びやかな上の方で。もちろん、ちゃんと子

どもの面倒を見る人がある時間いなければいけないかもしれないけれど、そういうようなことがあれば、若いお母さん、お父さんがリラックスして下の施設を使えますよね。そんなような考え方もありますよね。ですから、ボーンと大きいスペースであるかどうかかわからないけれど、そういう機能を考えると、4階はやっぱりうまく使っていたきたいという感じがします。

その辺、小林委員、どうですか。

○小林委員 半分外で半分中みたいな空間としてうまく使えれば。ただ、4階という形ではなくて、普通の屋上という形でもいいのかなという気がします。

今回の川原田さんの案は、1つのスペースを多様に使えるということを非常に考えてくださったので、基本設計のときよりも、ある意味ではすべて席数が少なくてもいいんじゃないか。つまりフォーラム 200 となっていますが、よそと一緒にしたら、ふだんは 100 だけど 200 にできるみたいな使い方がいろいろできる。スタディーコーナーも混んできたらいすの数を増やせます、みたいなことができるのであれば、基本設計の割とはっきり分かれていたときよりも、ある意味全部が少なくても何となくフレキシブルに今までの機能を保つことができるのではないか。そう考えると、例えば席数自体がもうちょっと少なくても、今までと同じことを達成でき、なおかつそうなってくると、4階のところがなくとも同じものが達成できるのではないかなという気がします。

○清水副委員長 また1人の委員に。

そうですね。でも、今回の川原田さんの提案されたものは、もうそもそもそういうことを飲み込んでいますよね。つまり真ん中のスペースをうまく取り込んでフレキシブルに使うということで、既に席数的なところも、あるいは先ほどご質問に答えていらっしゃいましたが、機能的なものもある部分、前のよりは削減しているようなところがございますね。ですから、この委員会で5回にわたっていろいろなことを言ってきましたが、それが大分反映されていると思うんです。それで4階ですけど。

そこのところを今話しているのですが、僕自身は、屋上を使うというためには、屋上に
出なければいけないんです。何らかの形で出なければいけない。そのときに、想像してみ
てください。階段の上がりっぱなのちょっと屋根があるところからぽっと出る、あるいは
エレベーターでひょっと出るだけでいいのかというと、それってやはりすごく貧しいです
よね。せっかくそういう景観があるのであれば、そこを楽しむ何らかのスペース、雨のと
きだって楽しめるようなスペースがあってもいいんじゃないかな。ただ、それがダーンと

4階全体とか半分ほどもなくてもいいのかもしれませんがね。屋上に行くのが、物干し台に行くみたいな、そういうようなものだけで終わるのはちょっとどうでしょう。残念な気がしますけど。

○小林委員 形としてそれが屋上なのか4階という名前なのかという違いだけなんじゃないかなと。今は、屋上という名前でも、先生がおっしゃられたみたいなかなか新しい空間ということで、何でこれが屋上なのみたいなどころもあるので、どちらでもいいんじゃないか。ただ、要するに席数みたいなどころにこだわらずに、むしろ光とか雨とかといったものを楽しめる空間というものがあればいいんじゃないかなという気がします。

○清水副委員長 そうですね。ただ、例えばスタディーコーナーの席数は前の60席ということ根拠にされているということですが、栗田委員が3階についておっしゃっていたときに、スタディーコーナーのボリュームはこれだけ必要かどうか、これはちょっと多すぎる的なニュアンスでおっしゃったような気がしましたが、屋上、4階とってはいけないのかどうか難しいですが、そのところにやっぱりスタディーのファンクションを入れても悪くないんじゃないかなという気もしますけどね。どうなんでしょう。全部とっばっらって、屋上に出る、それからちょっとした雨宿りというぐらいのことではないんじゃないかな。もう少し楽しんでいいんじゃないですかね。それにスタディーだって、伸び伸びとしたところでもいいじゃないですか。どうなんでしょう。

新谷委員と目が合いましたが、どうですか。

○新谷委員 これに関しては、僕は清水委員に近い立場です。4階はむしろ、かなりゆとりがないようなイメージがあると思うんです。3階までの、この建物だということにっぱいっぱい入っているイメージで。逆に、屋上だけにしてしまうと、若い人にとっては居場所になったりする。人が来ないので、人の目を気にしないで居心地よくなるというのはあるんですが、それは全体とすれば、余り開かれてないような屋上になりかねないと思いますので、今ぐらいのスペースで、ゆとりがかなりあって、しかも外にも出られるぐらいのバランスの方がいいかなと思います。

○清水副委員長 はい。でも、小林委員がおっしゃるように席数というところの再検討をもう一度したときに、屋上のボリュームが本当にそれだけ必要なかどうかは、まだ検討していいんじゃないでしょうか。いずれにしても、いろいろな意見が出ておりますが、あだこうだいつているうちに時間が予定を超してしまいました。やはり鬼頭委員長はすばらしいな。時間どおりきちっといつも押さえていましたよね。ごめんなさい。予定をちょ

っとオーバーしました。

きょうの議題というのは、1がより使いやすい施設配置等について、これはプレゼンテーションがありまして質疑応答があったわけです。そのほかというのがありますが、特に何かディスカッションすることがあるんですか。

ごめんなさい。ここがやっぱり委員長というような方の変なところ。栗田委員の方からメモが出ておりますので、説明をお願いします。

○栗田委員 いや、これはどっちみち……。

○清水副委員長 読んじゃえばいいということですか。

○栗田委員 この趣旨のことは大分発言していますから。メインは運用の方式なんです。ハードの部分じゃなくてソフトの部分の問題についてなので、きょうの議論からいくとちよっと別の議論になるので、またそれをやるときにきちっと。一応、前回宿題をやってこなかったんで、きょう、遅れた宿題を出したということになります。

○清水副委員長 助けていただいて、ありがとうございます。

先ほど近藤委員が指摘されておられたように、きょうとは別に、またソフトというところに焦点を当てたディスカッションも大いに必要だと思いますので、そのときにまた改めてこのメモに準じてお話をいただければいいかなと思います。

そういうことからすると、きょうは鬼頭委員長がいらっしゃらないのですが、例えば次回は、今度はソフトの面に焦点を当ててディスカッションをしてみるということになろうかと思いますが、いかがでしょうか。それでは、そういうことで。

川原田さん、どうもありがとうございました。

これにて、時間をオーバーしてまことに申しわけございませんが、今回の委員会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

(了)



武蔵野プレイス（仮称）

専門家会議資料

2006.11.13 vol.1

武蔵野プレイス（仮称）専門家会議

会議次第

日 時 平成 18 年 11 月 13 日（月）午後 6 時 30 分～

場 所 市役所 6 階 601 会議室

1. 議 事

4 つの機能についての調査及び検討
（これまでの議論を踏まえた設計者提案）

2. その他

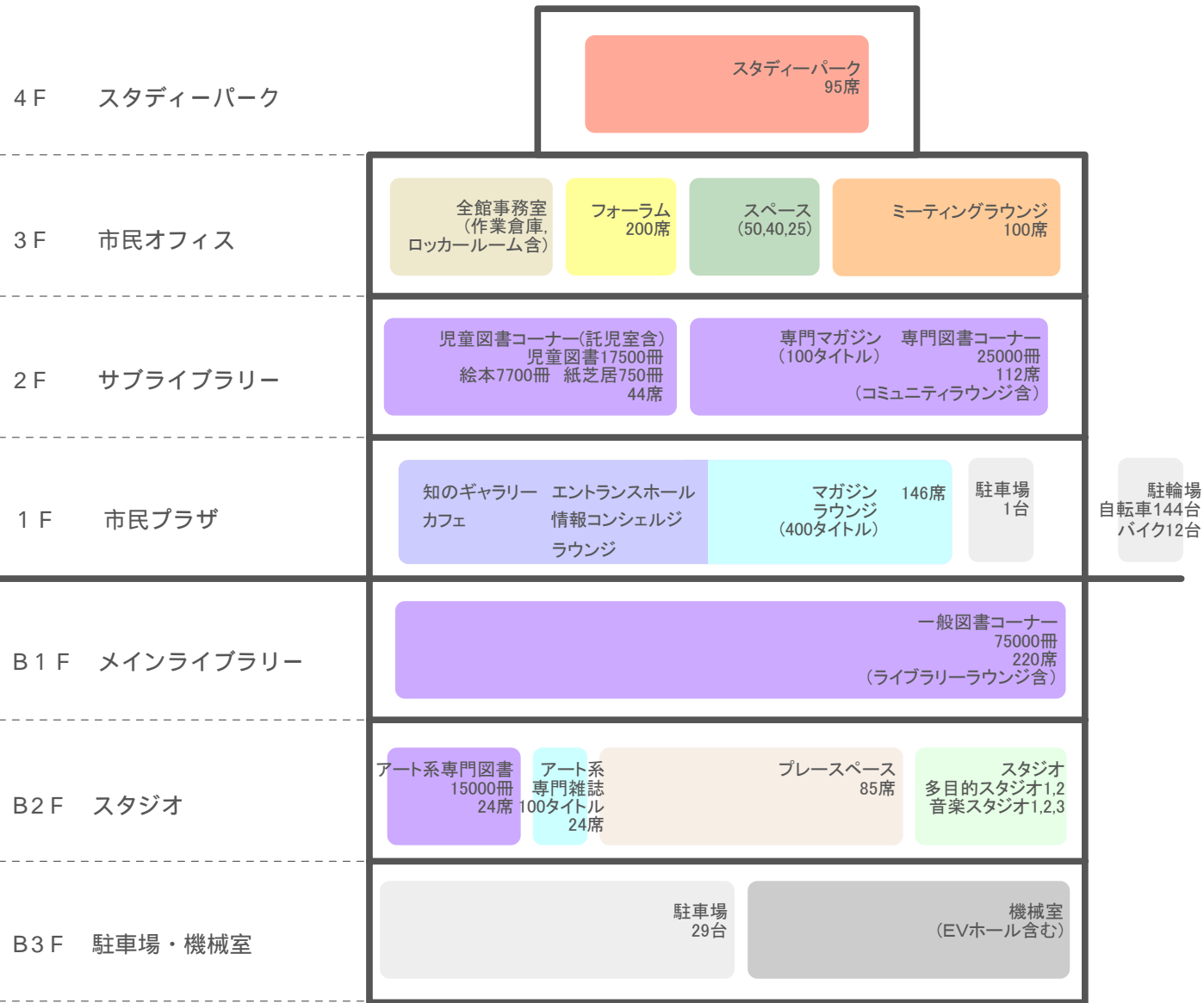
資料目次

（1）断面構成図Ⅰ案、Ⅱ案（P1）

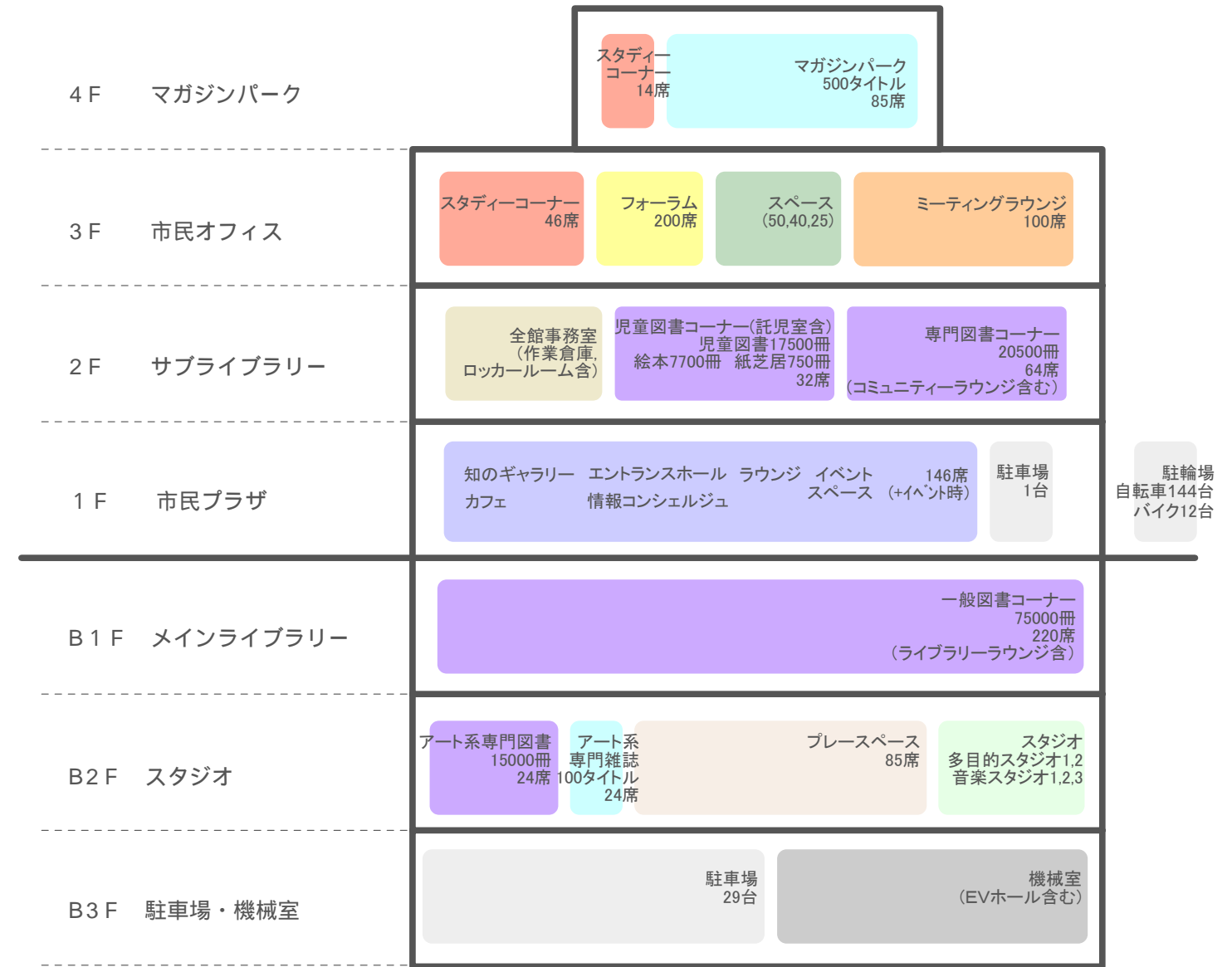
（2）各階ゾーニング図Ⅰ案（P2～P7）

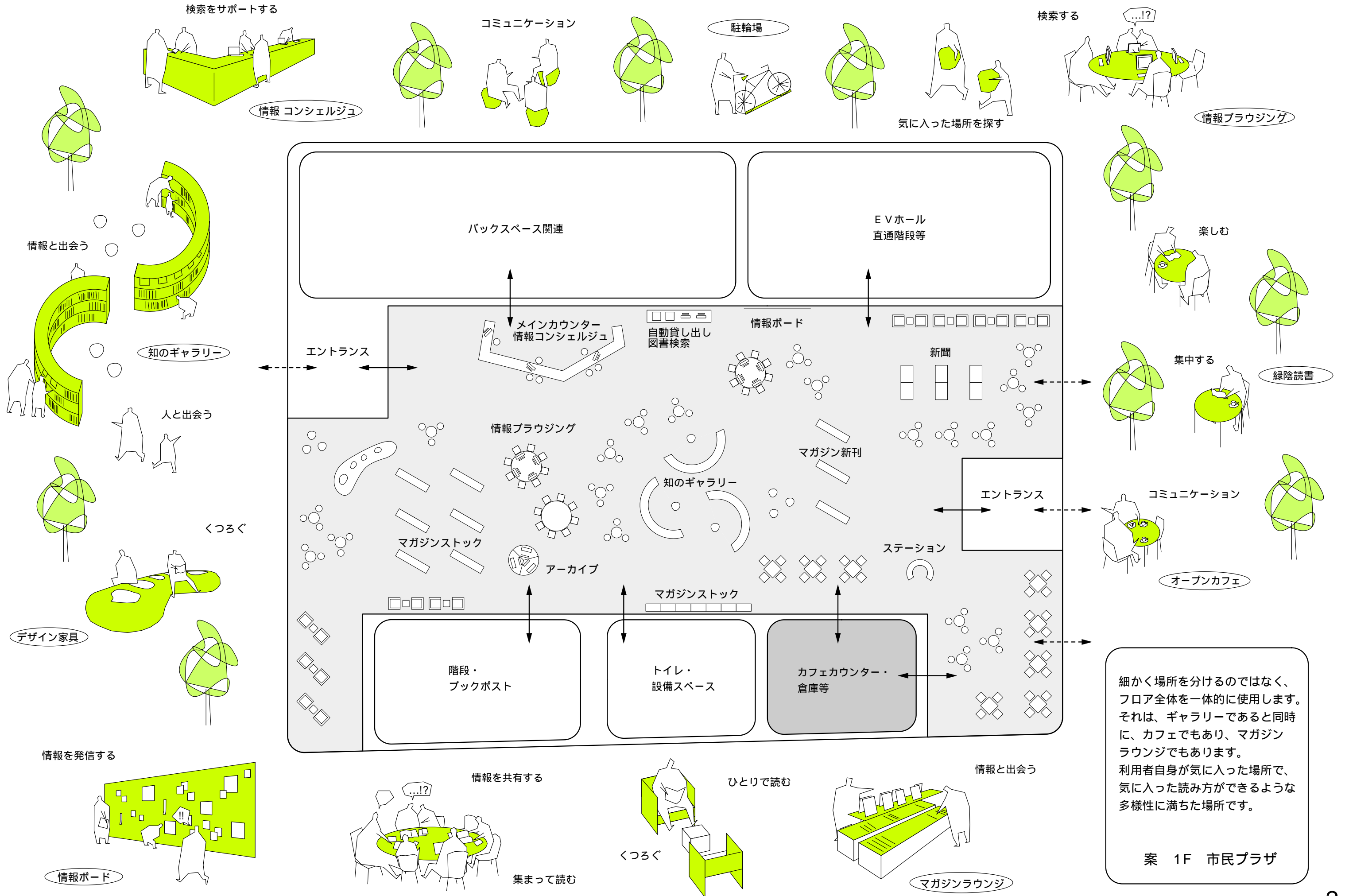
（3）各階ゾーニング図Ⅱ案（P8～P13）

案



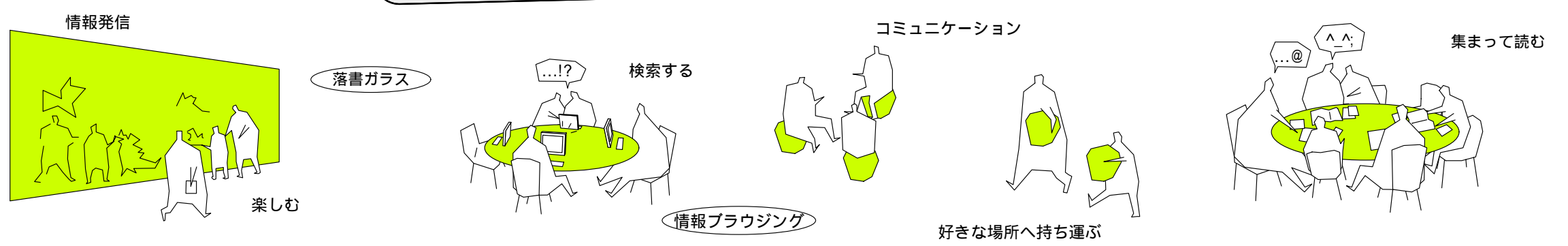
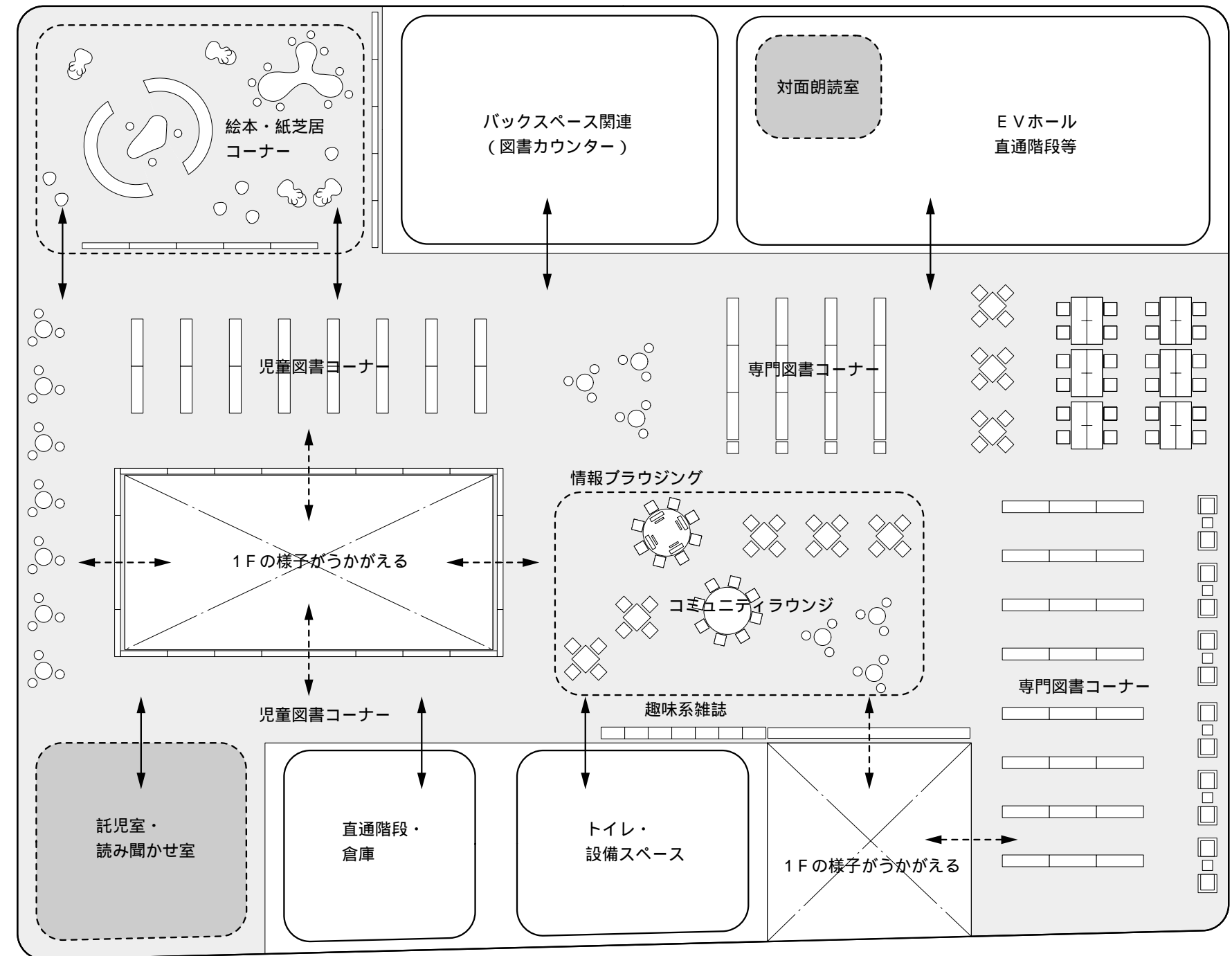
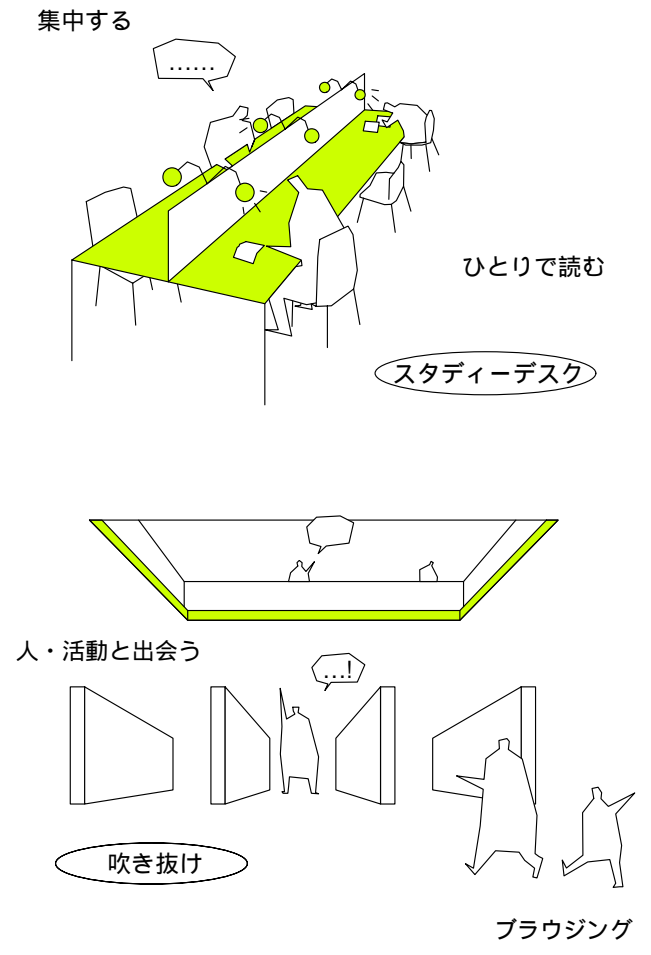
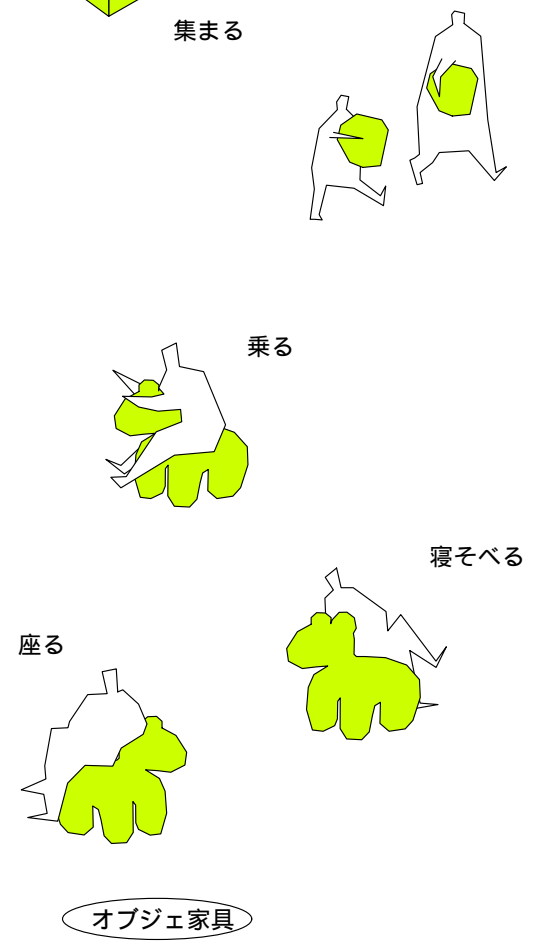
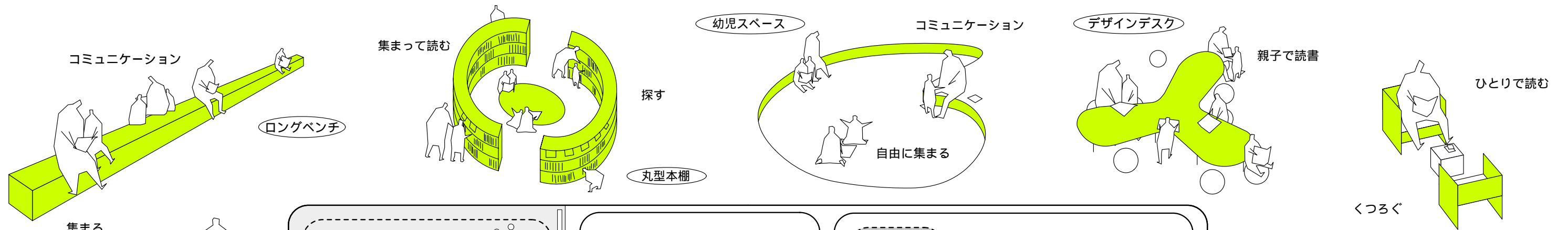
案





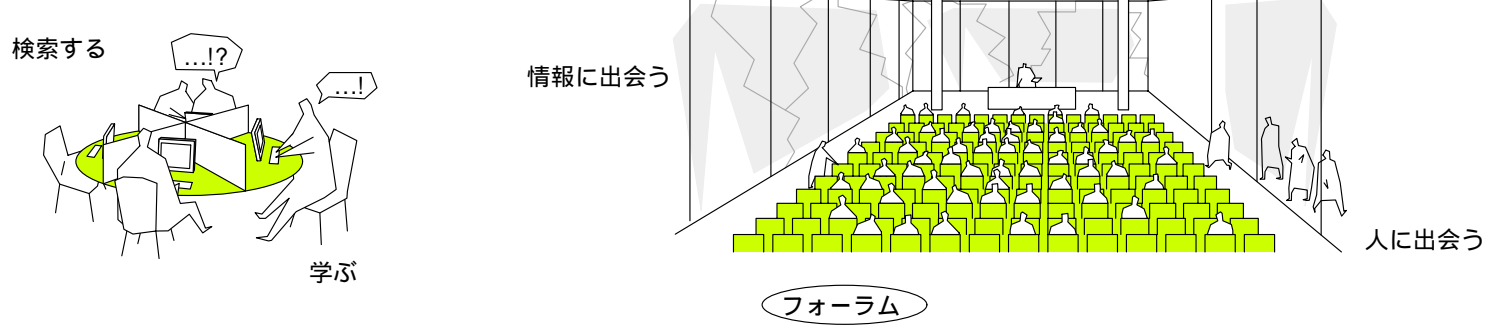
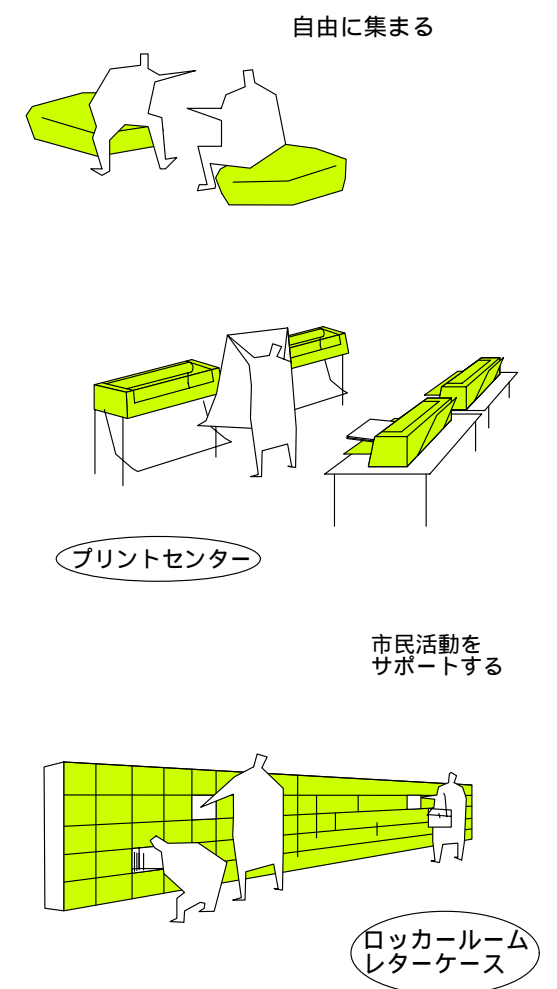
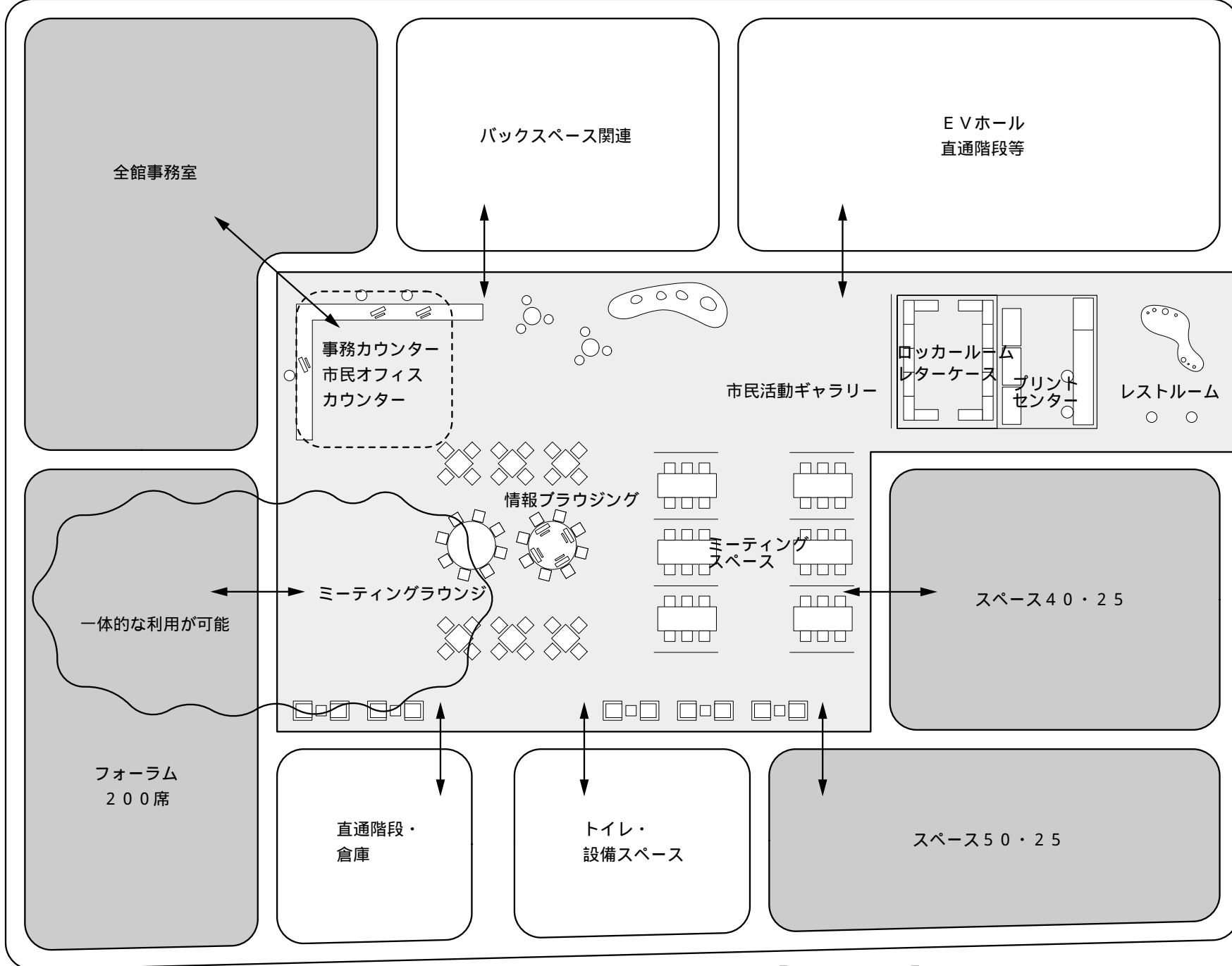
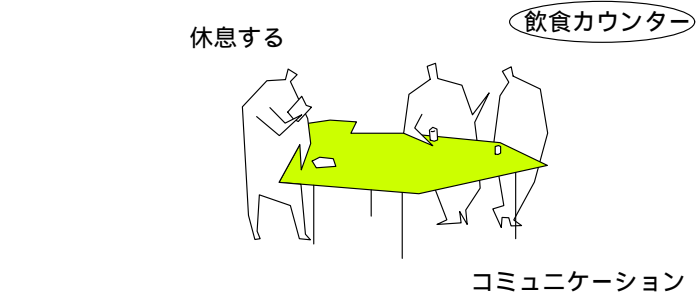
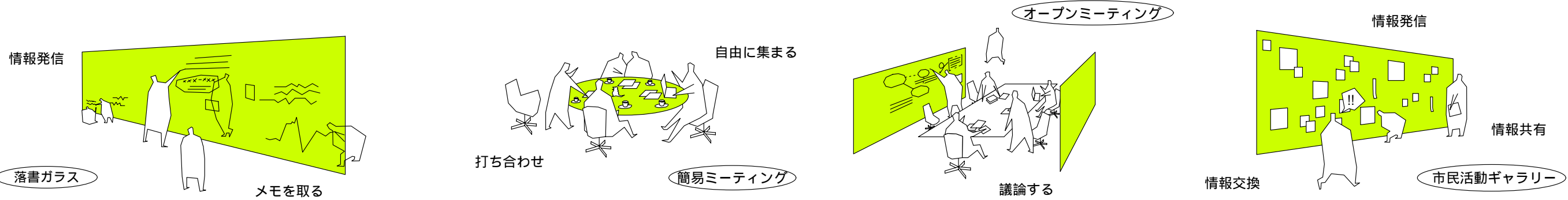
細かく場所を分けるのではなく、フロア全体を一体的に使用します。それは、ギャラリーであると同時に、カフェでもあり、マガジンラウンジでもあります。利用者自身が気に入った場所で、気に入った読み方ができるような多様性に満ちた場所です。

案 1F 市民プラザ



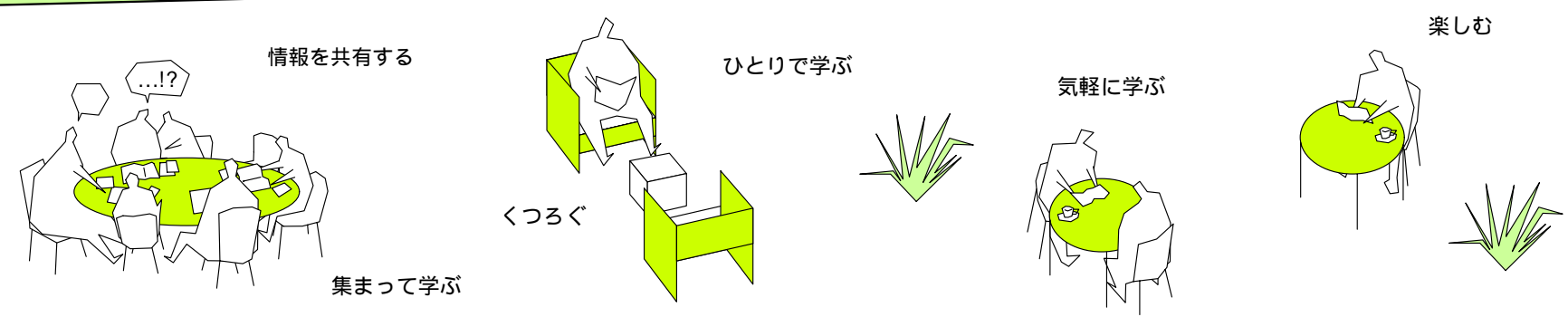
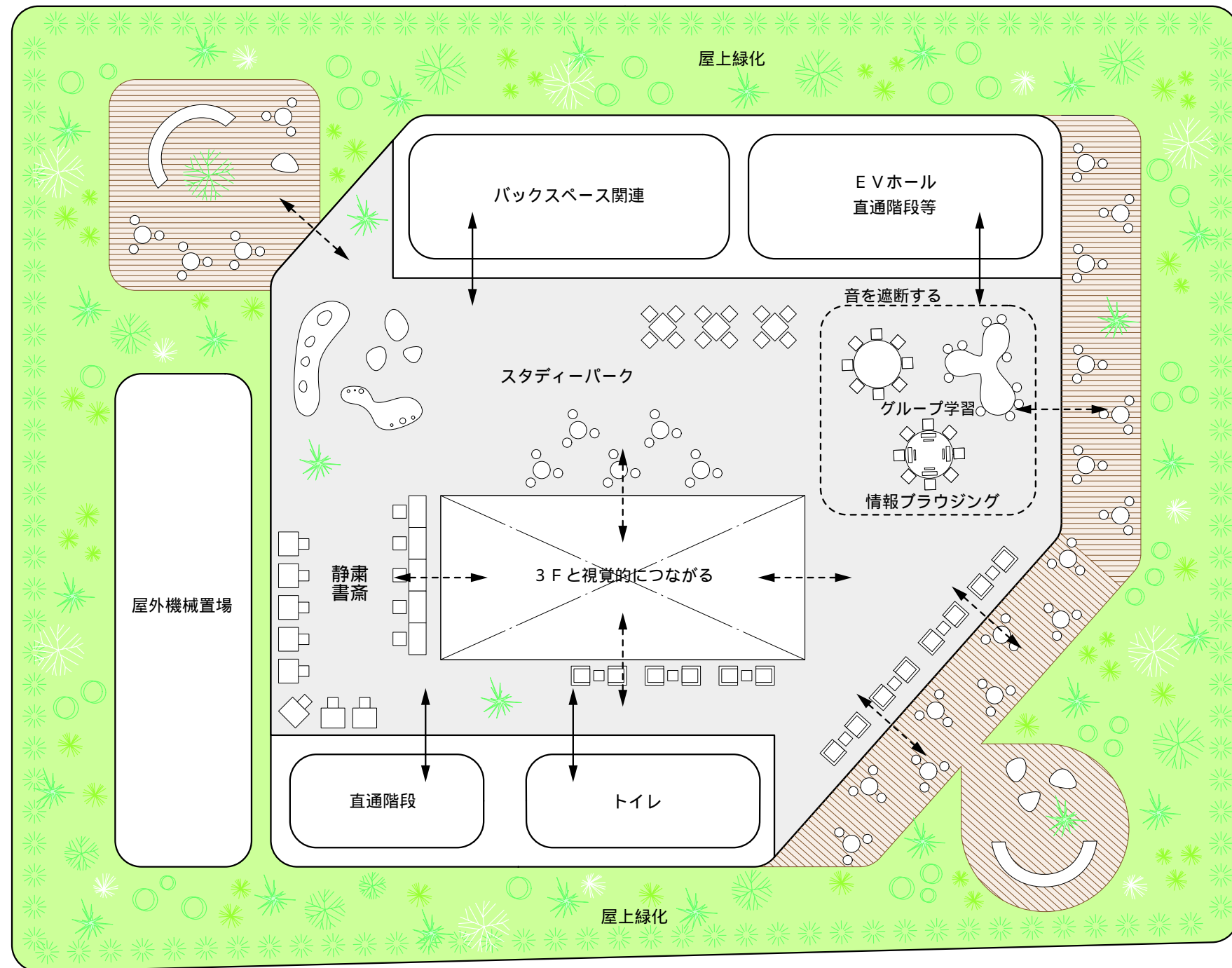
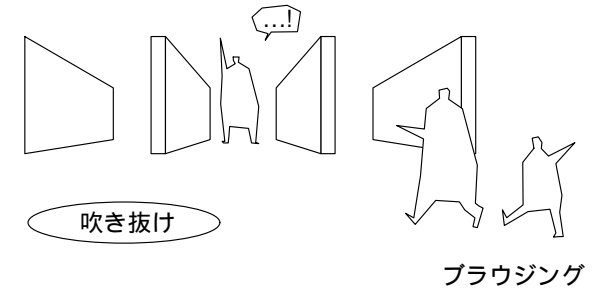
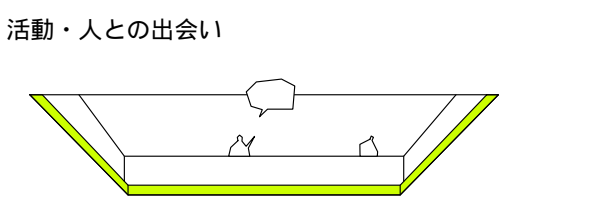
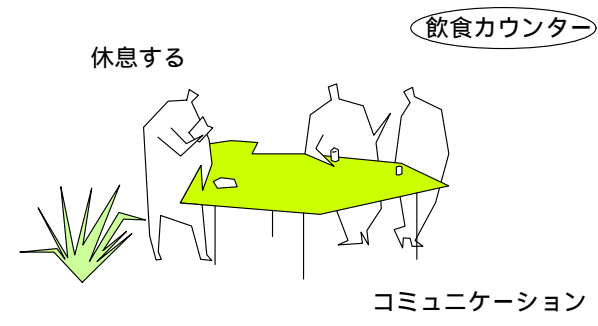
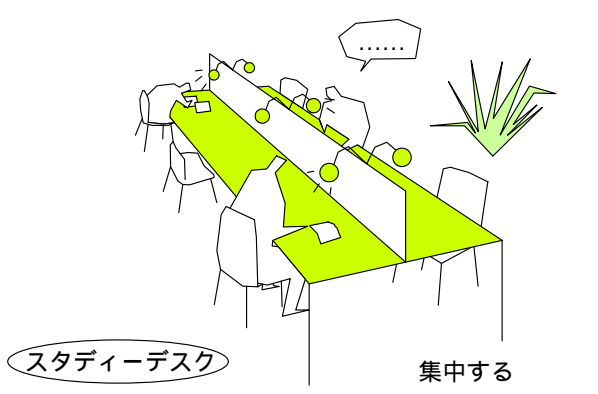
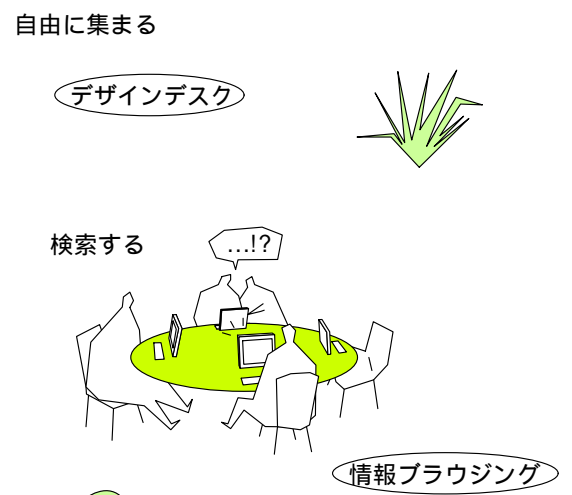
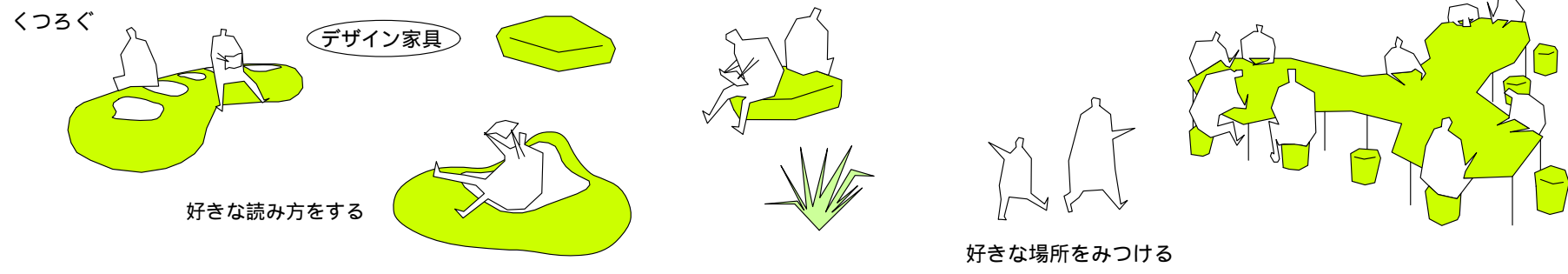
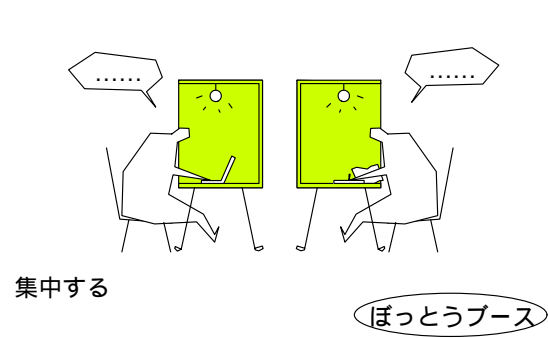
児童図書コーナー、専門図書コーナーの両方から使えるコミュニティラウンジを設けています。親子での利用や類似の趣味を持つ人々をつなげるオープンラウンジです。時にはミニイベントに使用することも可能です。

案 2F サブライブラリー



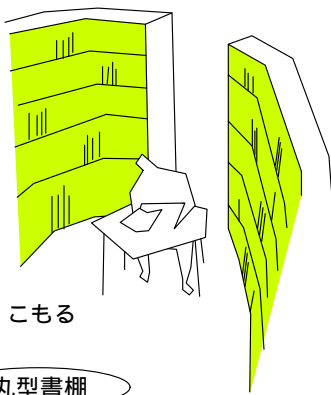
自由なミーティングを促すオープンスペースとして、ミーティングラウンジを中央に配置しています。周囲には閉じたスペースとして、フォーラム・スペースを配置しています。フォーラムを使用していないときには、ミーティングラウンジと一体化して利用できます。

案 3F 市民オフィス



公園のように明るく、快適なスタディーコーナーです。様々なスタディースタイルを提供し、選択性のある場所としています。屋上緑化された外部とつながり外で本を読むことも可能です。

案 4F スタディーパーク



こもる

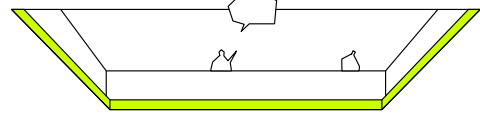
丸型書棚



集中する

スタディーデスク

活動・人との出会い

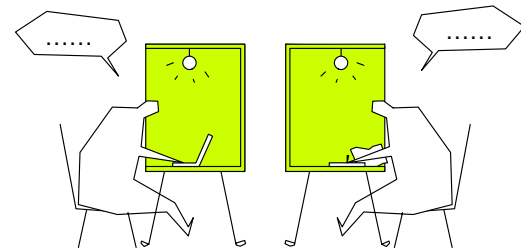


吹き抜け



ブラウジング

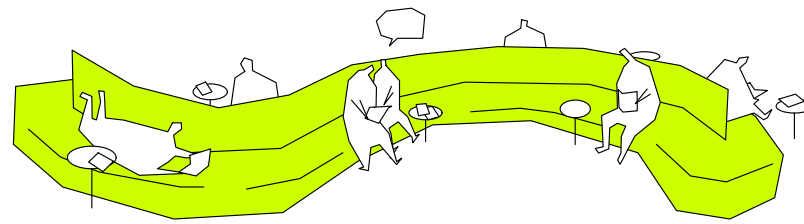
集中する



ぼっとうブース

壁面書架：一筆書き状に書架が並ぶことで、高い検索性を実現すると共に、中央にオープンスペースが確保でき、容易に多数の席を確保できる。平行配置の書架に比べディスプレイとしての書棚が作り易い。

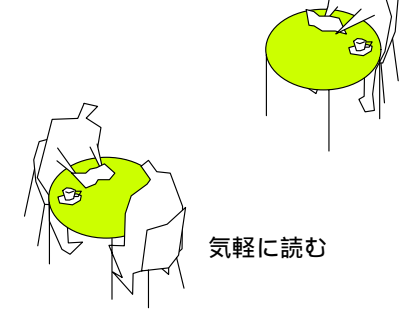
様々な居方ができる



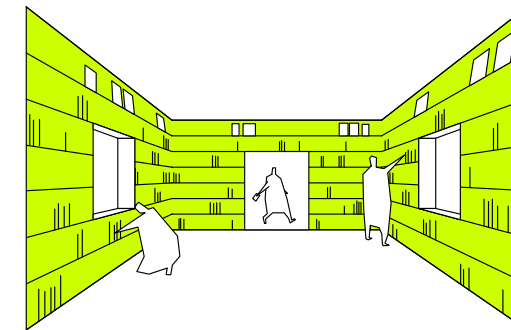
デザイン家具

ブラウジング

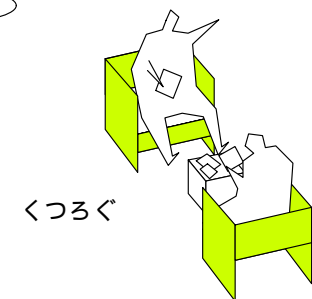
楽しむ



気軽に読む

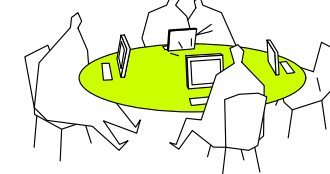


本棚ルーム

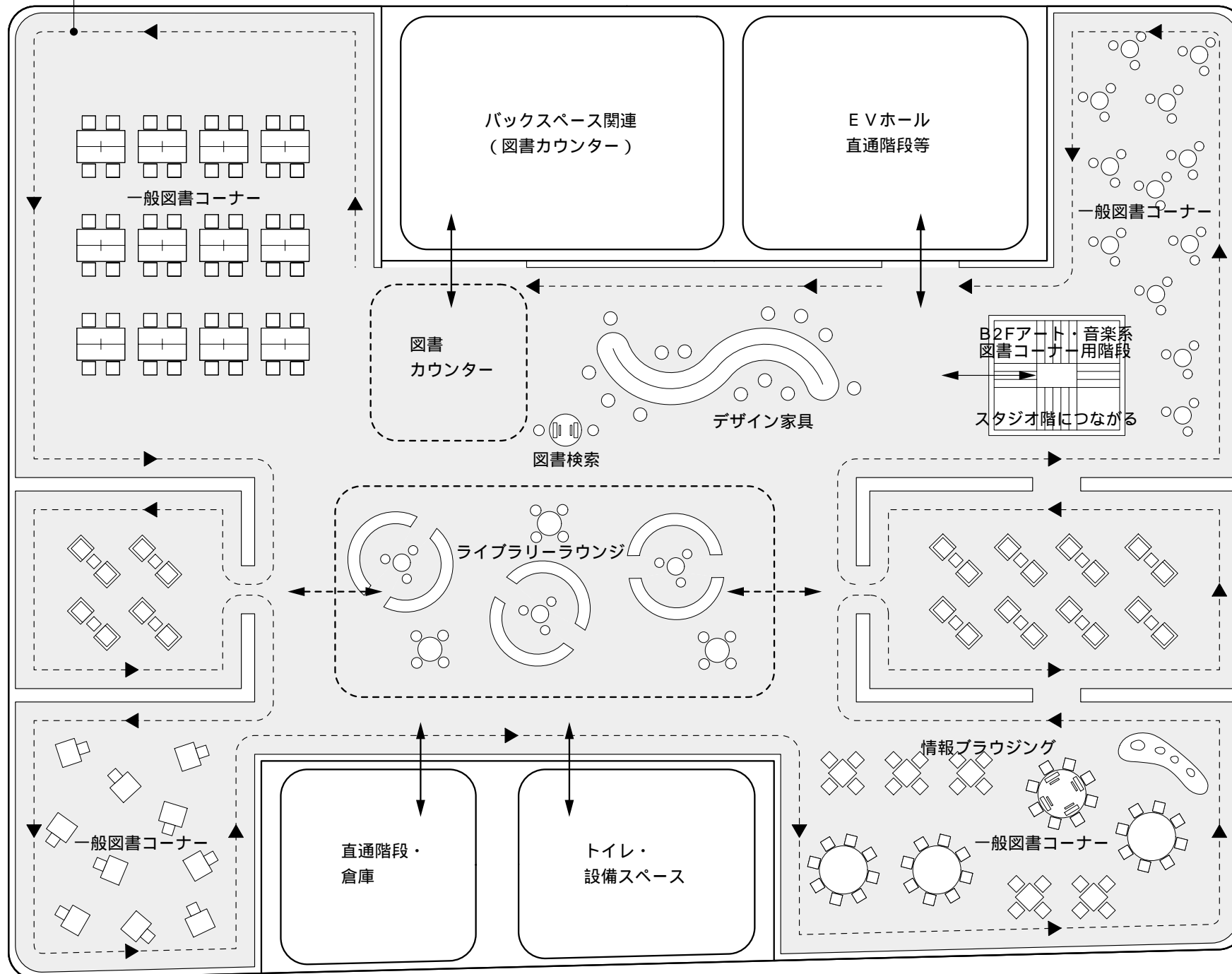


くつろぐ

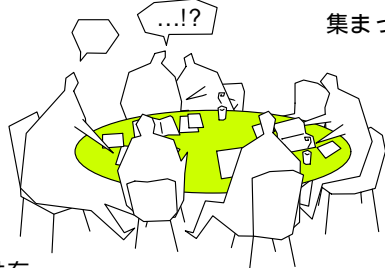
検索する



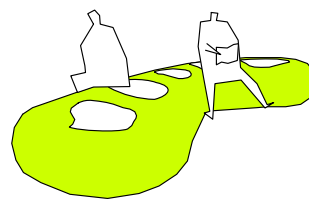
情報ブラウジング



集まって読む

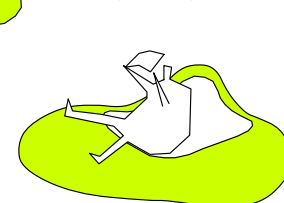


情報の共有



デザイン家具

くつろぐ



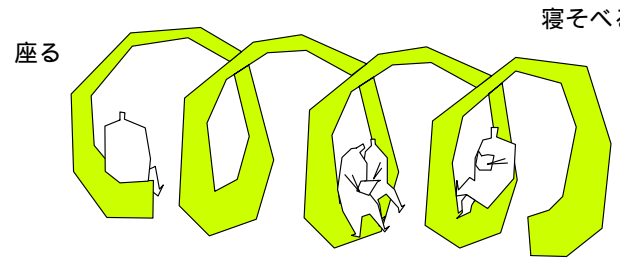
ブラウジング

知的好奇心を喚起するようなフリーな閲覧スペースとして、ライブラリーラウンジを中央に配置しています。周囲には様々な居方・読み方を触発するような閲覧スペースを配置しています。

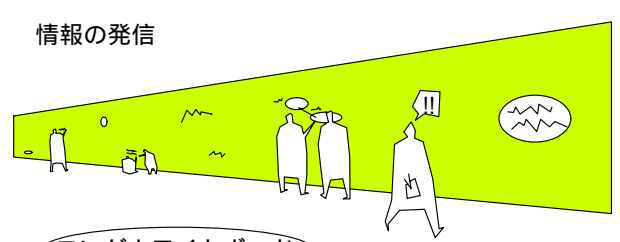
案 B1F メインライブラリー



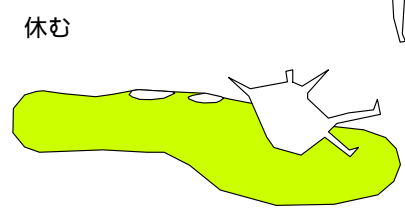
コミュニケーション



デザイン家具 様々な居方ができる



情報の共有



デザイン家具

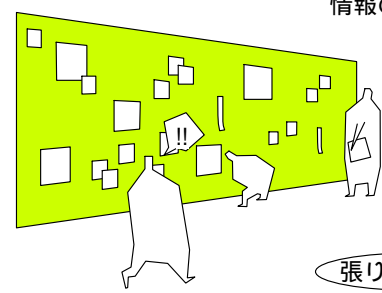


座る

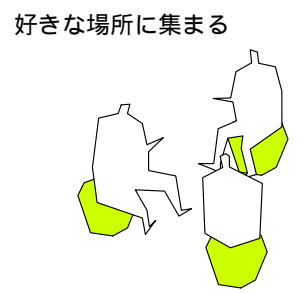


寝そべる

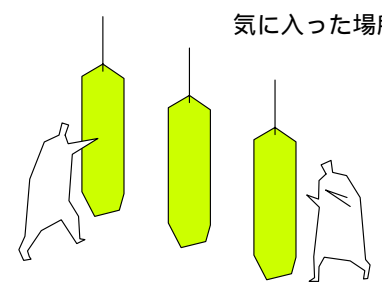
オブジェ家具



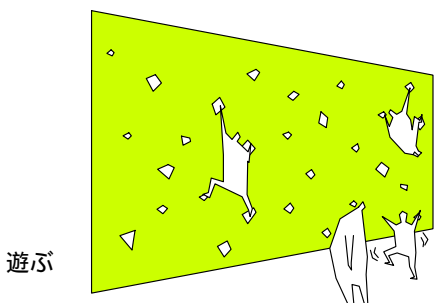
張り紙ウォール



気に入った場所に持ち運ぶ

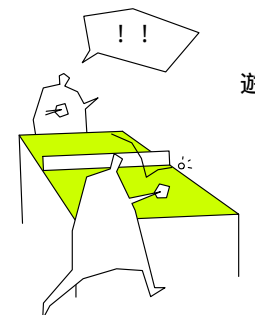


エクササイズ

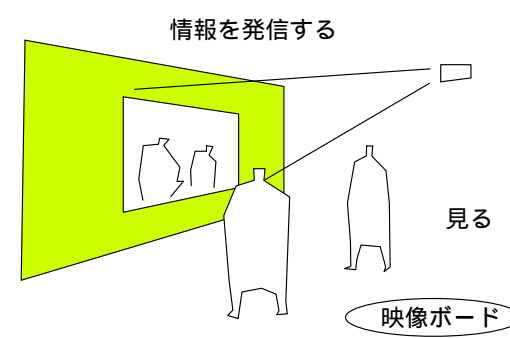


遊ぶ

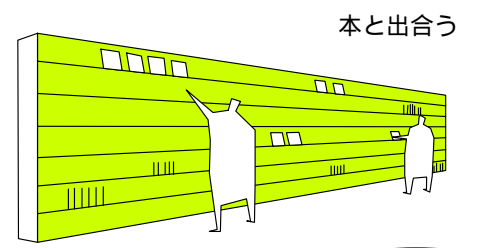
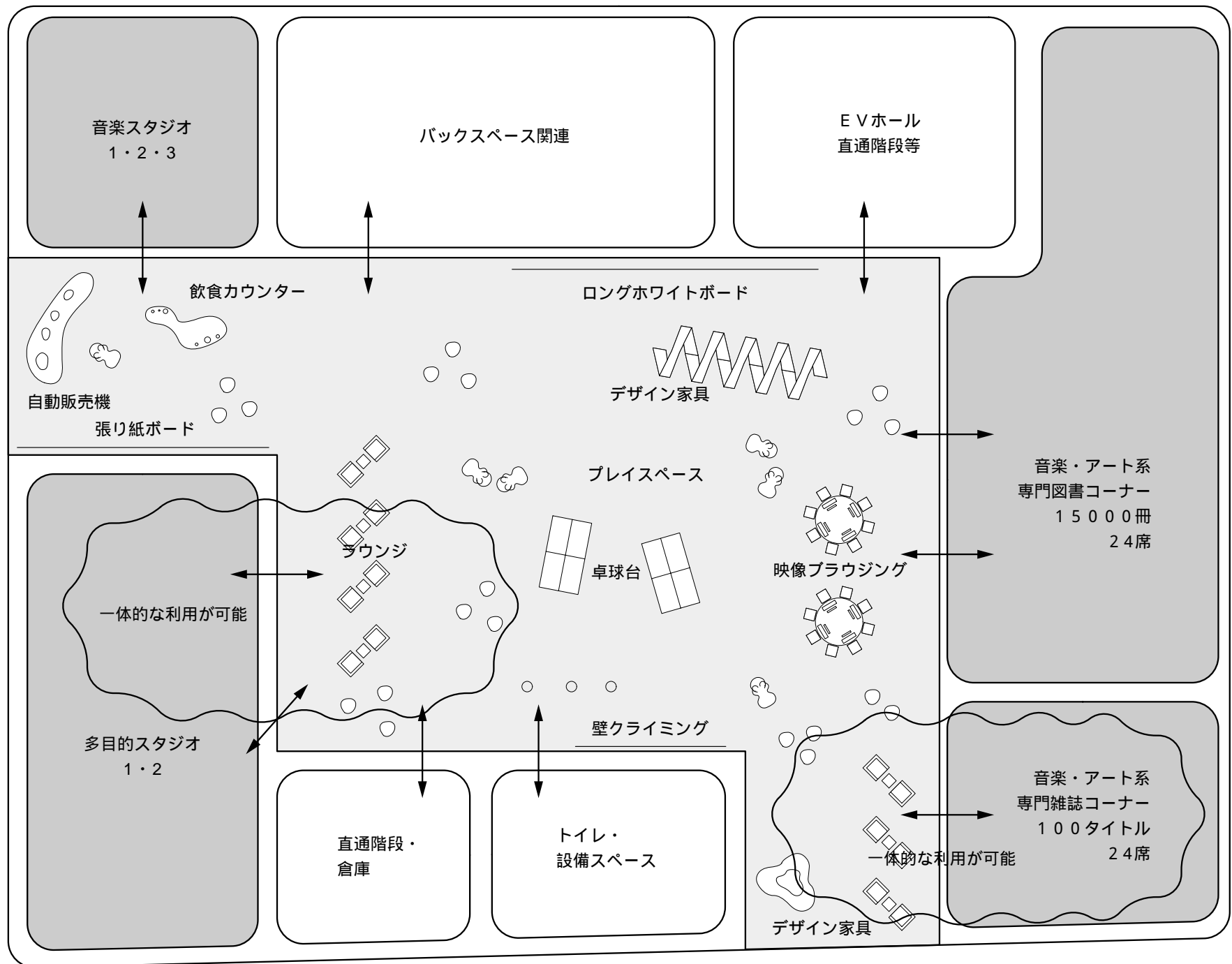
エクササイズ



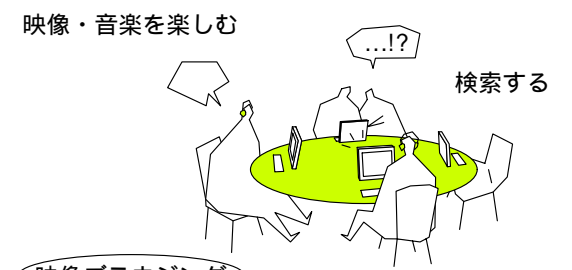
遊ぶ



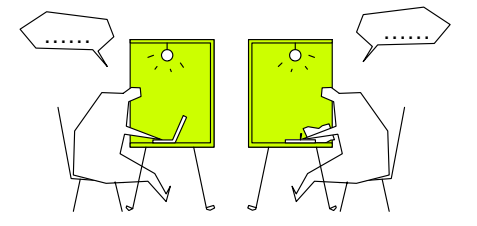
見る



壁面書架



映像ブラウジング

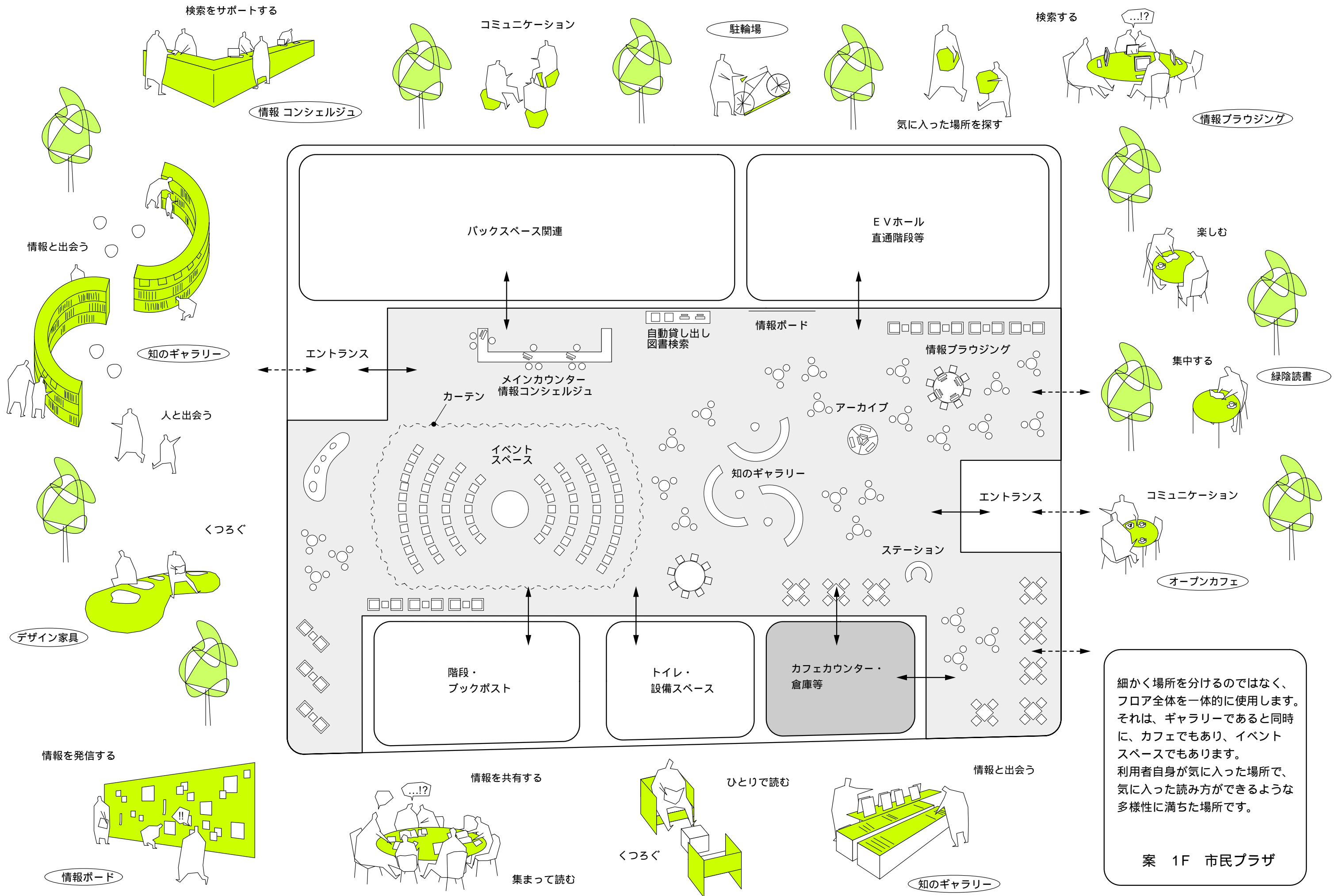


集中する

ぼっとうブース

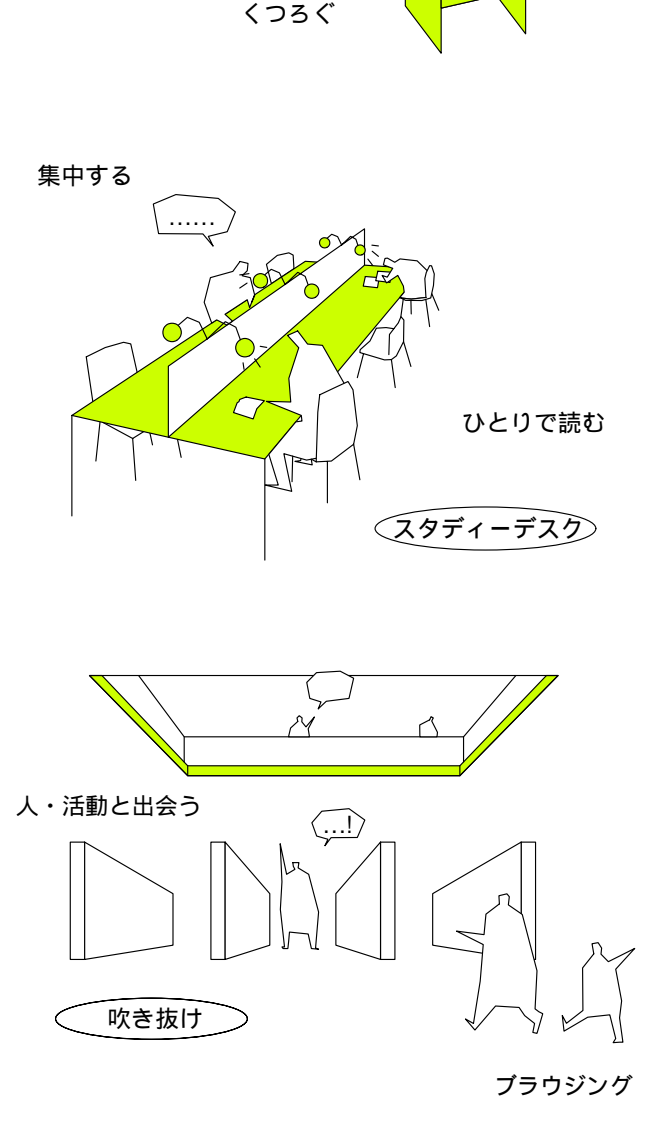
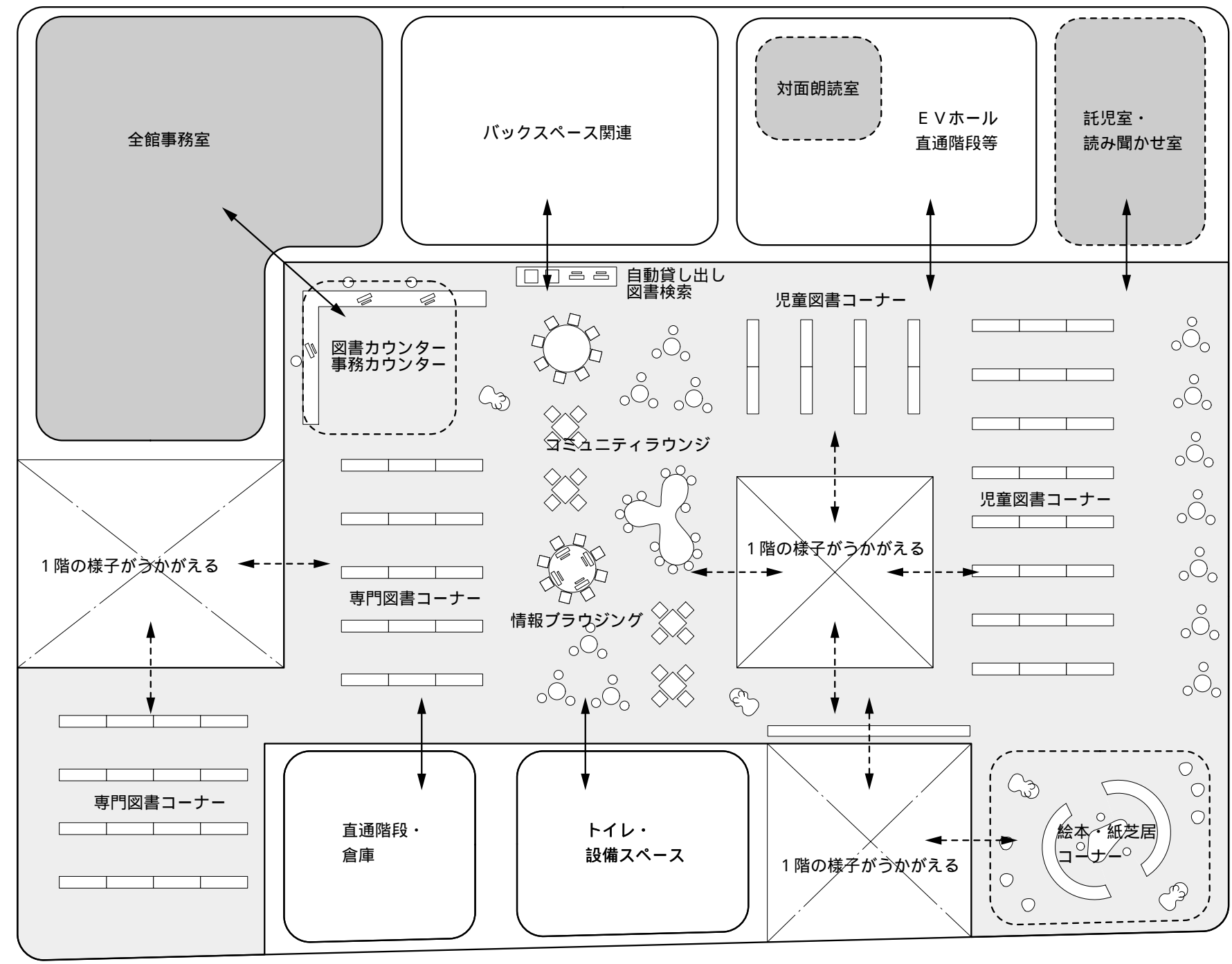
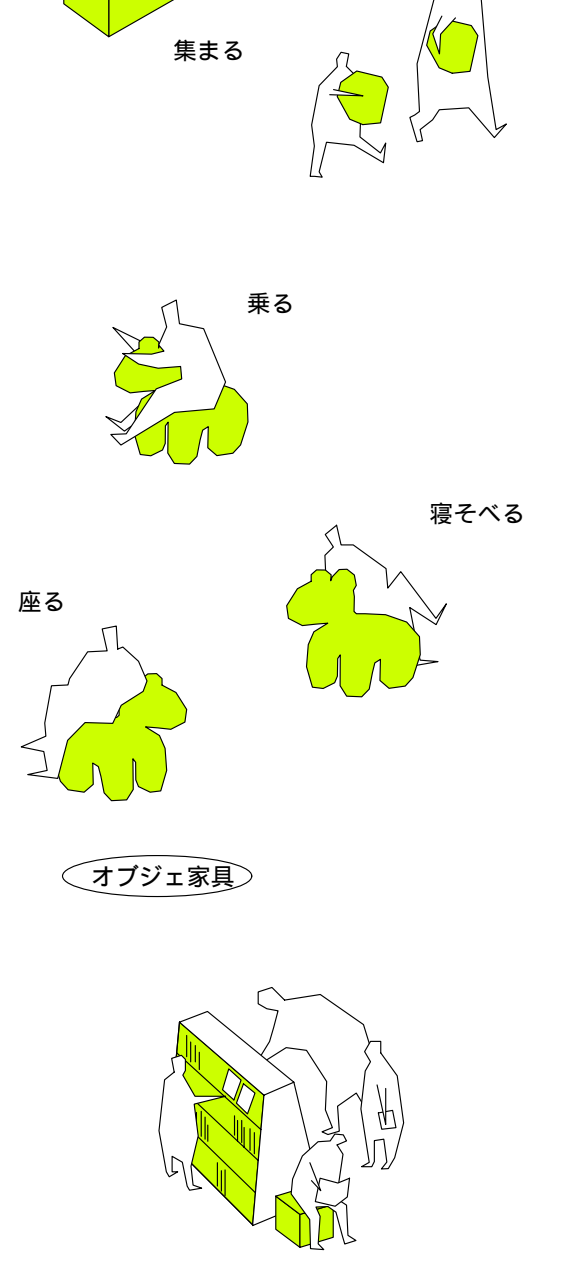
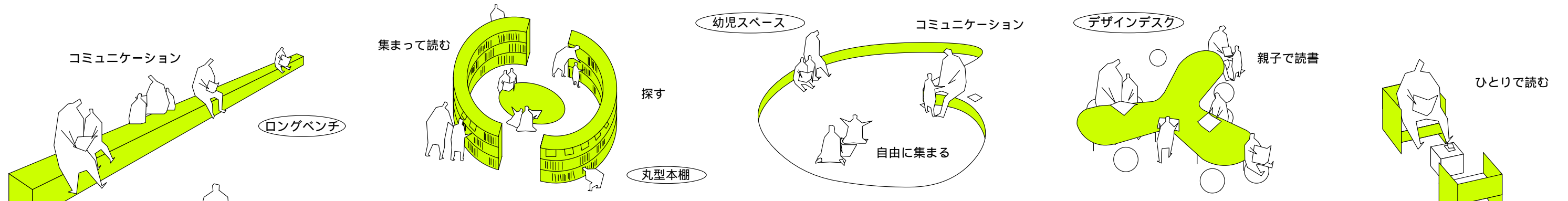
オープンな広場のようなスペースを中心に様々なコーナーが有機的につながります。スタジオや雑誌コーナーを開放することでさらに全体につながり、緩やかに機能が統合します。

案 B2F プレイスペース



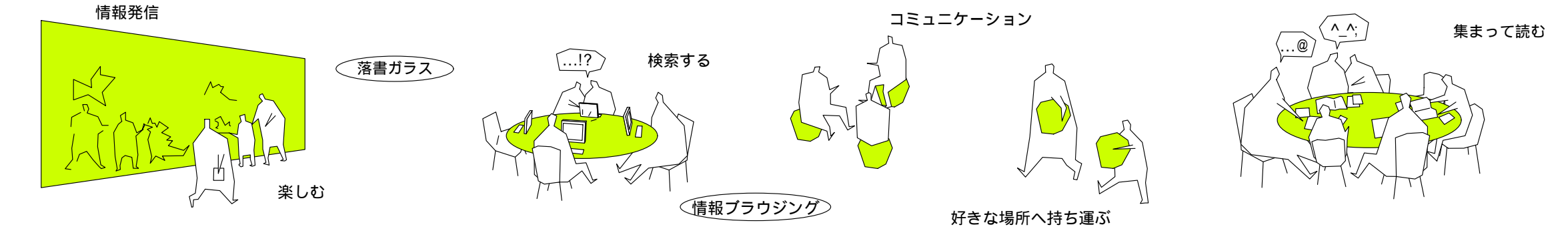
細かく場所を分けるのではなく、フロア全体を一体的に使用します。それは、ギャラリーであると同時に、カフェでもあり、イベントスペースでもあります。利用者自身が気に入った場所で、気に入った読み方ができるような多様性に満ちた場所です。

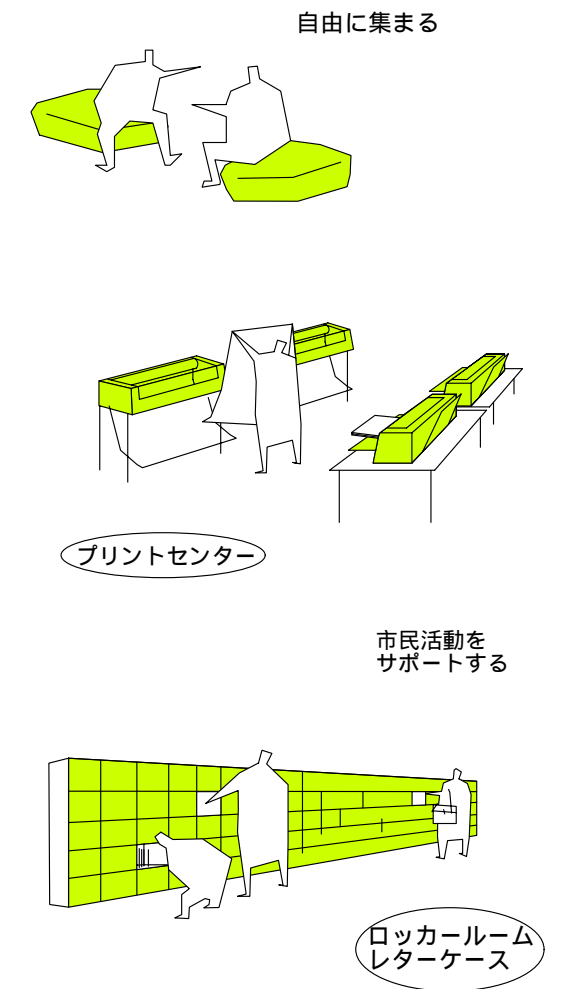
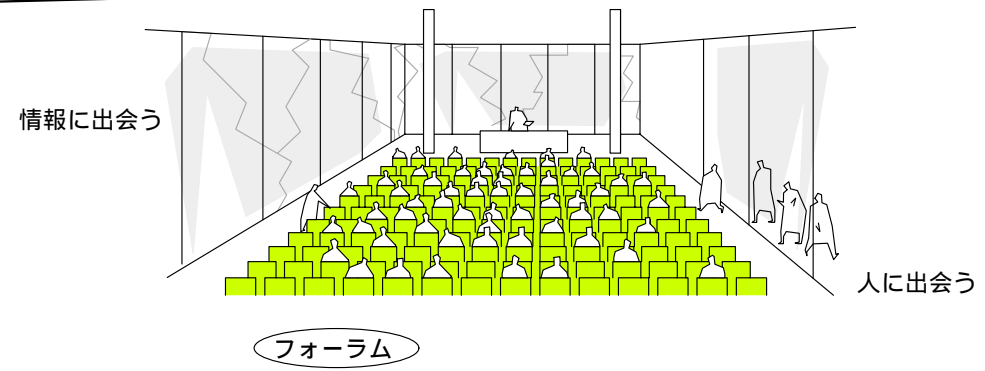
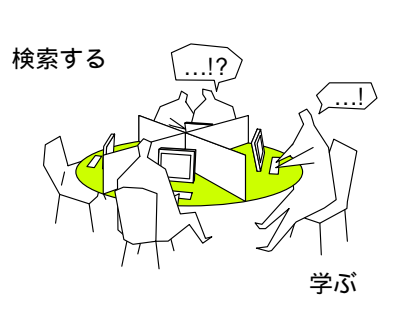
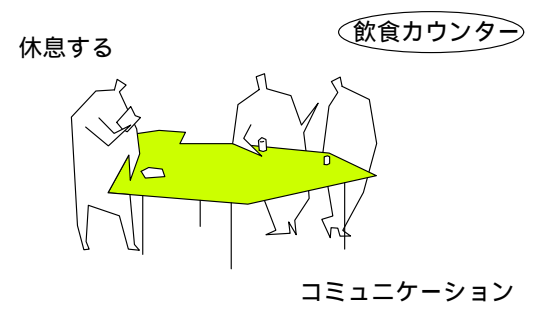
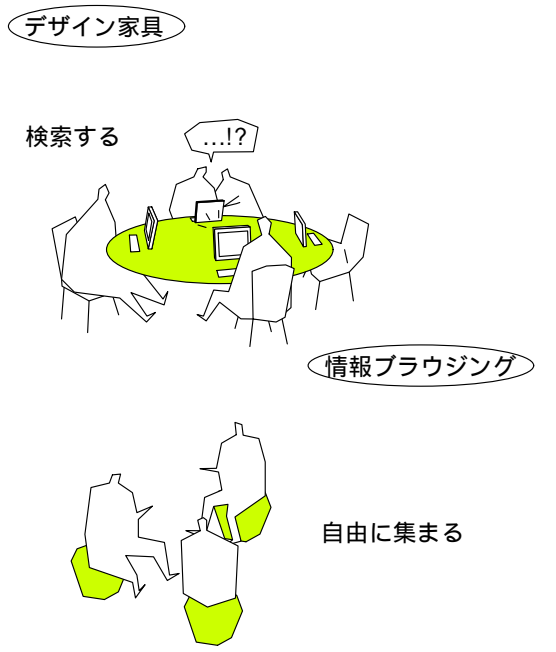
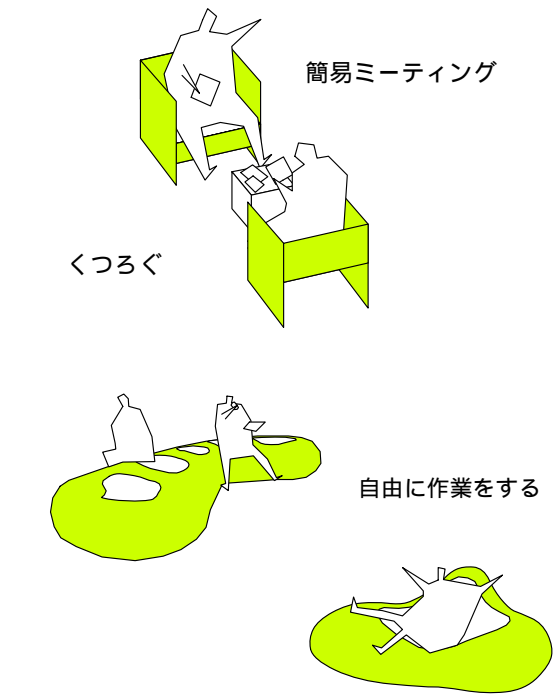
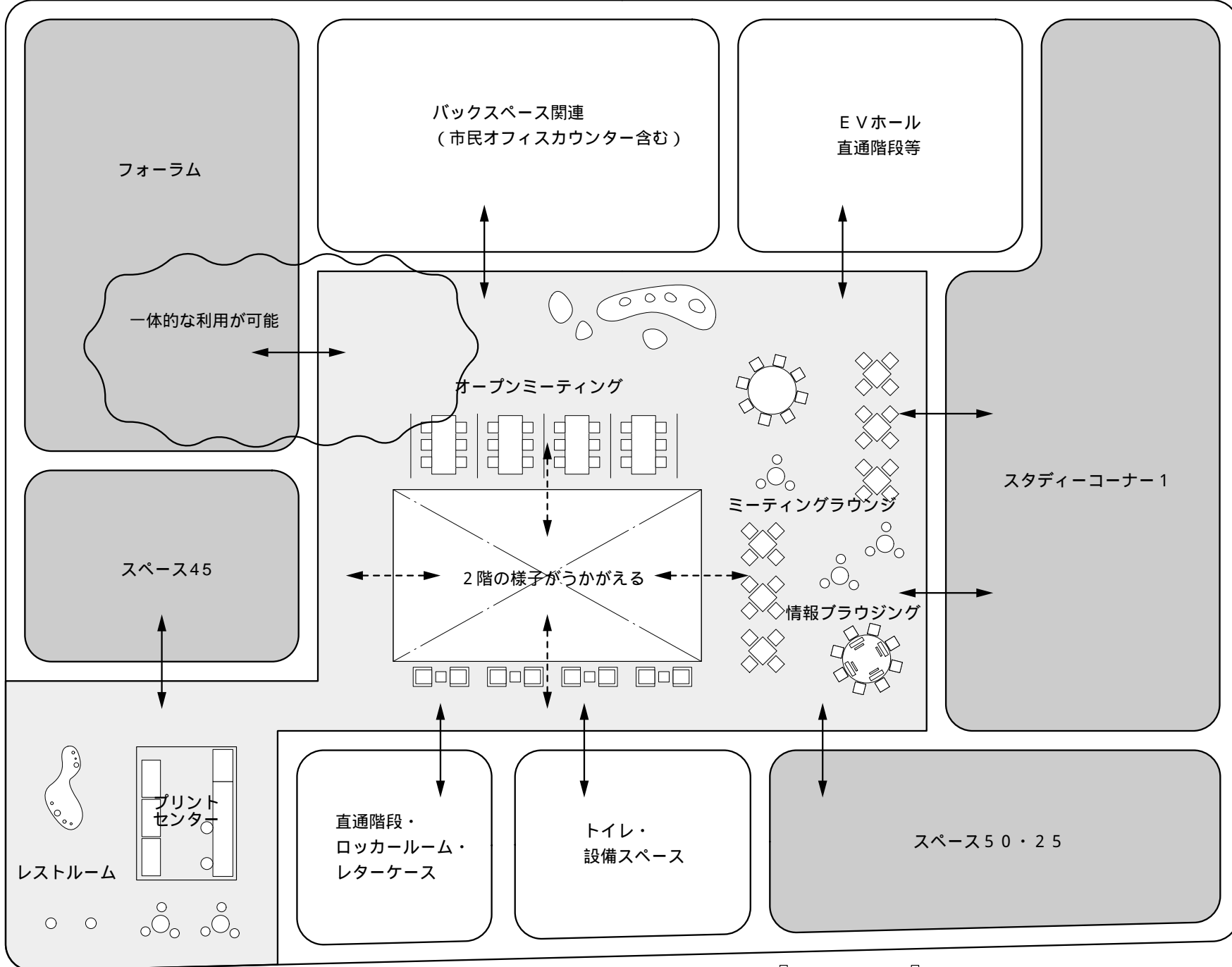
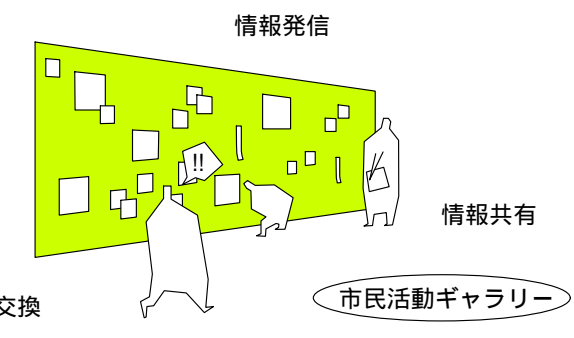
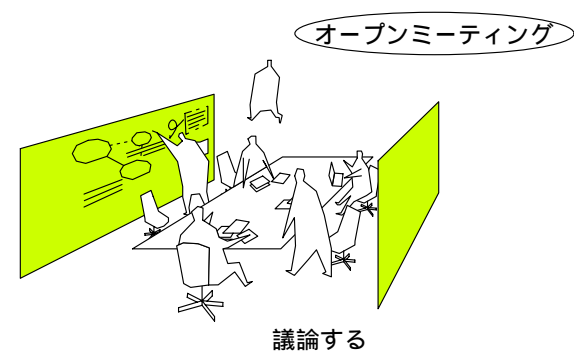
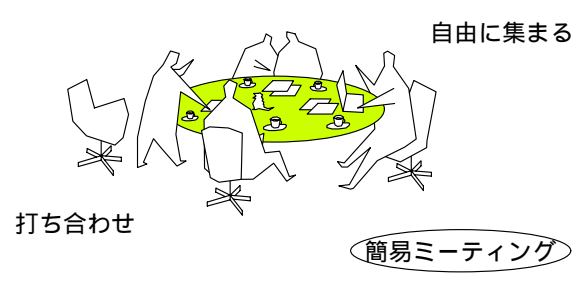
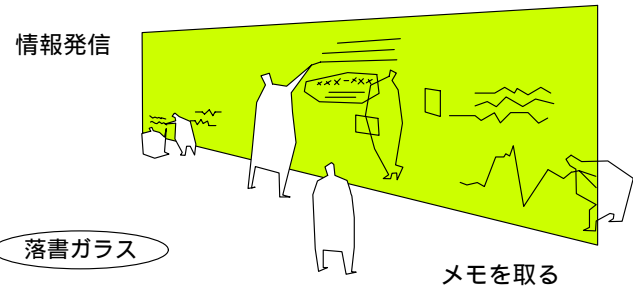
案 1F 市民プラザ



児童図書コーナー、専門図書コーナーの両方から使えるコミュニティラウンジを設けています。親子での利用や類似の趣味を持つ人々をつなげるオープンラウンジです。時にはミニイベントに使用することも可能です。

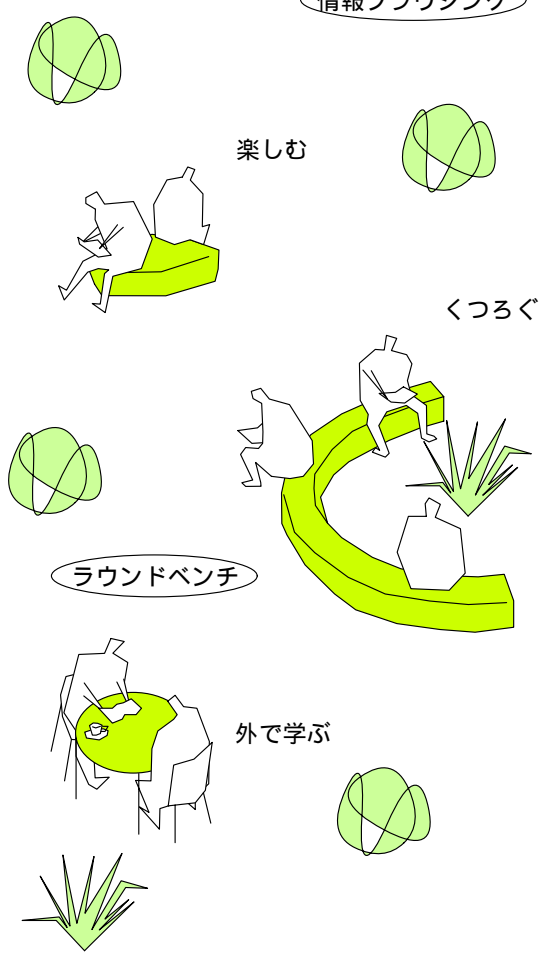
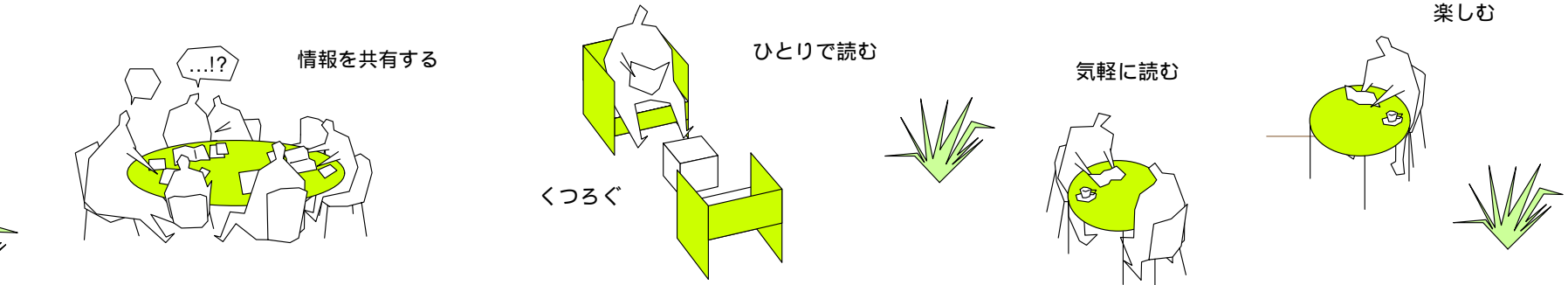
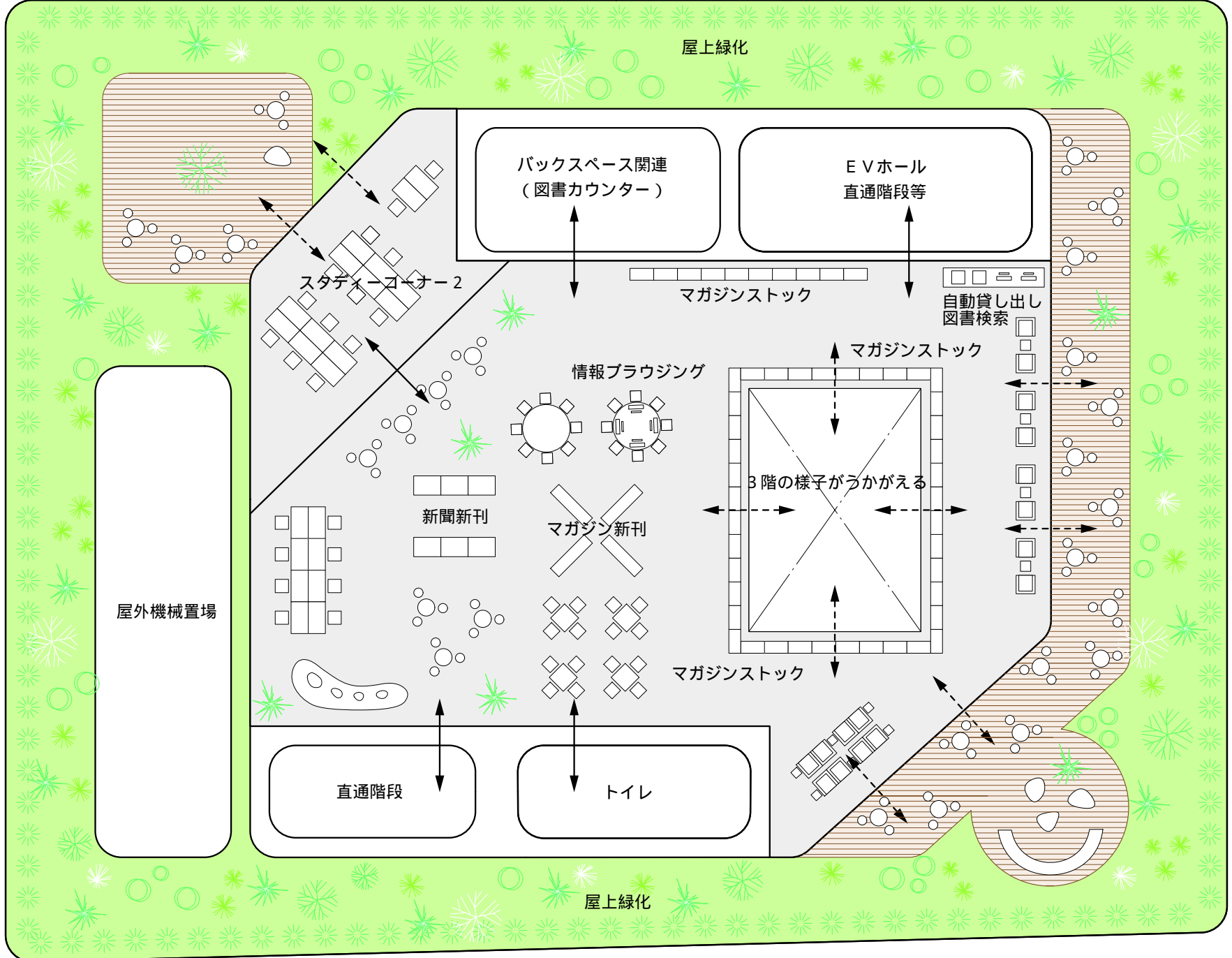
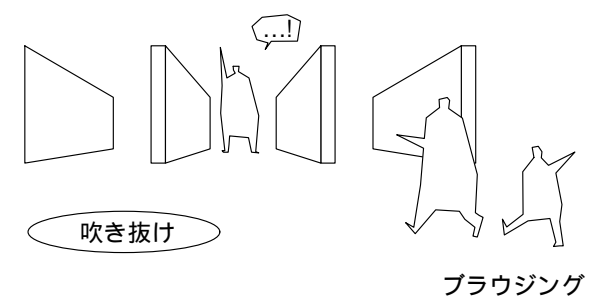
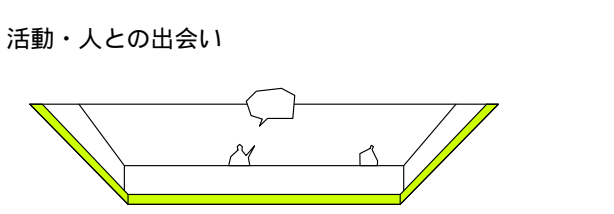
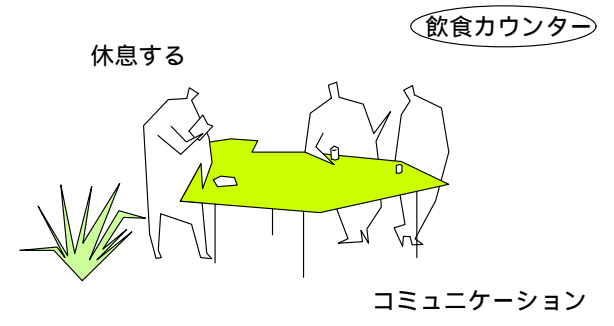
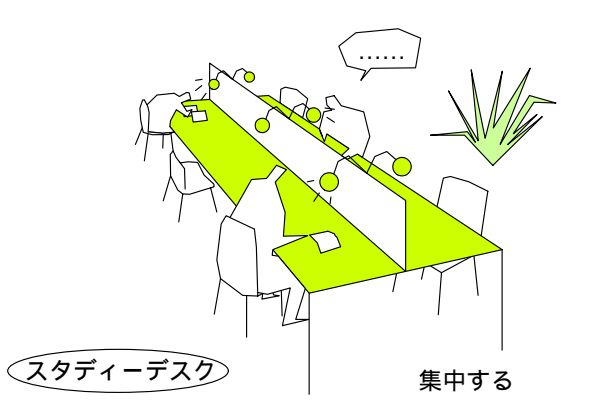
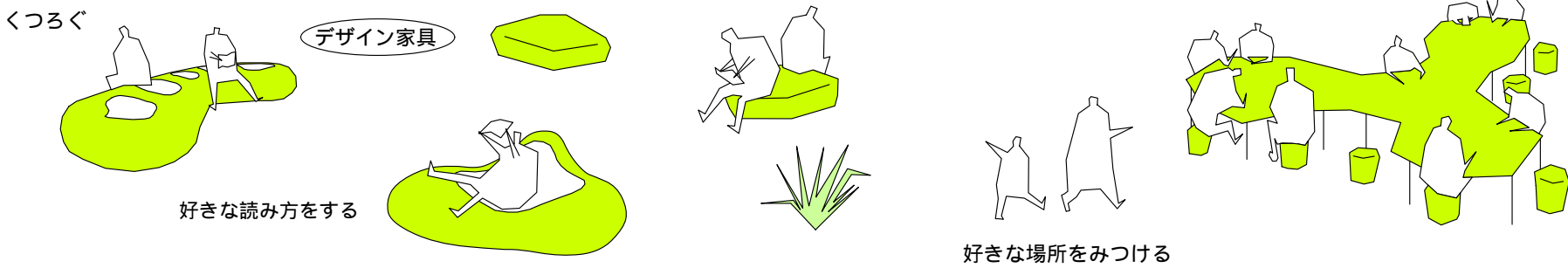
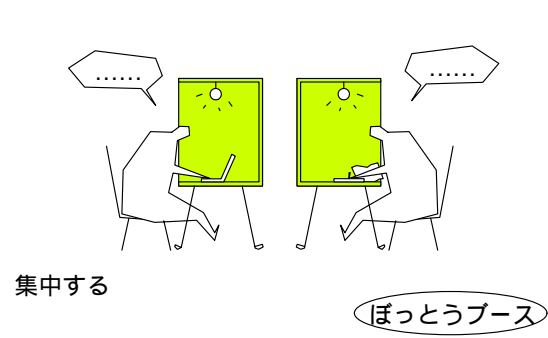
案 2F サブライブラリー





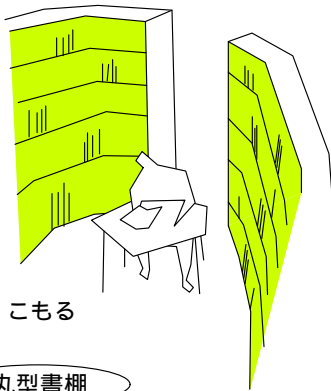
自由なミーティングを促すオープンスペースとして、ミーティングラウンジを中央に配置しています。周囲には閉じたスペースとして、フォーラム・スペース・スタディーコーナーを配置しています。フォーラムを使用していないときには、ミーティングラウンジと一体的に利用できます。

案 3F 市民オフィス



公園のように明るく、比較的落ち着いたマガジンラウンジです。様々な読み方・居方を提供し、選択性のある場所としています。屋上緑化された外部とつながり外で本を読むことも可能です。

案 4F マガジンパーク

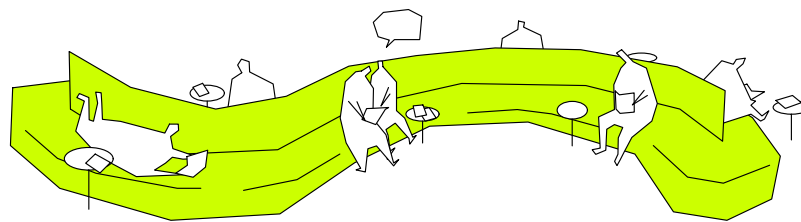


こもる

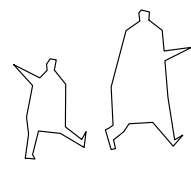
丸型書棚

壁面書架：一筆書き状に書架が並ぶことで、高い検索性を実現すると共に、中央にオープンスペースが確保でき、容易に多数の席を確保できる。平行配置の書架に比べディスプレイとしての書棚が作り易い。

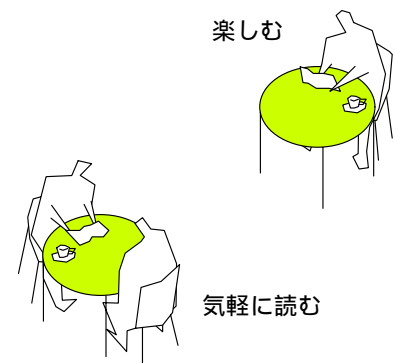
様々な居方ができる



デザイン家具

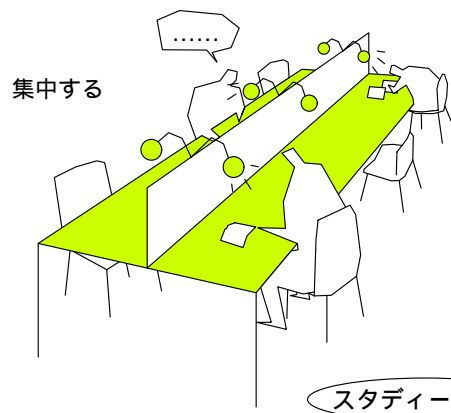


ブラウジング



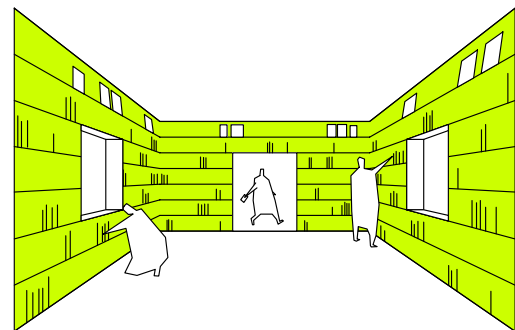
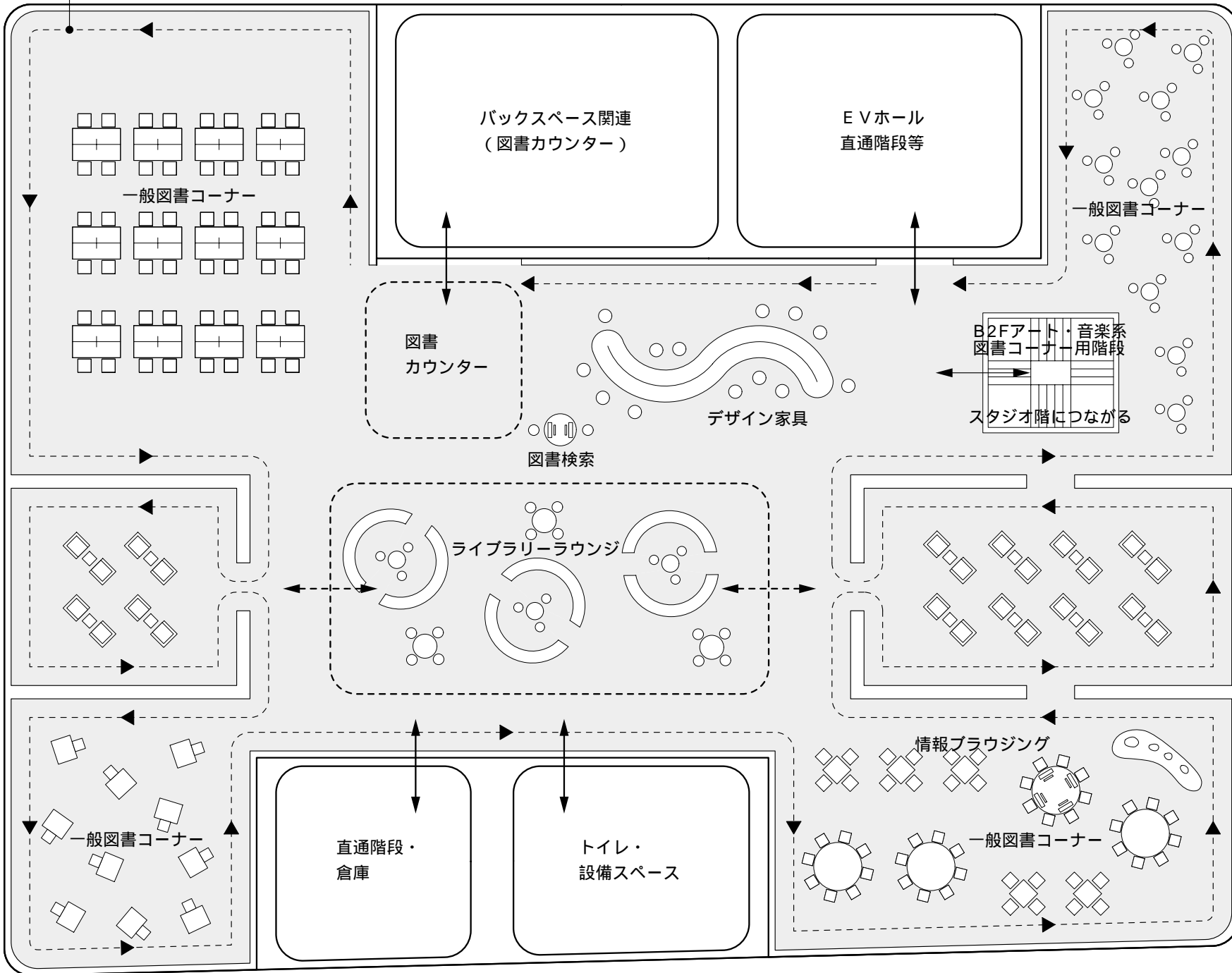
気軽に読む

楽しむ

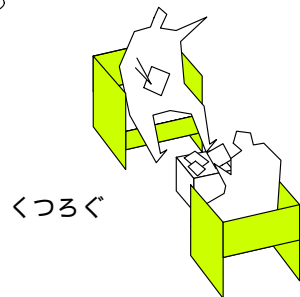


集中する

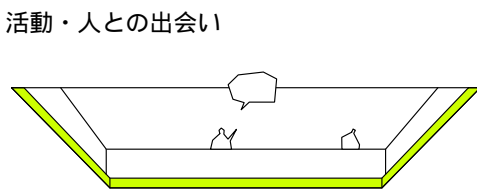
スタディーデスク



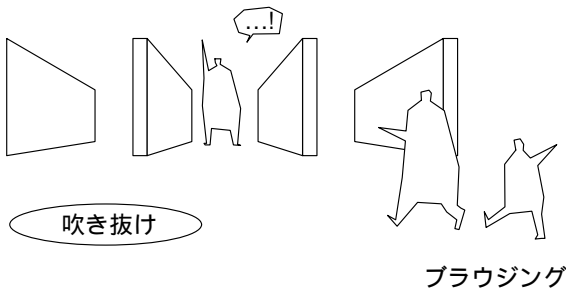
本棚ルーム



くつろぐ

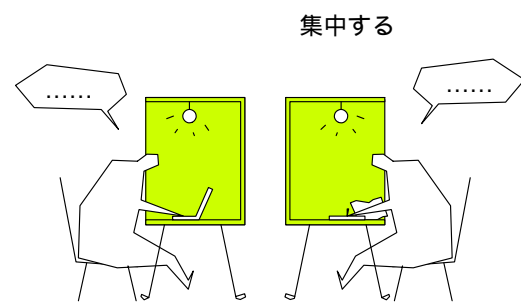


活動・人との出会い



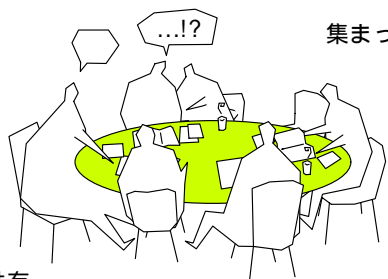
吹き抜け

ブラウジング



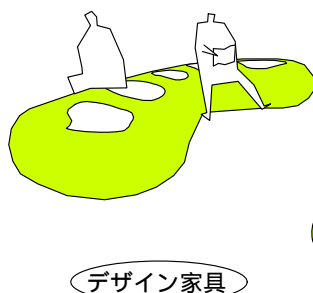
集中する

ぼっとうブース



集まって読む

情報の共有



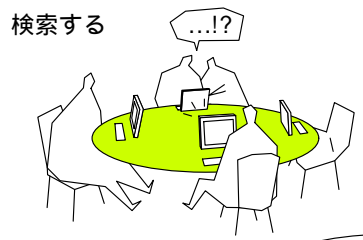
デザイン家具



くつろぐ



ブラウジング



検索する

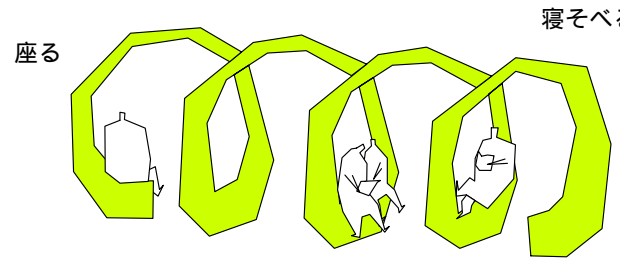
情報ブラウジング

知的好奇心を喚起するようなフリーな閲覧スペースとして、ライブラリーラウンジを中央に配置しています。周囲には様々な居方・読み方を触発するような閲覧スペースを配置しています。

案 B1F メインライブラリー



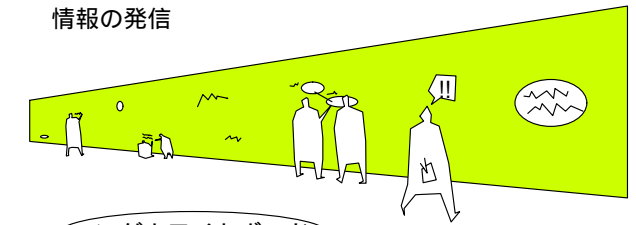
飲食カウンター



デザイン家具

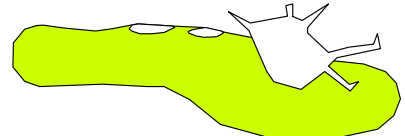
様々な居方ができる

気に入った場所に持ち運ぶ



ロングホワイトボード

休む



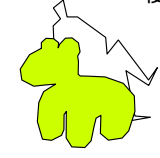
デザイン家具

乗る



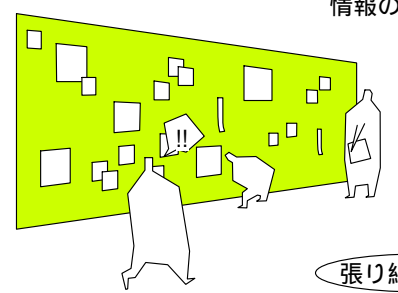
座る

寝そべる

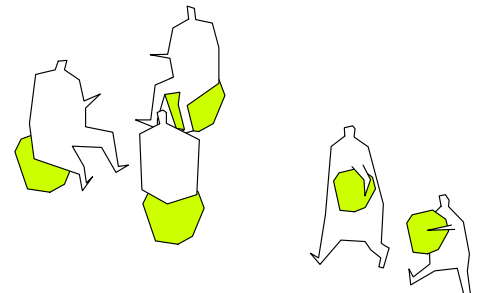


オブジェ家具

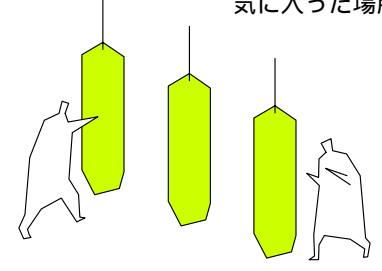
情報の共有



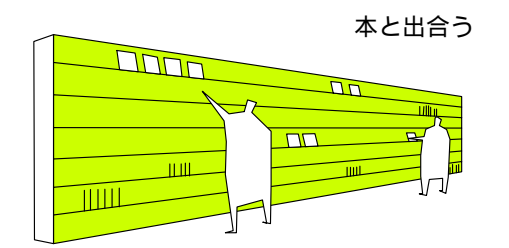
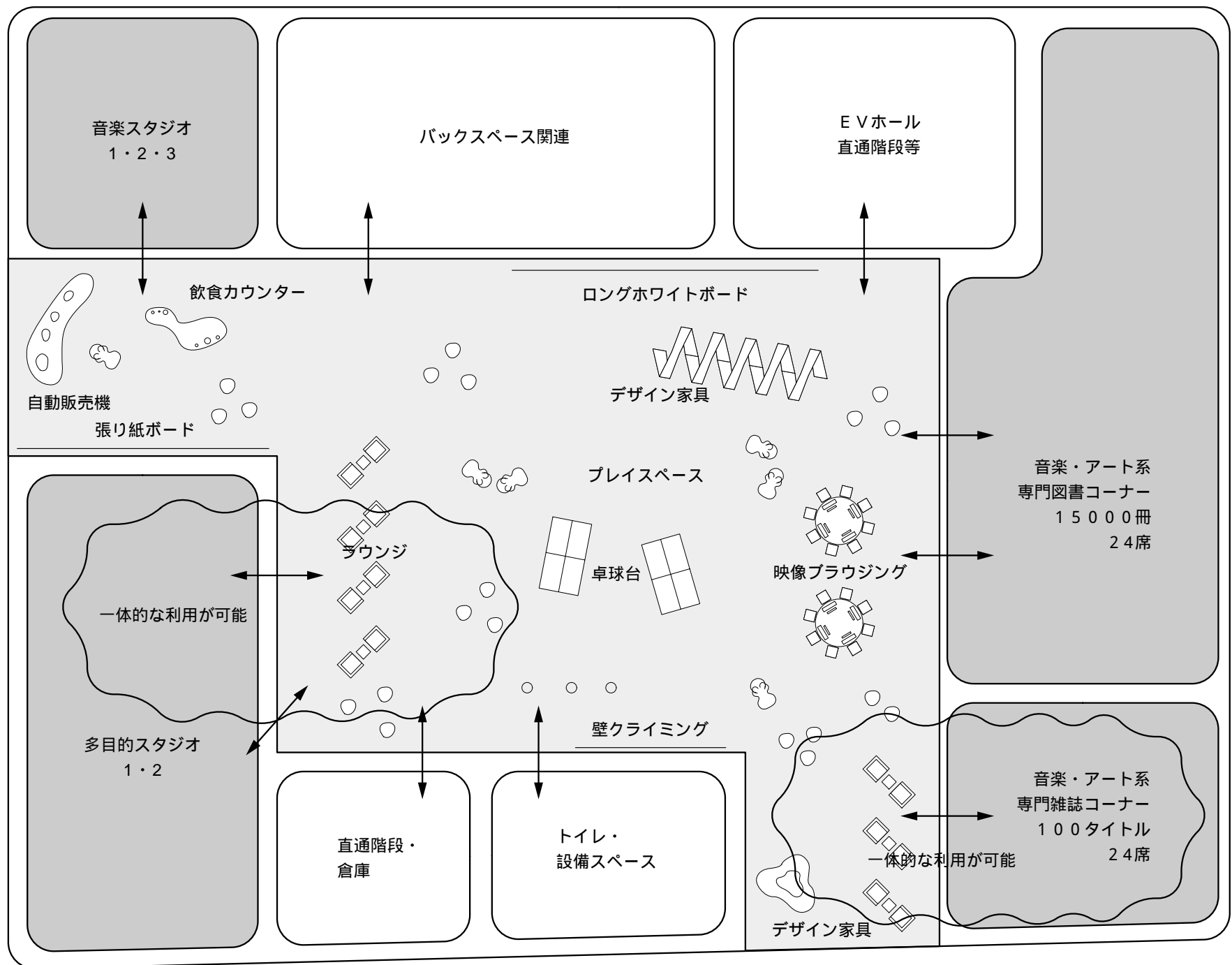
好きな場所に集まる



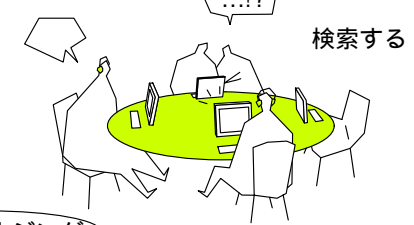
気に入った場所に持ち運ぶ



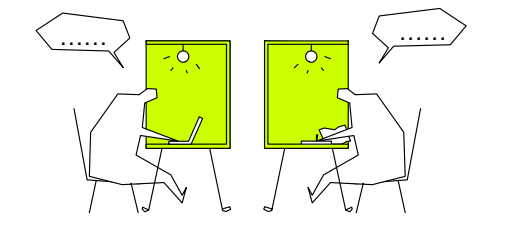
エクササイズ



映像・音楽を楽しむ



映像ブラウジング

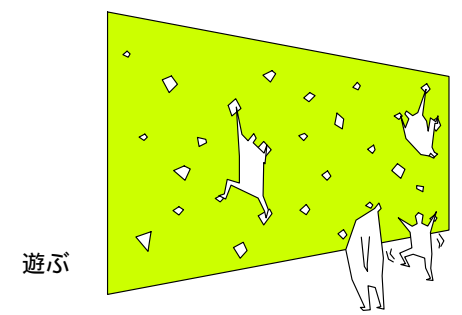


集中する

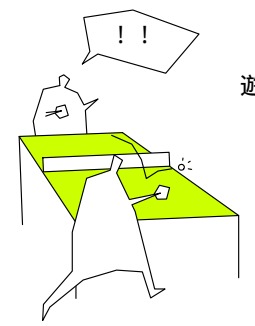
オープンな広場のようなスペースを中心に様々なコーナーが有機的につながります。スタジオや雑誌コーナーを開放することでさらに全体につながり、緩やかに機能が統合します。

案 B2F プレイスペース

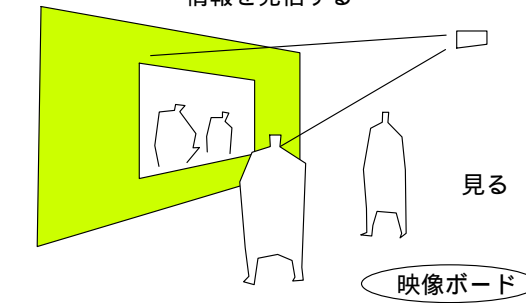
エクササイズ



遊ぶ



情報を発信する



武蔵野プレイス専門家会議資料 2006年11月13日

中間メモ

栗田 充治

1 「知の創造拠点」という基本コンセプトを堅持して頂きたい。

そのためにも、図書館を中心として、中学生以上の青少年の自主的活動、市民の自主的活動をリンクさせる運営方法を工夫する必要がある。特に、若い世代の再挑戦支援に力を注ぐ拠点施設という位置づけをしてもよいと思う。

小林委員が提起した「ビジネス支援」を高校生や大学生、若年市民層のキャリア開発支援や就業支援、NPOやNGOなどの情報窓口と案内、起業支援、市民事業を進める際の様々な情報の検索と提供、などを含んだ「課題解決型」図書館という幅広いイメージでとらえ直して、取り組むことが必要だと思う。

2 そのために、市内の図書館とのネットワーク化はもとより、大学図書館や高校図書館、行政や商工業団体とネットワークで結んで、専門的な相談業務を行う体制づくりが必要だ。

3 したがって、図書館部分の管理・運営は見識のある専門家が対応するかたちが望ましい。

4 新谷委員の言う青少年活動運営委員会と並んで、市民活動運営委員会も立ち上げて、施設管理者・図書館管理者との連携のもとに、運営に参画することが望ましい。また、運営委員会には利用者代表委員を含め、必要に応じて、利用者懇談会を開催する。

5 ブラウジングという概念にあまりこだわらず、使い勝手という点では、ごく普通の図書館のスタイルが望ましく、図書・雑誌・新聞（そのたチラシやパンフ、電子メディア）を置くフロア数は必要最小限に抑えた方がよい。

6 4階部分については、予算の観点、あるいは、景観の観点から、場合によっては、なくするという対応もあり得る。但し、4階に魅力的なカフェを置くという案には賛成である。レストランでもいいか？

7 1階の「知のギャラリー」は難しい。いろんな展開を考えることが出来るように、当面、どこに置くかは別として、スペース的には柔軟な配置を考え、レイアウト自由なオープンなスペースを確保しておけばいいと思う。

	意見
1	<p>武蔵野プレイスには「図書館・青少年健全育成・市民活動支援・生涯学習」の4つの機能を持つべく計画された。これらは何れも市民生活にとっても欠かせない重要な機能であるがまた活動範囲が広く、専門性もある。これらを一つの施設にし協同のメリットを発揮させるには、各々が独自性を持ちながら、相互の巧みな関連により、新しい時代に相応しい新鮮な活動をするためのノウハウが必要であり、また本当に四つが協力する姿勢が必要である。しかし現状は、この機会に地区に必要な四つの機能を一緒にした建設を目指しているに過ぎず、また協同のノウハウもそんなに簡単に出来るものでもない。このままでは四つが各々使い勝手の悪さに苦労し当初の望みも中途半端となり、とても「有機的活動」とは程遠いものとなるだろう。ここらでもう少しだけ元に戻り見直すのが良い。この計画では図書館部分が面積的にも一番多く、機能的にも他部門との関連性が強いので、図書館を中心としてその充実を図り、他の機能は図書館機能の一環として必要なものだけとし、全体面積を絞り込むのがよい。</p>
2	<p>1. 鬼頭委員長「館長公募検討してほしい」私は反対です。武蔵野市民と周辺地域の方のための施設なので館長は地域の中から出てくるのがふさわしい。むしろ若手市役所職員の中の志ある方に挙手して立候補してもらいたいです。大きな働き場所に率先して挑んでくるような意欲ある若手職員（女性なら尚よし）に名のり出してほしい。</p> <p>2. 小林委員のアイデアあふれる提案に対し、船崎さんが「素晴らしいと思うが一体誰がやるのかな？」と思わずコメントなさいました。はからずも今回のプレイスの計画の核心をついた発言だったのではないのでしょうか？知的殿堂というキャッチフレーズはカッコいいけれど「誰がどんな活動をするのか？」主役である市民の姿が見えないまま「多分こういう風に使うんじゃないの？」「とにかくハコモノは作ってあげるから、あとは使いなさいヨ」という姿勢。使い勝手を決めるのは実際に使う市民なのだからその意見を聞けばいいのに・・・。</p> <p>3. 鬼頭委員長「ボランティアさんの休憩室を設ける」これもプレイス計画の核心に触れる視点ではないか？なぜならば、プレイスで展開される大小のイベントを行うのは有給の外部講師ではなくて、ほとんど市民ボランティアであり、その市民ボランティアがイコールプレイス利用者そのものであるからです。そのボランティアさんたちの控室はイコール交流の場、情報交換の場ズバリそのものです。プレイスの計画にボランティアさんの居場所が設定されていないのは、根本的なミスであるし、かつ、鬼頭委員長の「休憩室」というとらえ方も少しズレていると思います。</p> <p>4. 境南町の身近な方にプレイスの是非について聞いています。春頃には「オープンハウスで8割賛成って結果が出ているんだから、さっさと進めるべき」「境南だって吉祥寺みたいに立派な施設がほしい」「武蔵野のチベットを返上して開けた駅前にしてほしい」「駅前の一等地を遊ばせておくなんてバカげている」というような意見が聞かれました。大方の人は「立派なものができるんですってねえ、うれしいわー」という程度の単純な認識。最近では「50億以上もかかるんですってねえ、」「1日100万円もかかるらしいね」「議会で決まっちゃてるからひっくり返すのも大変なんですってね」というように微妙にニュアンスが変わってきています。「境南に立派なものができる」と聞けば誰でも嬉しい。「賛成、賛成」と答えるでしょう。でも、オープンハウスの時の8割賛成というのはマイナス面を充分知った上での賛成ではなかったことをはっきり申し上げたいです。マイナス面も理解すれば、賢明なる境南町の方たちは「自分とこだけぜいたくする」というワガママは言わないと思います。ハコモノは最小限にし、そこで活動する市民の意見をじっくり聞いて基本設計を見直すべきです。</p>
3	<p>1) 新公共施設建設の基調は財政の節減にあると思う。市長は選挙での公約にも大型施設建設の見直しを掲げてきた。施政方針にもそれは継続され、プレイス（以下（仮）をつけない）削減案の提起もあった。これらを見てきた市民は市長のこの基本方針は変わらないと思っている。これが新公共施設建設の底流であろう。</p> <p>武蔵野市の施設建設は、歴大な小中学校の改築が待っている。いろいろな道路もある。それらの一つが「武蔵野プレイス」である。現存の施設で維持に手をかけるべきものも多々あろうし、「在るものは充分活かしていく」姿勢は市長の施政方針に貫いている。武蔵野市は財政力が豊かとはいえ少子高齢の時代にかつてのような増収増益はあり得ない。また市民の実感では、住民の福祉、医療、社会保障等の面で次第に厳しくなっているのを日々感じている時代であり、自治体行政の力点は住民福祉の充実にあるべきだと思っている、そういう時である。</p>

	意見
3	<p>そこで武蔵野プレイス建設に当たってはまず基本的に必要な機能を十分に満たし、その上にある程度の余力を持たせた施設とするに止めるべきだろうと思う。過剰は避ける考え方が必要。</p> <p>2) 新公共施設武蔵野プレイスの基本的に必要な機能は、図書館である。図書館を核とした複合施設として考えられている。</p> <p>これで市内三館構想が完了する。西部図書館は現状の有効な利用状態を維持しつつ児童図書中心にしてはどうか。プレイスに児童用スペースは充分にとれない。</p> <p>プレイスは市内三館の連携を保ちながら所蔵図書も分担し、三館一体で運営する。更に広域で図書を融通する。</p> <p>プレイスでは三層で図書館部分（ロビー、ギャラリーを含む）、第四層で小規模な集会室、視聴覚施設、会議室、各種の業務用施設等々がとれるのではないかと思う。</p> <p>更に図書館の性格について、私見では従来もってきたもの（仮に一般教養中心とする）に加えてビジネス（スモールを中心に）支援の側面を強化すべきだと考えている。社会的に雇用の不安定（特に若年層）の現実に公共図書館としてどう対応すべきかに加えて、女性の就業支援、団塊世代の退職にも新たな創業支援や社会貢献の支援、市民活動の活発化、NPOの支援等のいろいろな社会的要請がたくさんある。プレイスはそれらを視野においた公共図書館であってほしい。これには広域での情報の交流が想定される。例えば三鷹市は、創業支援、NPO支援でも一定の実績を持つので、そういう自治体との連携による武蔵野の公共的市民活動支援がつくられるなどとプレイスがキーになるなら素晴らしい。都立の職業訓練施設との連携もある。武蔵野市内の三館構想に止まらず図書館の新しい未来を開いてほしいと考える。当然施設面にもさまざまな必要が生まれるだろう。</p> <p>駐車場は身障者用、荷捌き用に限定してつくり西口とする。来館者用は持たない。公共交通利用で十分である。</p> <p>公共図書館でもその管理運営を民間に開放する指定管理者制度が施行されているが、「指定管理者」か「直営」かでは直営が望ましい。公共図書館は無料でサービスするものであり収益を期待できない。また業務の質を考慮するなら直営が適当と思われる。公共性に関連することとして付け加えた。</p> <p>3) プレイスの建築計画にある200人規模の集会場、ギャラリー、カフェテリア、青少年用の小規模スポーツ施設、市民活動用の小会議室、音楽スタジオ等については、周辺区域全体で検討する。</p> <p>まずスイングにはホール、集会室がある。市民会館には各種会議室、講座室、図書室、料理室、美術工芸室、音楽室、和室、小規模の集会室がある。学校開放（体育館、会議室）もあり、コミセン（桜堤、境南、西部には体育館、会議室）もある。市民の利用度数が今より激増するわけではない。</p> <p>そこで、ギャラリー、カフェテリアは建築計画の通り考えるものとし、200人集会場、小規模スポーツ施設、音楽スタジオ、市民活動用小会議室は、周辺既存施設を活用していく。個々に不十分な点があれば新たに手当をして補完する。公共図書館でさまざまな異種施設を抱えたところではその管理運営上にいろいろ困難があり、歓迎されていないのが現実と聞く。</p> <p>4) 景観については、既存の樹木はそのまま維持して図書館周辺の緑を極力保存する。北側公園も同様と考えるが、最小限益踊りが出来るような形を考えるのも一案。ただし中央図書館の南側公園のようなただの空地にせず、常時広場として利用する事も考える。広場を一体的に管理する。</p> <p>将来的に駅前歩行者デッキはつくらない。</p> <p>以上 定性的に考えるところを述べました。</p>
4	<p>専門家会議を傍聴させて頂き、過去の議事録及び資料、市民からの要望書も読ませて頂きました。専門家会議の議事内容について、強い希望を抱いております。</p> <p>ぜひ検討して頂きたく、初めての機会ですが、この検討要望書を提出致します。</p> <p>1. 「プレイス(仮称)」にわざわざ駐車場まで設けることについては、たった32台の駐車場のために10%以上(1200㎡)の建築面積が奪われること、何億円もの税金が使われること、地下水脈への影響も懸念されること、環境・交通政策上も妥当なのか等の種々の検討すべき問題が残されています。</p> <p>果して駐車場を設置することが妥当なのかとの疑問を多数の市民が抱いており、問題点が市民からも指摘され、意見が出されていることが上記の資料からも伺えます。</p> <p>2. 駐車場設置は、「駐車を荷さばき用や障害者の駐車用に限定することを検討する」との「基本計画策定委員会報告」にもとづき、これに沿った検討がなされるべきところ、その検討は充分なされていないようです。</p>

意 見

基本計画には、駐車は「荷さばき用や障害者用に限定することを検討する」と明記されています。しかしながら実際には、上記のように「荷さばき用や障害者用に限定すること」をどのように検討したのか、その結果、需要をどのように算定したのか、全く開示されていません。

基本計画にもとづいた上記検討を行った過程と結果を示す資料は見当たらないように思いますが、いかがですか。確認をお願い致します。

上記の点について、需要の検討がなされないまま、「32台の駐車場」の設置を決定し、実施することは、多額の税金投入と種々の影響を伴うだけに、杜撰とまでは云わなくとも、行政としての姿勢が問われることになるでしょう。

3. 「プレイス(仮称)」に「32台の駐車場設置義務」があるとする前提は、都条例を誤解しているのではないのでしょうか。

専門家会議に提出された事務局の資料によると、「プレイス(仮称)」の「設置義務32台」となっています。

「基本計画」を含めて、全ての議論は「32台の設置義務がある」ことを前提に行われているようです。しかし、果して「プレイス(仮称)」に「駐車場32台(又は31台)の設置義務」があるのでしょうか。甚だ疑問です。

(1) 東京都駐車場条例第17条第1項は、設置義務台数についての一般規定を置いたうえで、「知事(「事務処理の特例に関する条例」)により、市長)が特に必要ないと認める場合は「この限りでない」ことを明文の規定として定めています。

駐車場設置に関しては、市長が「地域の特性に応じ」具体的には

- ①「プレイス」(仮称)の図書館を主体とする建物の性格、
- ②JR駅前であって西武鉄道、ムーバス、各民営バスのターミナルでもある利便性が極めて高い立地条件、
- ③環境・交通対策、
- ④巨額の費用等

4 を総合勘案して合理的な裁量により駐車場設置の有無、台数を決することができます。

「場所を活かす。駅前の利便性」は新公共施設基本計画策定委員会の「基本的な考え方」で提言されている考え方です。駐車場問題について、上記の観点から判断を下すことは市長の責務でもありましょう。

(2) 現在、市長が合理的裁量を下すのを制限する規定は全く存在しません。

過去には、駐車場設置免除を「保育園・高等学校等用途で、職員及び外来者の自動車の乗り入れを禁止しているもの」等とした東京都の部長による「平成4年通知」が存在したことがあります。

しかし、この「平成4年通知」は、現在刊行されている関係書籍やネット上にも一切存在せず、死文として扱われているものです。仮に形式上残存しているとしても地方自治を推進する趣旨から、都の一部長の通知は首長である武蔵野市長が地域特性に対応して行う判断を拘束するものではありません。これは、改正された地方自治法第252条の17の3、4、第15条の規定からも明らかなことです。

(3) 国レベルの施策としても、駐車場法では「自動車の駐車需要を生じさせる用途」であるか否かが重視され、また国交省「駐車場施策にかかる検討委員会」の平成16年4月提言「附置義務制度を中心とした駐車場整備のあり方について」においても、「地区ごとの特性を必ずしも十分反映していない原単位の一様な適用により、駐車需要の実態に対して効果的ではない駐車場整備が行われている。」現状が弊害として指摘されております。

また、地区特性に応じた手法の活用例として「利便性の高い公共交通が発達し、地区の大半が大規模な業務施設である地区においては、都市内一律で定めた原単位が、実際の駐車需要に比べると過大になる場合がある。」ことを挙げ、一律の原単位ではない別途基準を採用することが考えられると述べています。

(4) したがって、「32台の設置義務がある」との誤った法律(条例)解釈に依って、これを根拠に「荷さばき用又は障害者用に限定した場合、駐車場を何台設置する必要があるか」の精査を怠ったまま32台の駐車場を設置することは、このための費用として税金からの支出が数億円に達すると考えられるだけに、とても市民の納得を得られるものではないでしょう。

「プレイス(仮称)」について、「32台の駐車義務」を前提としない施策を推進めることが、今後の駐車場行政にとって大変重要で有益なことなのです。

意見

4. 「32台設置」の実質的な理由は極めて薄弱です。

第4回専門家会議に対する事務局の書面に、上記「設置義務32台」と記載されているのは条例の誤解であるばかりでなく、32台の駐車場に巨資を投じる実質的な理由も薄弱であると考えられます。

(1) 事務局の口頭発言によると、東京都に問い合わせたところ、①「保育園・高等学校等で、職員及び外来者の自動車の乗り入れを禁止している以外の先例がない」との発言があったとのことです。

しかし、「先例がない」ことを理由とすることは「武蔵野より始めよう」という『基本構想』の精神からも余りにもかけ離れたもので、感心できません。市(長)は先例の有無によってではなく、条例の趣旨と地域の性質、建物の性格や環境への配慮にもとづいて合理的な裁量権を行使されるよう希望します。

(2) また、②「プレイス(仮称)」の利用者が不特定人であることや、③「民間指導の立場から公が駐車場を付置しないのは適当でない」との発言もあったようです。

しかし、②は「外来者の自動車乗入れ禁止」を周知徹底することにより解決すべき問題です。既に多くの図書館は「外来者の自動車乗入れ禁止」ですから、建物の規模と利用者の範囲が若干広がったとしても、そのことのためにわざわざ駐車場をつくる必要があるのでしょうか。自動車で行っても、図書館に駐車場がないのは、図書館内で喫煙できないのと同様に現在では利用者の常識です。

これを知らない利用者には知ってもらうほかありませんし、また「プレイス」に駐車場がないことを実際に体験して学んでもらうのも社会教育上有益なことです。

高齢者や幼児連れの母親への配慮という発言も過去にはあったようですが、駐車場建築費が巨額であることを考えれば、別なサポート方法を模索した方がはるかに賢明で親切な施策です。

(3) つぎに、③「民間指導の立場」云々の議論についても、「プレイス(仮称)」に駐車場設置を免除することは、「公」と「民」を差別的に取り扱うことを意味するものではありません。地域の特性や建物の性格、環境と交通政策、立地条件等にもとづいて法(条例)の趣旨を厳格に適用しようとするものですから、「民間指導」においても厳格に条例を適用するのに資すことはあっても、「民間指導」に不都合を生ずることはないでしょう。「民間の指導の立場」から「プレイス(仮称)」にも駐車場を設置すべきとの議論は、税金投入を正当化する理由にはなりません。

(4) なお、仮に「平成4年通知」を参照する立場に立ったとしても、「プレイス(仮称)」には駐車施設がないことをまず周知徹底することと定めたい「保育園・高等学校等で、かつ職員及び外来者の自動車の乗り入れを禁止しているもの」に対する設置義務免除通知を参照し、「図書館を主目的とする公共施設で、かつ職員及び外来者の自動車の乗入れを禁止するもの=プレイス」に「通知」を準用して設置義務を免除することは、上記通知の趣旨から何ら解離するものではありません。

「プレイス(仮称)」に駐車場を設置しないことが駐車場条例及び駐車場法の趣旨に合致しています。

(5) 「プレイス(仮称)」のような利便性の高い立地条件の公共施設に高価な駐車場を作ってしまったら、「駅前の利便性を活かす」という前記提言「基本的な考え方」にも反することになってしまいます。

5. 私も「プレイス(仮称)」に荷さばき用、障害者用に3台程度の駐車場スペースは必要と考えます。この場合と自動車32台(又は31台)の駐車場を設置することとは、出入り口の設置位置も異なるはずで

す。

(1) 専門家会議は権威ある会議です。32台の駐車場設置が義務であるか、また妥当であるか、についても検討し、その結果にもとづいて出入り口位置についても検討して頂きたいと希望しております。駐車台数は出入り口の位置検討と密接な関連を有する事項にほかなりません。

繰り返しになりますが、「設置義務32台」を前提とすることは貴会議に対するミスリードです。

(2) しかしながら、法律家や行政専門学もおられないことから、ご判断をお願いすることは重荷とも推察致します。

もし、そうであるならば、御判断にあたっては、駐車場設置を当然の前提とするのではなく、32台の駐車場設置の場合及び、3台前後の平面又は立体駐車の場合の各々について出入り口の位置の検討を行なって頂き、駐車場設置の是非自体については市民全体の問題として、広く市民の判断に委ねる旨を明示して頂くのもよろしいかと存じます。

以上のとおり御検討を強くお願い申し上げます。

4

	意見
5	<p>1. このまちの本質に関わることを跳び越えて「どこのまちの夢ものがたり？」と傍聴者もびっくりの気楽な発言が出るのはどういう訳か？</p> <p>当会議は武蔵野市の今後を左右する最大重要案件を検討する重責を負っている。まちが求めているもの、人が求めているもの、を見極めて、問題解決に向け真摯に白熱の論議を闘わせてほしい。私たちは注目の会議に立会い、そして、共に考えたいのだ。軌道修正を願いたい。</p> <p>2. 場所があれば、大きな物（＝ハコもの）を造る、という短絡的な施設論から離れ、都市空間を大きな環境として、市民みんなのものとして考え、豊かにイメージすることからまちづくりは始まる。その理屈のところから思考して下さい。</p> <p>3. 基本計画策定委員会の基本方針 1. 基本的考え方（1）「自然との調和を図る」以下概略—緑の環境価値を重視した施設とする。北側の都市計画公園と一体的な整備を行う。既存の大き木を活かし可能な限り緑を配置し、公園と一体化した緑に囲まれたシンボリック空間を駅前に形成し、自然と調和した都市環境を創出する。— 基本的考え方の5つの柱の内一番目の一番大事な項目のこの記述は、基本計画のどこに生かされているか問う。基本設計の模型をみても西側の高木が残るだけで、建物を囲んでいるかに見える木は、歩道の街路樹を借景としてか紛らわしく画き込んでいるだけのこと。どだい敷地一杯の建物で木を植える余地などないのだ。北側公園部分も 98 年に議会で議決された「緑が生い茂る都市公園」のはずが様変わり、大きなイベント広場が占拠し植栽はほんの申し訳程度。基本的な考え方の重要項目に背き、空文化したのは設計者なのか、議員なのか、職員なのか？誰の責任なのですか？</p> <p>4. この計画の長い経緯を経て、基本設計の段階で明確にイベント広場が絵として現われた。1年に1度の盆踊りのために貴重な緑の公園スペースを犠牲にしているはずはない。盆踊りなど隣のタクシー用モータープールを借用する手だてもあるはず。北側の緑の公園につながる南側建物施設について、清水委員の意見「フォーラムは他施設で代替し、4階部分を削り3階に。北側公園の日照のためにも」は大歓迎（見直し検討課題にして下さい）、もう一歩進めて、不用不急の機能を省けば川原田氏のプロポーザルコンペ案に近づける。1～2階に抑えられれば屋上緑化が北側の緑と目線の中でつながり、緑の集積、ボリュームとして、存在感を強くアピール出来ます。ついでに言えば、プレイス関係者が信奉する仙台メディアテークは100万都市の大施設であり、当市とは比べようもないし、言わばバブルの生き残り、遺物のようなものかも。時代が変わって、やはり清水委員が誉めた金沢美術館は1階+地下で川原田プロポーザル案と同類のイメージ、コンセプトであり、これが今様トレンドなのだ。</p> <p>5. このまち、この土地にふさわしい、美しい心やすらぎ景観としての雑木林が認知されて伊勢丹3階テラスにお披露目、小金井駅南口駅広にも雑木林が生まれます。(11.7朝日新聞)。時宣を得て、雑木林戦略の波及効果は絶大です。中央線の連続連携の相乗効果も見込まれ、いいだしっぺの武蔵境南口駅前としても乗り遅れませぬように。</p> <p>今、世情は緑大好き、トレンドは雑木林。真に市民が望むところのものをちゃんとしっかり考え、正しい道を通して下さい。以上</p>
6	<p>①事務局は前回会議の感想、提言を最後の到着信まで開示すると称して、委員には開会まで提供しなかったのは何か作意を感じる。完璧を求めるのは否定しないが、一定の時点で区切り、追加分は会場配布で対応出来ます。②委員の発言で駐輪の件がありましたが、中央線高架計画の内でJRと交渉がある筈だが、そういう点の説明を先に受けているべきであろう。委員各位は、平成11年3月発行の故藤吉ひろのり議員の選挙ビラには、土地購入価格は58億円であり、国から8億円、都から2億円の補助が交付されたとあるが、補助に関わる条件を再度調査いただきたい。④建築費予測は平成10年2月20日「農水省跡地利用検討特別委員会」で既に約60億円と見積られていたが、実に平成17年7月の説明会まで公表されなかった。事務局は機会があるごとに市民に説明したと前々回説明されたが「充分とか、充分過ぎる程」とかの表現はなく、ただ事務的に進めたと解釈しています。平成10年に地元説明会について、周辺に6000通配布したとの説明を受けたが、我が家は一般紙は購読していなかったので市報は入らず、当該地に今年行った「オープンハウスの案内」のように大々的に告示されなかったの知らず、私の納税者としての権利は無視されたままであり、建設そのものに反対である。建物の体積はこの平成10年当時、払い下げの為に作った計画と殆んど変わりなく、市は「本当にこの計画で、この金額で、この設計で、この市債残高増加で、この維持費と利子増の固定費増加により、中止しなければならぬ条件も出るが、「建設しますか？」という問い掛けをしていただきたい。</p>

	意見
6	<p>市民が反対が多ければ、補助金の返上や新たな補助金を求めなければならないであろうが、それが地方公務員のプロとしての仕事である。市役所の仕事は99%は普通の市民でも執行できます。その点を良くお考え下さい。</p>
7	<p>一步前進、二歩後退、二歩前進、一步後退、試行錯誤の会議の進行を暖かく見守っております。</p> <p>新谷先生へ ご専門が青少年問題ということとはよくわかっておりますので、それについてのご意見はよくよく分かりますし、ごもっとも思うこと多々ありますが、専門家会議委員としては、ぜひ、武蔵野プレイスどうあるべきかという全般のご意見もいただきたく思います。傍聴意見全てにお目通しいただければ幸いです。</p> <p>小林先生へ こんなにも夢をひろげて大丈夫なのでしょう。</p> <p>鬼頭先生へ 先生の座長というお立場、又、どこまでふみこむべきかでゆれるご心中、お察し申し上げます。ぜひ、再度、傍聴者意見の読み返しの上、会議におのぞみいただきたく存じます。</p> <p>栗田先生へ おっしゃる通り、市民との意見交換会のご提案が通りますように切にのぞみます。</p> <p>清水先生へ 金沢美術館構想等、すばらしい数々のご意見おし進めて下さい。</p> <p>近藤先生へ 9月28日のご意見：盛り沢山（基本構想は）すぎる。全ての人を対象にしては、こま切れ機能しか持たせられなくなるので絞るべき、とのご意見は委員の先生方全員の総意と感じますので、どうぞよろしくお願ひします。</p> <p>先日開園した（11/3）吉祥寺伊勢丹屋上の雑木林庭園（市開発公社管理）、先生にもぜひご覧いただきたく思います。吉祥寺北口ロータリーとの緑の連携、そして、これからは境のプレイスとの緑の連携へとつながる構想となりますように。</p> <p>「地方の再生があるとすれば駅から始まる」、建築家 内藤廣さんがおっしゃるように、JR 日向駅、高知駅、旭川駅と並べるまでもなく、武蔵境駅も未来を見ずえた駅構想であってほしいと切に願ひます。</p>
8	<p>1. 新谷委員提案について</p> <p>武蔵野プレイス（仮）は、一応「知的創造拠点」として予定されているものです。青少年の「知的創造」に資する仕掛けは工夫されてもよいと思いますが、目的や意図を特定せずに利用できる「居場所」は「知的創造」の起点としてはイメージしにくいものであり、プレイスの目的にあわないのではないのでしょうか。</p> <p>2. 小林委員提案について</p> <p>①武蔵野市全体としての情報基本計画をつくる。</p> <p>②視覚表現としての書棚作りコミッティーをつくる。</p> <p>③知のギャラリーはイベントの場として、自主運営フォーラムととらえる。</p> <p>上記①～③については賛成です。そのような視点から、本当に必要な施設はどのようなものなのかの検討と、どのようなプロセスでそれが実現可能なのかのビジョンも示していただければと思います。また、フォーラムか会議（これらは他施設で可能と考えますが）は、閉じた空間ではなくオープンスペースで行える工夫とか、行われている内容を館内他所で視聴し、その場での参加を可能にするような工夫もあってよいと思います。</p> <p>「ビジネス支援」は、元々の計画にはなかったもので、悪いとは思いませんが「知的創造拠点」というコンセプトとはズレがあるのではないのでしょうか。プレイス（仮）とは別に考えた方がよいテーマではないかと思ひます。</p> <p>また、「知的創造」を誘発するのは、イベントのみではありません。ある種のたたくまいも重要です。私は、個人的には木々の中にある、木造低層建築で、曲線が多用してあるものをイメージします。敷地一杯に真四角の大きな建物が建っていて、「入ってみたい」という気持ちが誘発されるのでしょうか。</p> <p>3. 鬼頭委員長提案について</p> <p>時間が短く、十分には話されなかったと思いますが、①1F を賑やかにする②カフェを拓げる、という点には賛成です。カフェはまさに人が自由に出入りできる所です。小林委員のアイデアと組み合わせれば様々な企画が可能でしょう。環境に負荷をかけないカフェの形式を追求し、フェアトレードで仕入れた豆ややむ茶を出す。一角ではオープンスペースで NGO や NPO で活動している人々の話をきけるように工夫してもよいのでしょうか。</p> <p>図書館機能の運営はキチンとした考え方をもって行っていただきたいので、現在の指定管理者制度を使うという考え方に対しては、再考して頂けるよう、報告書に盛り込んでいただきたいと思ひます。</p> <p>以上、ご検討ください。よろしくお願ひします。</p>